

多賀城市文化財調査報告書第86集

山 王 遺 跡

第58次調査報告書

平成 18 年 7 月

多賀城市教育委員会

序 文

特別史跡多賀城跡をはじめとする多くの埋蔵文化財は、本市が長い年月をかけて連綿と引き継がれてきた歴史のまちであることを物語っております。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは、我々の重要な責務のひとつであると考えております。このため、当教育委員会としても、開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適正に保護し、その活用に努めているところであります。

さて、今回報告いたします山王遺跡第58次調査は、平成17年度に受託事業として実施した発掘調査であります。小規模な調査ではありましたが、古墳時代・奈良・平安時代・中世・近世と各時代にわたる遺構・遺物が発見されました。近世では18世紀後半から19世紀初め頃の陶磁器や木製品、金属製品などが多数出土し、当時の「南宮村」の豊かな生活の様子が偲ばれます。また、古墳時代前期では遺構面を違えて竪穴住居跡が発見され、これまで不明であった4世紀頃の集落の存在を確実なものとするなど、貴重な成果を得ることができました。

近年、このような小規模な調査が増加してまいりましたが、市民の皆様や地権者並びに事業者の方々のご協力のもと、少しずつではありますが着実に調査成果を積み重ねているところであります。ひとつひとつの成果は断片的なものであり華々しさに欠ける感がありますが、このような成果の蓄積により本市の歴史が少しずつ紐解かれていくものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、ご理解とご協力をいただきました地権者をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成18年7月

多賀城市教育委員会

教育長 菊 地 昭 吾

例　　言

1. 本書は、平成17年度に実施した山王遺跡第58次調査の成果をまとめたものである。
2. 遺構の名称は、第1次調査からの連続番号である。
3. 平成14年4月1日の測量法改正により、経緯度の基準は日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るために、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。
4. 掘図中の高さは標高値を示している。
5. 土色は『新版標準土色帖』(小山・竹原：1996)を参考にした。
6. 古墳時代の須恵器及び近世陶器の年代・産地に関しては東北大学埋蔵文化財調査室藤沢敦氏、堤人形についてはつつみ人形製造元である芳賀強氏にそれぞれご教示を得た。
7. 本書の執筆・編集は、調査員全員の協議のもとに武田健市が行った。なお、本書作成に係る出土遺物の実測図作成・トレース・写真撮影等の作業については、以下のように分担した。
 - ・実測図作成：武田、大友貴晴・トレース：武田、柏井容子・写真撮影：廣瀬真理子、武田
8. 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I. 遺跡の環境と調査区の位置	
A. 地理的環境	1
B. 調査区の位置と周辺の調査成果	1
II. 調査の経緯と経過	4
III. 調査成果	
A. 層序	5
B. 発見遺構と遺物	7
1. VI層上面検出遺構（古墳時代前期）	8
2. V層上面検出遺構（古墳時代前期）	8
3. IV層上面検出遺構（古墳時代中期・奈良・平安時代）	16
4. III層上面検出遺構（中世）	31
5. II層上面検出遺構（近世）	34
IV. 考察	
A. 遺構の年代	56
B. 各時代の概要	64
V. まとめ	68

調査要項

1. 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾
2. 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 佐藤慶輝
3. 現地調査員 多賀城市埋蔵文化財調査センター 研究員 武田健市
発掘調査員 岩永知子 廣瀬真理子
大友貴晴
4. 調査協力者 樋口清彦 株式会社レオパレス21仙台北支店
5. 調査従事者 赤間かつ子 井口幸男 伊丹一欽 遠藤一代 大山貞子 小野寺恵子 佐藤十五
塙井一征 鈴木芳恵 田中裕子 藤澤拓司 宮川ハルミ 柳 裕順 渡辺ゆき子
6. 整理従事者 遠藤友美 高木一枝 中村千恵子 松崎祥子 村上和恵 横山佳織

遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	現地調査員
山王遺跡第58次調査	南宮町19	平成17年10月5日から 平成18年1月30日まで	163m ²	武田・岩永 廣瀬・大友

凡　例

- 本書で使用した遺構の種類を示すアルファベット記号は以下のとおりである。
S I : 積穴住居跡 S E : 井戸跡 S D : 溝跡 S K : 土壙 S X : その他の遺構
- 奈良・平安時代の土器の分類記号は、『市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II』(多賀城市教育委員会 2003)に従った。
- 瓦の分類は、『多賀城跡 政庁跡 図録編』(宮城県多賀城跡調査研究所: 1980)・『多賀城跡 政庁跡 本文編』(宮城県多賀城跡調査研究所: 1982)に従った。
- 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期角材列存続期間中に降灰し、承平4年(934)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907~934年の間と考える見解と(宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』: 1998)、「扶桑略記」延喜15年(915)7月13日条にみえる「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ、915年とする考えがある(町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』: 1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』: 1991)。当センターでは考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

I. 遺跡の環境と調査区の位置

A. 地理的環境

多賀城市は、宮城県の中央や北東寄りに位置し、南西側で仙台市、北西側で利府町、北東側で塩竈市、南東側で七ヶ浜町と接している。市の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は松島・塩釜方面から延びる標高40~70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相を見せている。沖積地は仙台平野の北東端部に相当する。仙台市岩切方面から多賀城跡にかけての県道泉塩釜線沿いには標高5~6mの微高地が延びており、その北側は利府町に跨る低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などが分布しており、海岸に近い地域には浜堤跡も確認できる。このうち、県道沿いに確認できる微高地は七北田川や砂押川の沖積作用によって形成された自然堤防と考えられており、本遺跡をはじめ新田・市川橋遺跡など市内でも大規模な遺跡が隣接して所在している。

本遺跡は、七北田川の東岸約1km付近から砂押川西岸にかけての微高地及び低湿地上に立地している。東西約2km、南北約1kmの範囲に広がっており、市内でも最大規模の面積を有している。遺跡内の地形について詳細にみると、中央の県道沿いにある東西方向の微高地は、遺跡西端付近が標高6.5m前後と最も高く、南東側に向かって緩やかに傾斜している。南東部は標高3.5m程の低湿地であり、砂押川西岸に至る範囲は現在水田地帯となっている。また、遺跡の南側には東西方向に延びる旧七北田川の河道が埋没しており、昭和22年に撮影された航空写真にその痕跡を確認することができる。

B. 調査区の位置と周辺の調査成果

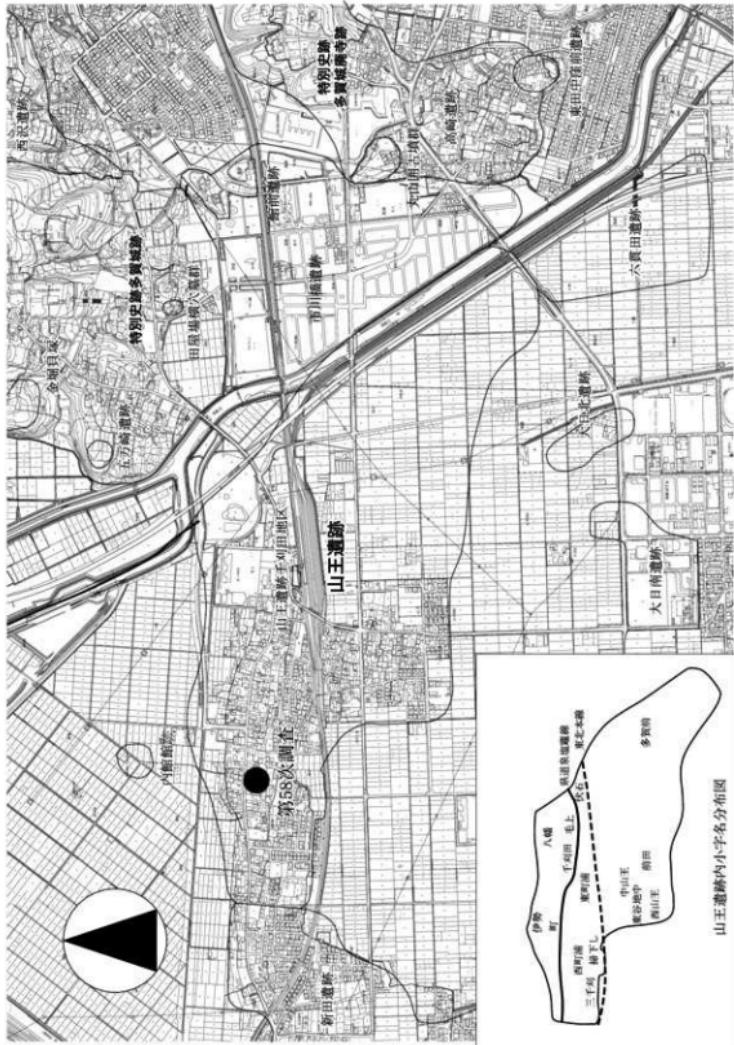
調査区は本遺跡西寄りの南宮字町地区にあたり、前述した微高地上を東西に貫く県道泉塩釜線の南側に位置している。現況は宅地であり、標高は6m前後となっている。これまで本地区周辺では市教育委員会や宮城県教育厅文化財保護課により数カ所で発掘調査が実施されており（第2図）、古墳時代から近世にかけての遺構・遺物が多数発見されている。以下時代ごとに概観してみる。

古墳時代：前期では八幡地区から竖穴住居跡や水田跡が発見されている。水田跡については微高地南側の掘下し地区をはじめ西側に隣接する新田遺跡の各地点で確認されているが、竖穴住居跡の発見例は少なく、該期の土器が出土する東町浦地区や多賀前地区北側などに集落の存在が想定されている。中期では町地区で竖穴住居跡が7軒発見され、西町浦地区でも土壤から多量の遺物が出土している。東町浦地区や八幡地区でも該期の遺構・遺物が多数発見されていることから、大規模な集落が展開していたものと考えられる。一方、後期になると本地区周辺では遺構・遺物はほとんど確認されなくなり、東側の八幡地区や西側に隣接する新田遺跡に集中して認められるようになる。

奈良・平安時代：奈良時代では、八幡地区で掘立柱建物跡や竖穴住居跡、溝跡が発見されているが、本地区周辺では該期の遺構はほとんど確認されていない。8世紀後葉頃になると多賀城外の幹線道路である南北大路と東西大路が整備され、このうち東西大路については東町浦地区で発見されている。平安時代では、県教委が実施した町地区的調査で、北2東西道路跡をはじめ多数の掘立柱建物跡が発見されている。当該区は城外に施工された方格地割りの西端と考えられている西9南北道路からさらに西へ200m離れた

1000m
S=1/15000

第1図 山王遺跡と周辺の遺跡





第2図 第58次調査区と周辺の調査区

地点に位置しているが、遺構のあり方や変遷が地割り内と同様であることから、このような地割りがさらには西へ延びる可能性も指摘されている。一方、それ以外の地区においても、西町浦・東町浦・堀下し地区で掘立柱建物跡や溝跡、土壤などが発見されており、建物跡の多くは方格地割りの方向と概ね一致している様子が認められる。

中世：発見された遺構が少なく、不明な部分が多い。しかし、本地区南側の堀下し地区では、東西28m以上、南北34m以上の区画溝を巡らせた屋敷跡を発見しており、東側の八幡・伏石地区や西側に隣接する新田遺跡寿福寺地区などと同様な屋敷跡の可能性が推測されている。

近世：本調査区は塩竈街道を踏襲しているとされる県道泉塩釜線に面しており、江戸時代の「宮城郡南宮邑（南宮村）」にあたる。南宮村は17世紀初頭に伊達家臣成田左馬重勝が移住した地であり（註）、本調査区西側にある慈雲寺もその時に伊達郡成田村より移設したものとされている。これまでの調査では、西町浦・町・伊勢各地区で近世の掘立柱建物跡や区画溝跡、井戸跡などが発見されている。西町浦地区では、かつて酒造業を営み塩竈一の宮の「御神酒屋」であった賀川家の敷地内を調査している。大規模な東西・南北の堀跡と井戸跡が発見され、堀跡からは陶磁器や土器・木製品・石製品が多量に出土している。町・伊勢地区でも堀で区画された屋敷跡が発見され、多数の掘立柱建物跡や井戸跡が確認されている。

このような周辺の成果を踏まえて本調査区をみると、古墳時代中期や近世の遺構・遺物が多数発見されている地区に位置しており、また古代の幹線道路である東西大路も南側の比較的近接した地点に推定線が求められている。したがって、この頃の遺構が発見される可能性が非常に高い場所であることが分かる。しかし、古墳時代前期や中世の様相については不明な部分が多く、今後の調査成果に負うところが大きい地区といえよう。

（註）鈴木武夫『仙臺叢書 伊達世臣家譜 第2巻』 1975

II. 調査の経緯と経過

本件は、南宮字町地内における長屋新築工事に伴う本発掘調査である。平成17年5月、地権者より当該区における長屋新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、基礎工事の際に直径60cm、長さ6.5mの地盤改良杭を88本打ち込む計画であったため、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、基礎工法について盛土内で収まる在来工法への変更を依頼したが、建物を支えるための地耐力が十分得られないことから、当初計画の基礎工法で施工するとの連絡を受けた。これを受け、6月10日より地権者と本発掘調査に係る調査期間及び費用についての打ち合わせを行い、10月4日に本件に係る発掘調査委託契約書を締結した。なお、調査に際しては対象区北側に地権者所有のプレハブがあることから、初めに南半部の調査を開始し、プレハブの撤去完了を待って北半部の調査を行うこととした。

調査は10月5日より実施した。重機により対象区南半部の表土を除去した後、プレハブ、簡易トイレ、安全用の防護フェンスの設置など調査に係る環境整備を行い、7日より作業員を投入して調査機材を搬入した。11日より調査区内の精査を開始し、調査区南半部のⅡ層上面で近世のS D1251～1253・1255溝跡やS K1254・1256～1260土壙を発見した。13日よりこれら埋土の掘り下げを開始したが、ほぼ同位置で遺構が複雑に重複していたことや、陶磁器・木製品が多数出土したことから、この作業に多くの時間を費やすこととなった。14日、実測図作成のための基準点(S N00:X=-188,950.000, E W00:Y=12,379.000)と、それを基準とする東西・南北それぞれ3m間隔の測量杭を調査区内に設置し、埋土掘り下げの終了した遺構から、写真撮影及び平面図・断面図の作成を随時行った。10月24～28日、調査対象区北側にあるプレハブ撤去のため一時作業を中断し、これが終了した10月31日に改めて重機により北半部の表土除去を行う。南半部同様Ⅱ層上面で遺構検出作業を行ったが、近世の遺構がほとんど確認されなかつたことから直ちにⅢ層の掘り下げを開始する。その結果、約40cm下層のⅢ層上面で中世のS K1249・1250土壙、さらに20cm下層のⅣ層上面で古代のS D1240～1243溝跡・S K1244土壙、古墳時代中期のS I 1234・1235竪穴住居跡を発見した。南半部でも11月25日から下層遺構の検出に取りかかり、Ⅳ層上面で古代のS E 1248井戸跡やS K1245～1247土壙、古墳時代中期のS I 1236・1237竪穴住居跡を発見した。古代・古墳時代中期の遺構については、埋土がⅣ層と近似していたため検出作業に時間を要したことや、12月に入り雪の日が続いたこともあり、12月下旬までこれら遺構の調査を行うこととなった。12月20日、概ねⅣ層上面の調査が終了したことから、調査区の全景写真を撮影する。一方、それ以前よりS I 1234竪穴住居跡下層に炭化物層が存在すること明らかとなっていたことから、写真撮影終了後その性格を確認するために一部掘り下げを開始した。その結果、この炭化物層が古墳時代前期のS I 1232竪穴住居跡の床面直上に堆積したものであることや、S I 1232竪穴住居跡がⅣ層に覆われていることが確認できた。しかし、時期的に年末に迫っていたことからこれらの調査は年明けから開始することとし、調査区を厳重に保護して一端調査を終了した。平成18年1月10日からⅣ層の掘り下げを開始し、前年に確認していたS I 1232竪穴住居跡と新たに南半部で東西方向のS D1233溝跡を検出した。このうち、S I 1232竪穴住居跡では床面直上を覆う炭化物層が火災により生じたものであることが明らかとなった。また、S D1233溝跡からは小型の鉢や大型の壺がほぼ完全な形で発見された。一方、調査区中央部では遺構が確認されなかつたことから、1月18日より土層観察用のサブトレンチを設定し、中央部の土層堆積状況の確認及び断面図作成の準備に取りかかった。ところが、V層下層で新たに炭化物の堆積が認められたことから、さらに古い時代の竪穴住居跡の存在が

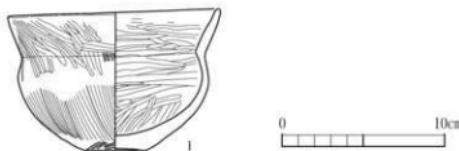
予想された。そのため、V層上面検出遺構の調査を継続しつつ、サブトレンチを設定した中央部付近のV層除去を開始し、20日にその下層（VI層）でS II 1229堅穴住居跡とS D 1230溝跡、S K 1231土壤を発見した。これらの遺構はV層そのものが埋土となっていることから、大規模な冲積作用によって埋没した可能性が考えられた。1月24日、これら遺構の調査が終了したため、翌日より東壁・北壁・西壁断面図の確認作業を行う。26日、土壤サンプルの採取や深掘りした箇所の断面図作成など補足的な調査を実施する。なお、調査区南側の深掘りを行った際に、VI層上面において南側に向かって落ち込む河川跡なども確認していたが、壁の崩落が著しく調査の安全が確保できなかったことから、一部断面図を作成して調査終了とした。27・30日に重機により調査区の埋め戻しを行い、31日にはプレハブ、簡易トイレの撤去が完了する。同日、施工業者に現地引き渡しを行い、本件に係る現地調査の一切を終了した。

III. 調査成果

A. 層序（第4図）

今回の調査では、現在の表土以下8層の堆積を確認した。遺構検出面となるII層以下についてみると、北側から南側に向かって緩やかに傾斜している。以下、各層の状況について記載する。

- I層：現在の表土で、厚さは40～80cmである。埋土はさらに6層に細分できるが、いずれも近・現代の堆積層と考えられることから本調査では一括して扱った。層中からは磁器皿、陶器碗が出土している。
- II層：調査区全域で確認した褐灰色砂質土の堆積層であり、厚さは中央から北側が30～40cm、南側が15cm前後である。層中からは、中世の無軸陶器壺の小片や近世の堤人形などが出土している。近世の遺構検出面である。
- III層：中央部から北側の一部で確認した黒褐色砂質土であり、厚さは15～20cmである。中世の遺構検出面である。
- IV層：全域で確認したにぶい黄橙もしくはにぶい黄色砂質土であり、厚さは20～30cmである。古墳時代中期・奈良・平安時代の遺構検出面である。
- V層：全域で確認した黄灰色砂質土であり、厚さは10～40cmである。北側ではこの上層でにぶい黄橙色砂質土の堆積が認められたが、今回は一括して扱った。層中からは、完形の土師器鉢が出土している（第3図）。古墳時代前期の遺構検出面である。
- VI層：北端部～中央部で確認したにぶい黄色砂質土であり、厚さは5～15cmである。古墳時代前期の最



番号	種類	遺構・層位	特徴		口径	底径	深さ	堆積量	登録番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・鉢	V層	口：ハケメーヘラミガキ 体：ハケメーナデ・ヘラミガキ	口～体：ヘラミガキ	13.0 24/24	3.7 24/24	8.5	R78		

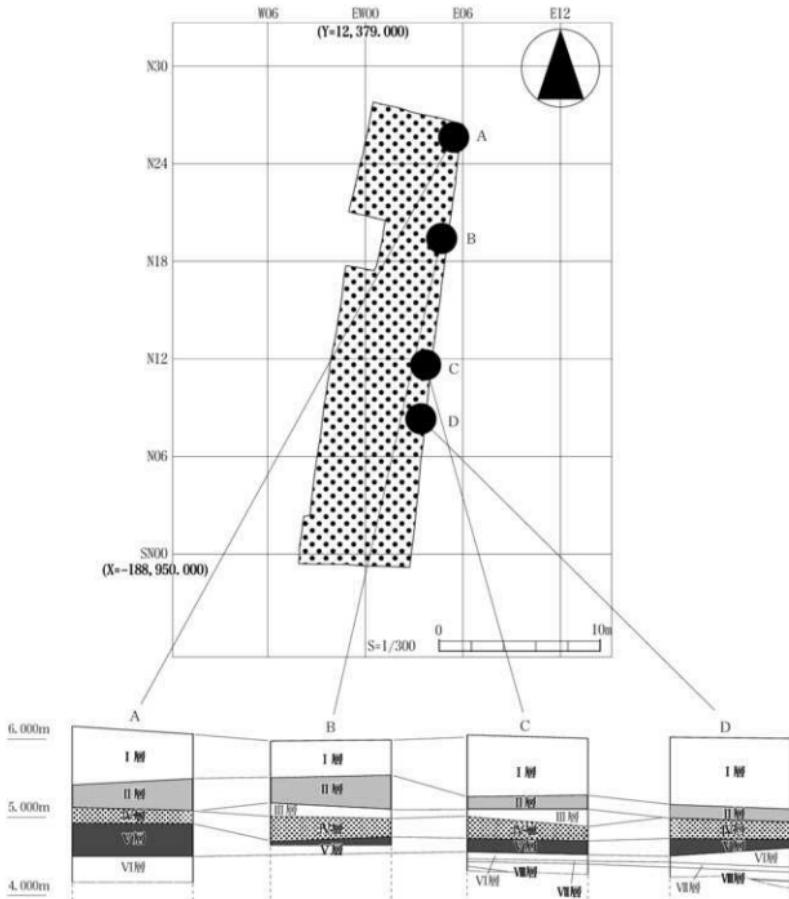
第3図 V層出土遺物

終遺構検出面である。

VII 層：調査区中央部で確認したにぶい黄色砂質土が多量に混入する黄灰色砂質土である。厚さは5～20cmであり、西側ほど厚く堆積している。

VIII 層：調査区中央部で確認したにぶい黄褐色またはにぶい黄色砂質土であり、厚さは15cm以上である。

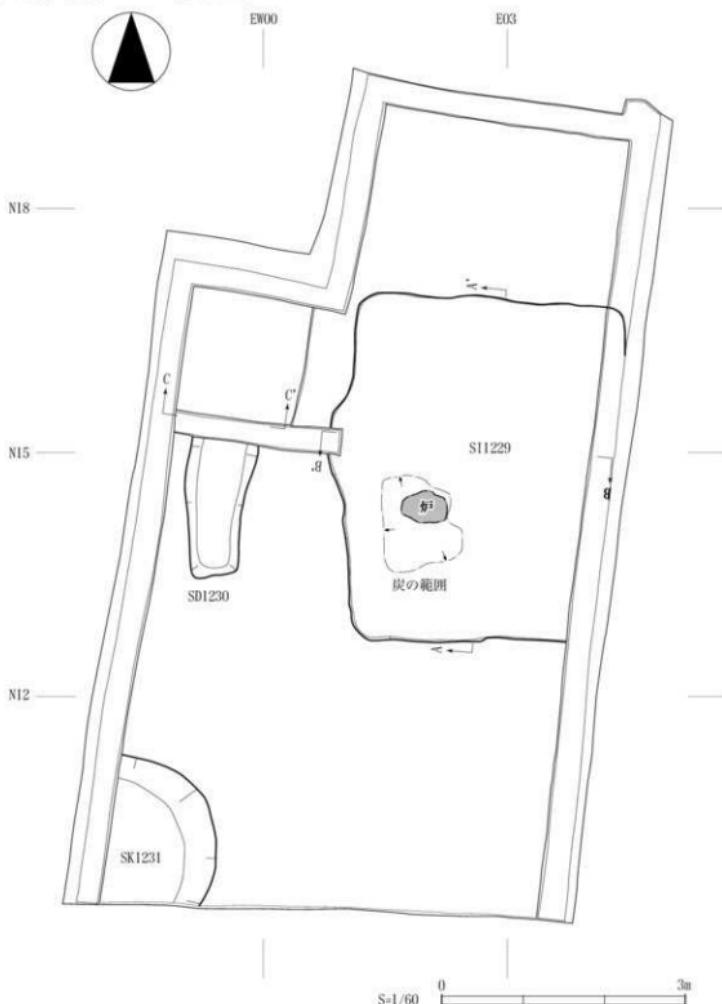
非常にしまりが弱く、古墳時代前期以前の河川堆積土の可能性が高い。また、VIII層上面では、南端部で南側に向かって落ち込む粗砂層を確認している。これについても、古墳時代前期以前の河川跡と考えられるが、調査区の制約上今回は調査を行っていない。



第4図 調査区と層序模式図

B. 発見遺構と遺物

今回の調査では、VI・V層上面で古墳時代前期の竪穴住居や溝跡、IV層上面で古墳時代中期の竪穴住居や奈良・平安時代の井戸跡、溝跡、III層上面で中世の土壙、II層上面で近世の溝跡や土壙などを発見し、各遺構からは土師器、須恵器、陶磁器、石製品、鉄製品、木製品が出土した。ここでは、層毎に発見した遺構・遺物の概要について記載する。



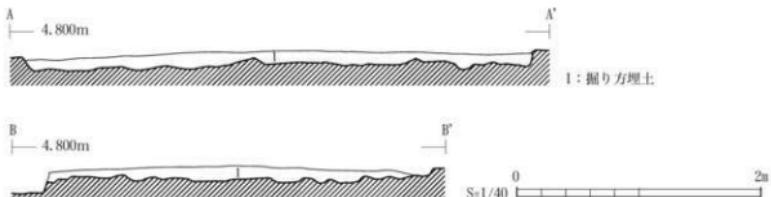
第5図 VI層上面検出遺構平面図

1. VI層上面検出遺構

S I 1229竪穴住居跡（第5・6図）

調査区中央部で発見した竪穴住居跡である。V層除去後直ちに床面となっており、残存状況は非常に悪い。平面形は方形であり、方向は西辺で測ると北で約1度西に偏している。規模は東西3.3～3.4m、南北4.1～4.2mである。壁はほとんど残存しておらず、最も残りのよい西辺で5cm前後確認するのみである。床面は、掘り方埋土上面である。埋土は黄褐色粘質土が多量に混入する黒褐色粘質土であり、掘り方底面までの深さは4～13cmである。住居内施設としては、中央西寄りで炉を確認した。形状は東西に長い楕円形であり、規模は長軸57cm、短軸40cm、炉底面までの深さは8cmである。また、炉の南西側には南北1.2m、東西0.8～1.0mの範囲に炭化物層の広がりを確認している。

遺物は、土師器甕の小片が出土している。



第6図 S I 1229断面図

S D1230溝跡（第5・7図）

調査区中央部で発見した南北方向の溝跡である。方向は、北で約5度東に偏している、規模は、長さ2m以上、上幅60～80cm、下幅40～55cm、深さ20～24cmである。底面は概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がりついている。V層である黄灰色砂質土によって埋没している。

遺物は出土していない。

S K1231土壤（第5図）

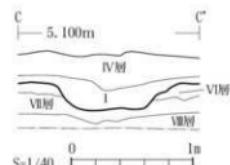
調査区南部で発見した土壤である。規模は、東西1.6m以上、南北1.8m以上、深さ4～8cmである。壁は非常に緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。埋土は炭化物層である。

遺物は出土していない。

2. V層上面検出遺構

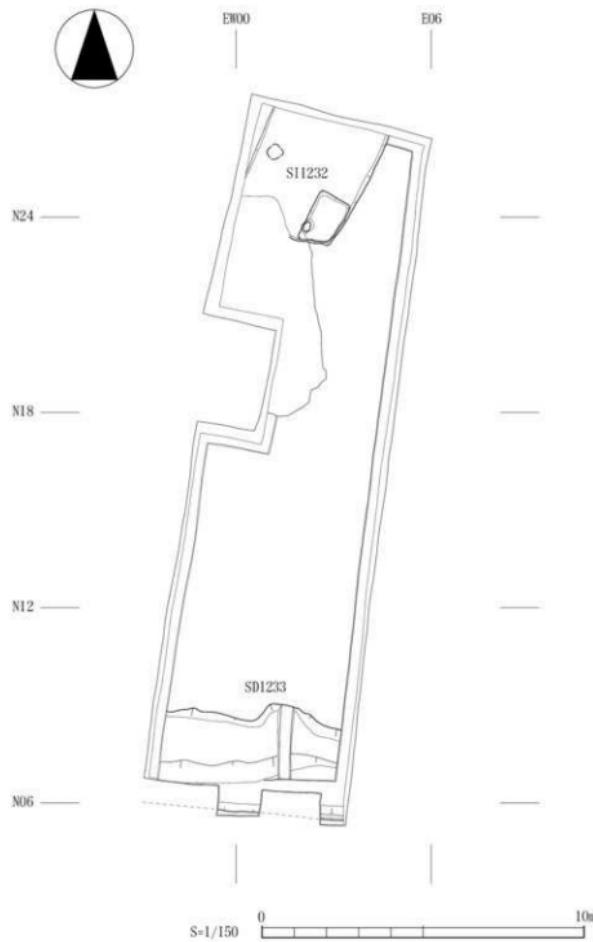
S I 1232竪穴住居跡（第9～11図）

調査区北部で発見した竪穴住居跡である。床面上に多量の炭化材や炭化物層が残存することから、本住居は焼失家屋であると考えられる。平面形は方形であり、方向は東辺で測ると北で約27度東に偏している。規模は東西4.2m以上、南北3.9m以上であり、残存する壁高は約40cmである。床面は、掘り方埋土上面である。埋土は黄灰色砂質土が多量に混入するにぶい黄褐色砂質土であり、底面までの深さは2～12cmである。住居内施設としては、炉と貯蔵穴がある。炉は調査区北西隅で方形に赤変した箇所を確認してお



第7図 S D1230断面図

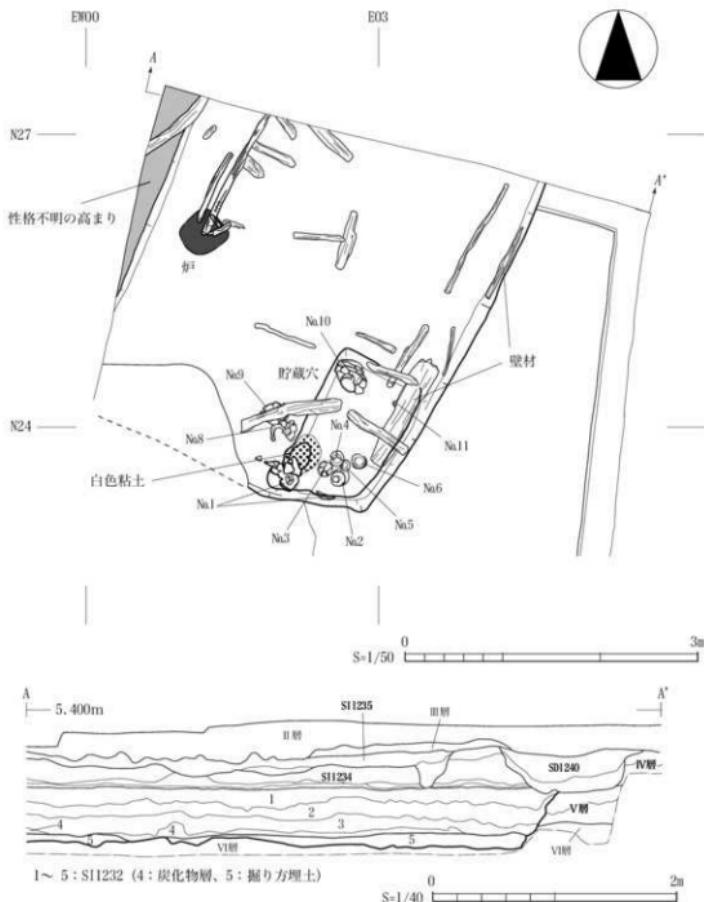
り、範囲は長辺45cm、短辺40cmである。貯蔵穴は住居跡南東隅で確認した。規模は長辺1.5m、短辺1.1m、深さ13cmであり、南西隅には白色粘土による高さ15cm程の円錐状の高まりが認められた。一方、床面上には多量の炭化材が残存しており、このうち東壁で確認した板材2枚は壁材であると考えられる。壁材には東壁北側で壁に張り付いた状態のものと、東壁南側で壁から剥がれ落ちた状態のものがある。規模は北側のものが長さ80cm、幅20cm、南側のものが長さ120cm、幅25cmである。なお、今回確認した炭化材のうち板



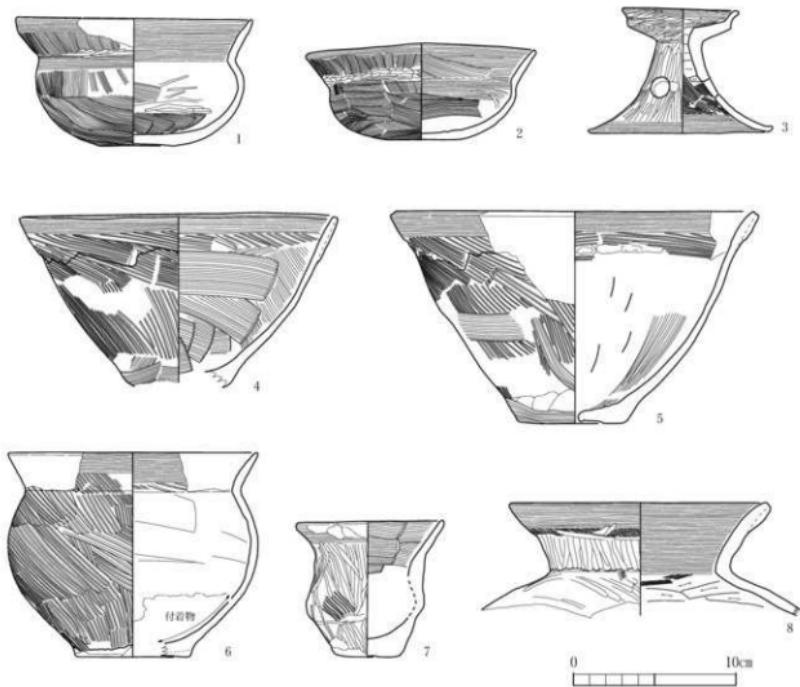
第8図 V層上面検出遺構平面図

材はこの2点のみであり、ほかは全て丸材である。住居内埋土は4層に分けられる。1層はにぶい黄橙色砂質土、2層は灰黄褐色砂質土を主体とし、黒褐色粘質土が斑状に少量混入している。3層はやや粘性のあるにぶい黄橙色砂質土が主体であり、灰黄褐色砂質土が斑状に多く混入している。4層は床面を直接覆う炭化物層であり、上述のとおり炭化材が多数残存している。なお、炉の西側では、床面が周囲より約5cm高くなっていることを確認したが、今回の調査ではこの性格について明らかにすることはできなかった。

遺物は、貯蔵穴及びその周辺の床面上から土器器鉢・器台・瓢・甕・壺が出土している。

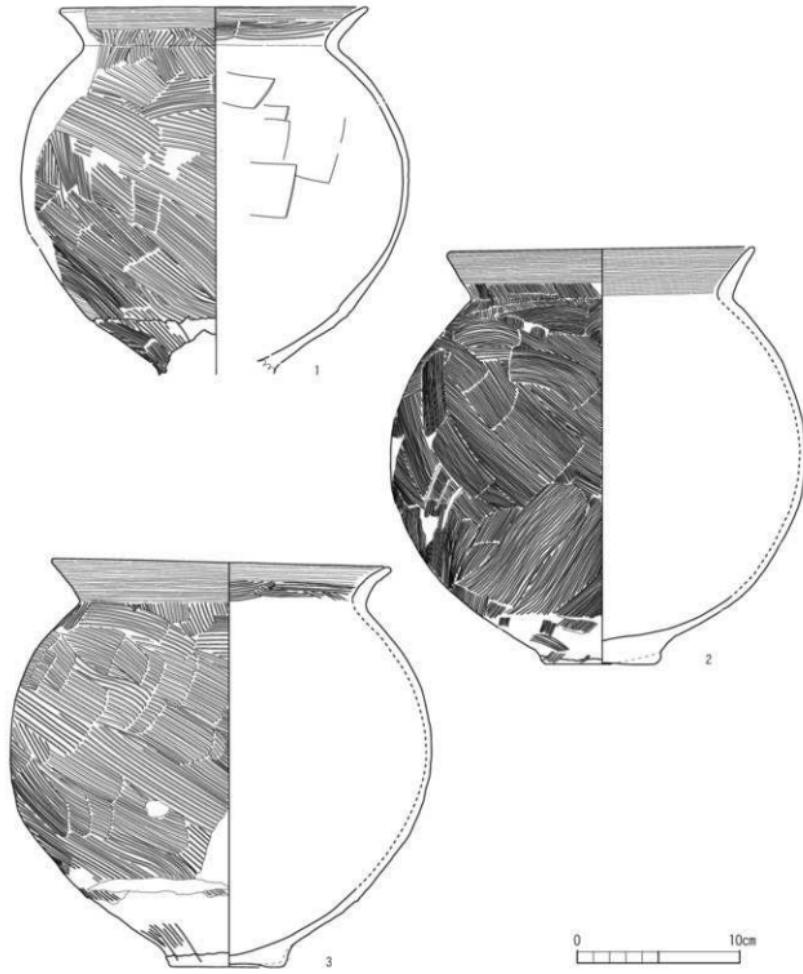


第9図 SII1232平面図・断面図



番号	種類	層位	特徴		口径	底径	断面	登録番号	備考
			外面	内面					
1	土器器・鉢	野藏穴 (No.6)	口:ヨコナデ→ナデ→ヘラミガキ 体:ハケメ→ヘラミガキ→ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ→ヘラミガキ	14.5 24/24	4.5 24/24	7.8	R61	
2	土器器・鉢	野藏穴 (No.4)	口:ヨコナデ→ナデ→ヘラミガキ 体:ヘラミガキ→ナデ	口:ヨコナデ→ナデ 体:ナデ→ヘラミガキ	14.2 24/24	4.3 24/24	5.6	R63	
3	土器器・盤台	野藏穴 (No.5)	受:ヨコナデ→ヘラミガキ 脚:ハケメ→ケズリ→ヘラミガキ 軸:ハケメ→ヨコナデ	受:ヘラミガキ 脚:ケズリ→ハケメ 軸:ハケメ→ヨコナデ	7.1 24/24	11.2 24/24	7.6	R62	脚部円孔3ヶ所
4	土器器・瓶	野藏穴 (No.9)	口:ハケメ→ヨコナデ 体:ハケメ→ナデ (底部付近)	口:ハケメ→ヨコナデ 体:ナデ	19.6 24/24	—	—	R76	複合口縁
5	土器器・瓶	野藏穴 (No.2)	口:ハケメ→ヨコナデ 体:ハケメ→ナデ (底部付近)	口:ハケメ→ヨコナデ 体:ヘラナデ	(22.0) 3/24	6.3 24/24	13.0	R75	複合口縁
6	土器器・瓶	野藏穴 (No.3)	口:ハケメ→ヨコナデ 体:ハケメ	口:ハケメ→ヨコナデ 体:ナデ	(15.0) 3/24	(6.8) 5/24	12.6	R184	底部輪台丸崩
7	土器器・鉢	野藏穴 (No.11)	口:ハケメ→ヨコナデ→瓶頭痕 底:ハケメ→ヘラミガキ	口:体:ナデ	9.1 24/24	3.9 24/24	8.3	R77	
8	土器器・瓶	床面上	口:ハケメ→ヨコナデ 底:ハケメ→ヘラミガキ 体:ヘラミガキ	口:底:ケズリ→ヨコナデ 体:ケズリ	15.7 24/24	—	—	R60	複合口縁

第10図 S-11232出土遺物



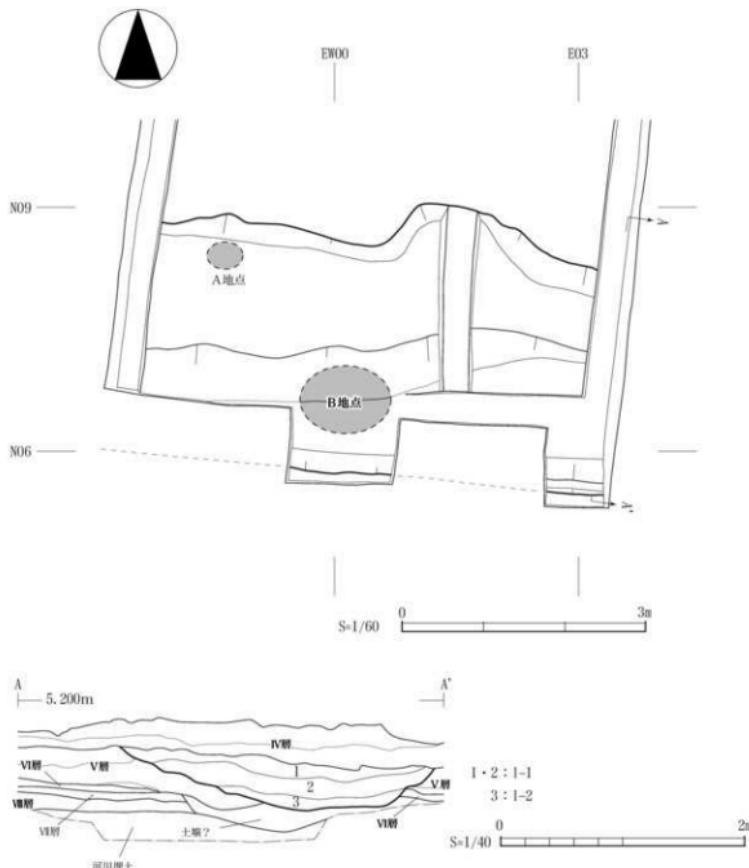
第11図 SII 1233出土遺物(2)

番号	種類	層位	特徴		口径 現存率	底径 現存率	器高	登録 番号	備考
			外面	内面					
1	土師器・甕	野藏穴(No.8)	口:ハケメ→ヨコナデキ 体:ハケメ	口:ハケメ→ヨコナデキ 体:ヘラナデ	19.0 18/24	—	—	R90	
2	土師器・甕	野藏穴(No.10)	口:ハケメ→ヨコナデキ 体:ハケメ	口:ハケメ→ヨコナデキ 体:ヘラナデ	18.5 21/24	6.7 24/24	25.5	R92	底部輪台光沢
3	土師器・甕	野藏穴(No.1)	口:ハケメ→ヨコナデキ 体:ハケメ	口:ハケメ→ヨコナデキ 体:ヘラナデ	20.8 15/24	7.0 24/24	24.8	R91	底部輪台光沢

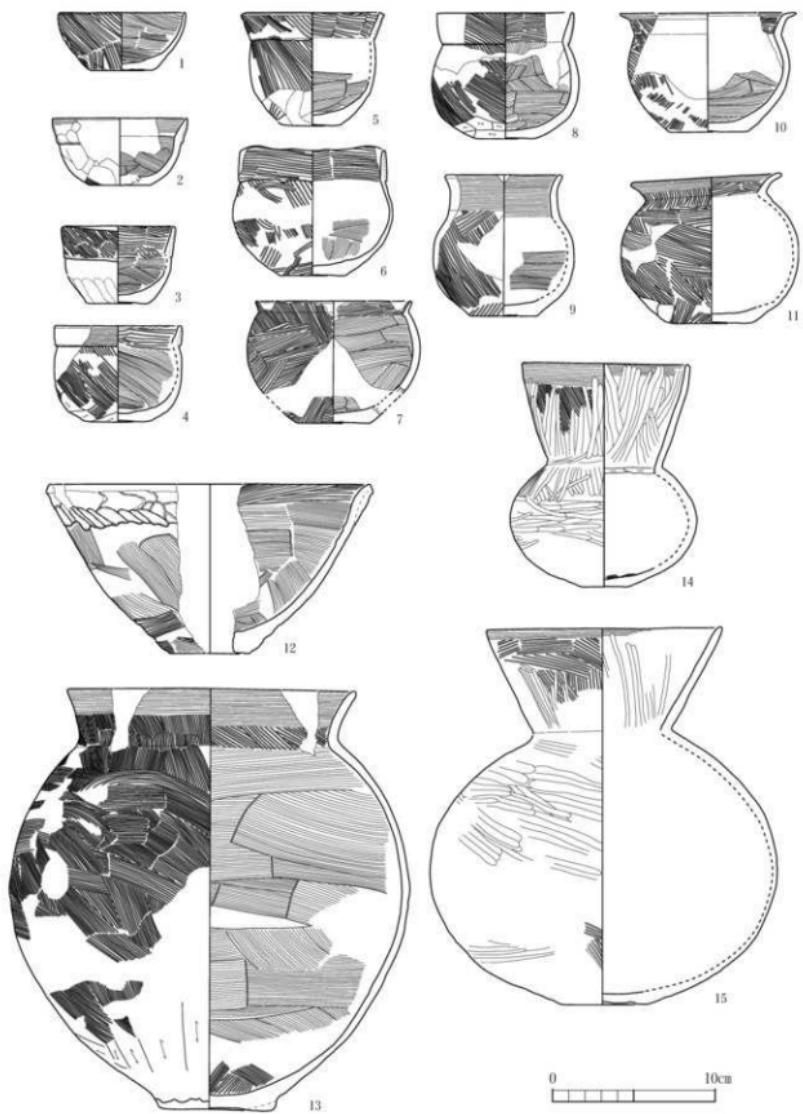
S D1233溝跡（第12～14図）

調査区南部で発見した東西方向の溝跡である。方向は、西で約6度北に偏している。規模は長さ6m以上、上幅2.6～2.8m、下幅1m、深さ30～50cmである。底面は凹凸がほとんどなく、概ね平坦である。壁は北壁が非常に緩やかに、南壁がやや垂直気味に立ち上がっており、両壁とも中位付近で僅かに段が認められる。埋土は3層に分けることができる。1層は黒褐色砂質土を主体とし、にぶい黄橙色砂質土粒が僅かに混入している。2層は黄灰色砂質土、3層はオリーブ黒色砂質土である。

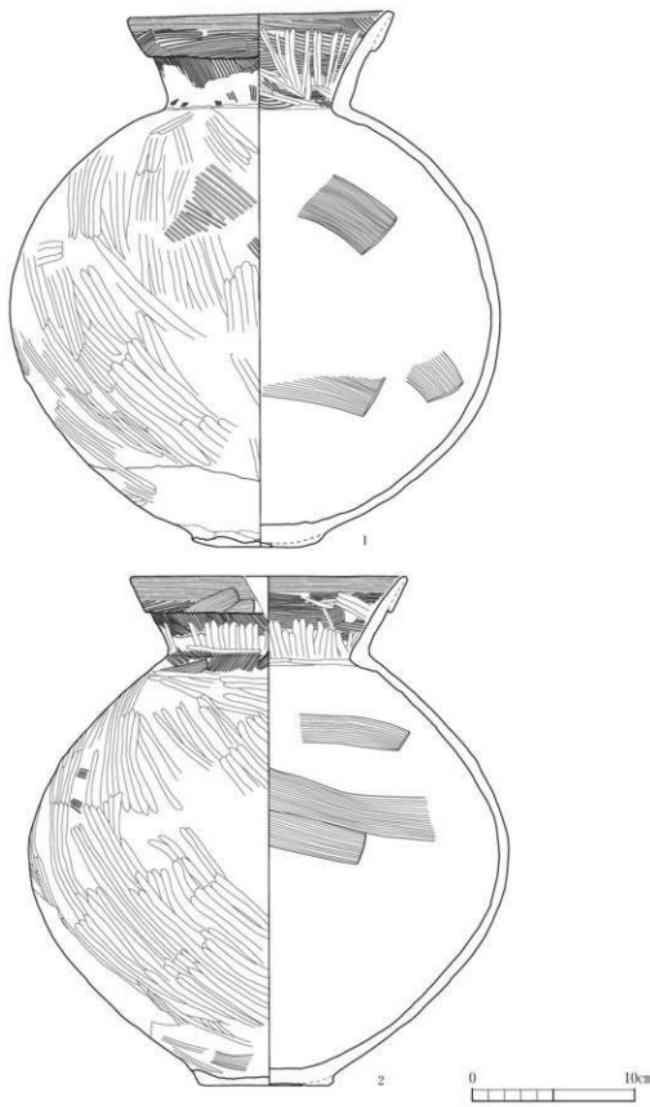
遺物は、北壁側のI-I層（A地点）から小型の土師器鉢・甕・壺・台付甕（或は高杯）の小片、中央付近のI-I層（B地点）から土師器甕・壺が出土している。



第12図 S D1233平面図・断面図



第13図 S D1233出土遺物（1）



第14図 S D1233出土遺物（2）

第13回観察表

単位: cm

番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	深さ	登録番号	備考
			外面	内面					
1	土師器・鉢	I-I (A地点)	口:ハケメ 体:ハケメ	口~体:ナデ	(7.7) 3/24	3.6 14/24	3.6	R84	
2	土師器・鉢	I-I (A地点)	口:ヨコナデ、ナデ 体:ハケメ、ナデ	口:ヨコナデ 体:ナデ	(8.2) 7/24	3.6 18/24	4.1	R187	複合口縁
3	土師器・鉢	I-I (A地点)	口:ハケメ 体:ナデ	口:ハケメ 体:ナデ	(7.0) 6/24	3.6 24/24	4.8	R83	複合口縁
4	土師器・鉢	I-I (A地点)	口:ハケメ→ヨコナデ 体:ハケメ→ヘラケズリ	口:ハケメ 体:ナデ	(7.8) 7/24	4.3 18/24	5.9	R82	複合口縁
5	土師器・鉢	I-I (A地点)	口:ハケメ 体:ハケメ (下半部) 肩痕	口:ハケメ 体:ナデ	(8.2) 10/24	3.6 24/24	7.0	R80	複合口縁
6	土師器・鉢	I-I (A地点)	口~体:ハケメ	口:ハケメ 体:ナデ	(8.8) 10/24	4.0 24/24	8.0	R81	複合口縁
7	土師器・鉢	I-I (A地点)	口~体:ハケメ	口:ハケメ 体:ナデ	(9.6) 4/24	4.4 30/24	7.5	R189	
8	土師器・鉢	I-I (A地点)	口~体:ハケメ、下平下:ケズリ	口:ハケメ 体:ナデ	(8.4) 7/24	3.5 23/24	7.8	R188	複合口縁
9	土師器・壺	I-I (A地点)	口:ハケメ→ヨコナデ 体:ハケメ	口:ヨコナデ 体:ナデ	(8.8) 3/24	4.0 15/24	8.7	R137	
10	土師器・壺	I-I (A地点)	口:ハケメ→ヨコナデ 体:ハケメ	口:ハケメ→ヨコナデ 体:ナデ	(10.8) 4/24	4.8 19/24	7.3	R186	
11	土師器・壺	I-I (A地点)	口:ハケメ→ヨコナデ 体:ハケメ	口:ハケメ→ヨコナデ 体:ナデ (単位不明)	9.2 30/24	4.8 24/24	9.0	R79	
12	土師器・瓶	I-I (A地点)	口:ナデツク 体:ハケメ→ナデ (ハケメ)	口:ハケメ 体:ナデ	(18.0) 6/24	(4.8) 8/24	10.4	R94	複合口縁
13	土師器・瓶	I-I (B地点)	口:ハケメ→ヨコナデ 体:ハケメ、底:ケズリ→ハケメ	口:ハケメ→ヨコナデ 底:ハケメ	17.7 22/24	7.0 24/24	25.9	R89	底部輪台充填
14	土師器・壺	I-I	口~底:ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ 体:ハケメ→ヘラミガキ	口~底:ヨコナデ→ヘラミガキ 体:ナデ、底:ハケメ	(10.1) 10/24	2.7 24/24	13.7	R88	
15	土師器・壺	I-I (B地点)	口~底:ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ 体:ケズリ→ヘラミガキ	口~底:ヨコナデ→ヘラミガキ 体:ナデ	(14.3) 6/24	5.1 24/24	23.1	R86	

第14回観察表

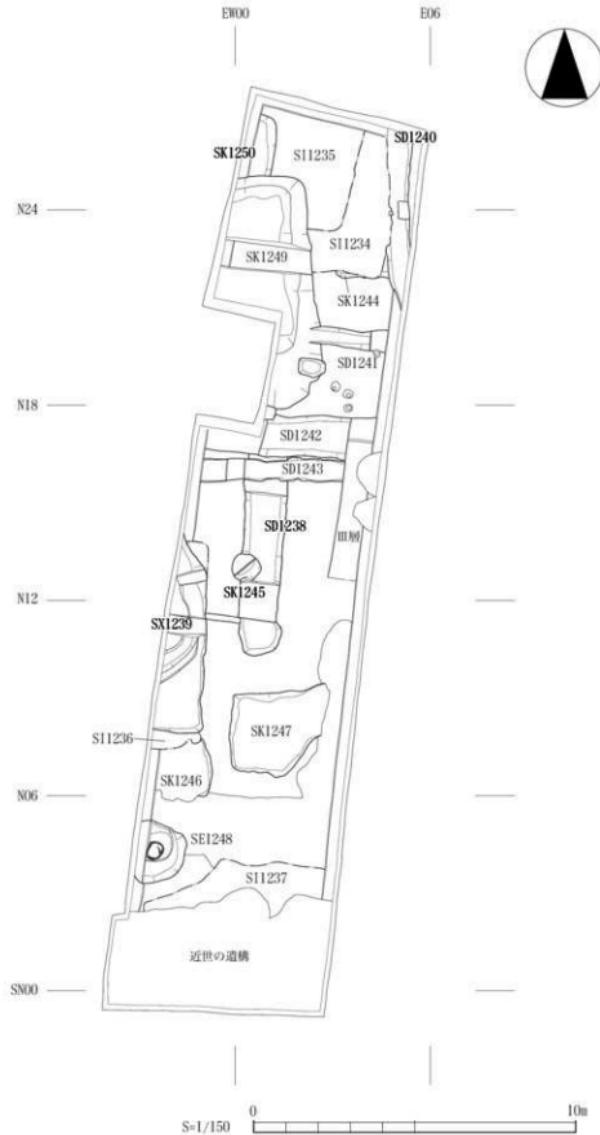
単位: cm

番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	深さ	登録番号	備考
			外 面	内 面					
1	土師器・壺	I-I (B地点)	口:ハケメ→ヨコナデ 底:ハケメ→ヘラミガキ (単位不明) 体:ハケメ→ヘラミガキ	口:ハケメ→ヨコナデ 底:ハケメ→ヘラミガキ 体:ヘラナデ	16.4 16/24	7.9 24/24	32.6	R85	複合口縁 底部輪台充填
2	土師器・壺	I-I (B地点)	口:ハケメ→ヨコナデ→ヘラナデ 底:ハケメ→ヘラミガキ 体:ハケメ→ヘラミガキ	口:ハケメ→ヨコナデ 底:ハケメ→ヘラミガキ 体:ヘラナデ	(17.0) 6/24	8.3 24/24	31.2	R87	複合口縁 底部輪台充填

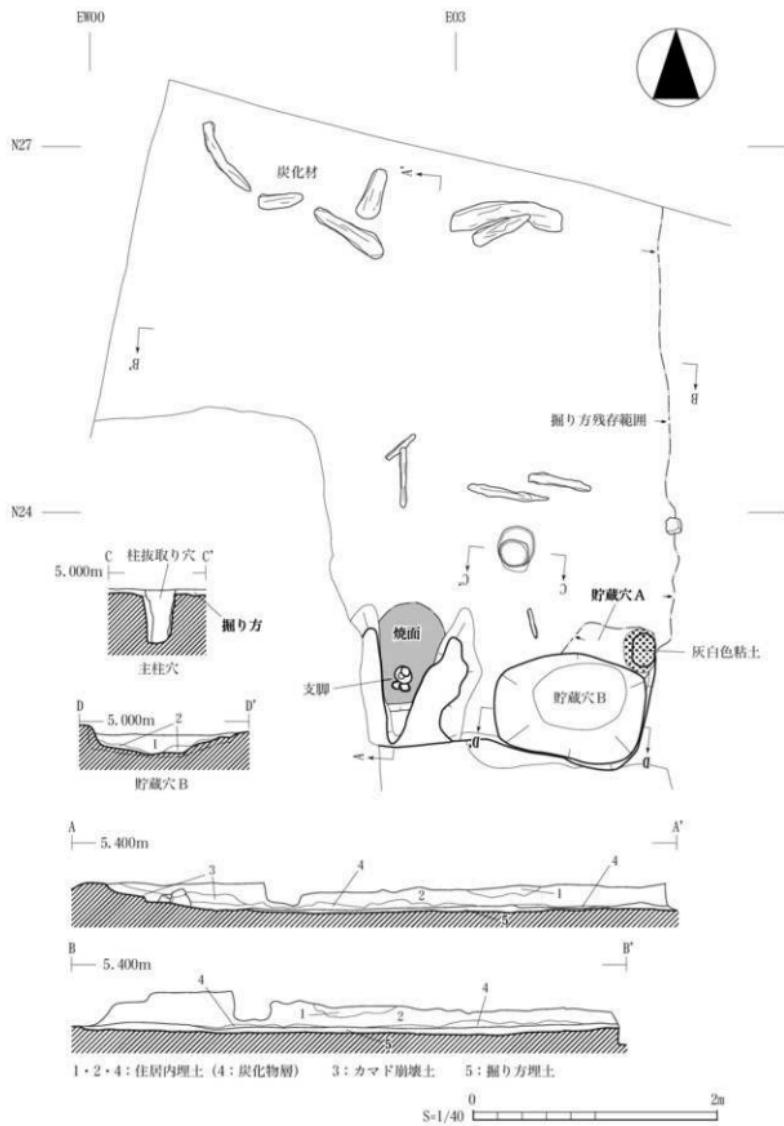
3. IV層上面検出遺構

S I 1234豎穴住居跡 (第16~18図)

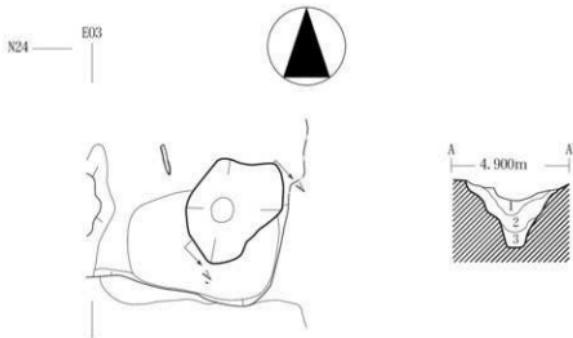
調査区北部で発見した豎穴住居跡である。床面上に炭化材や多量の炭化物層が残存することから、本住居跡は焼失家屋であると考えられる。S II 1235、SD 1240、SK 1244と重複し、それよりも古い。平面形は方形であり、方向は南辺で測ると西で約6度北に偏している。規模は東西4.9m以上、南北5.5m以上であり、残存する壁高は約30cmである。床面は、掘り方埋土上面である。埋土は黄橙色および明黄褐色粘質土が多量に混入したにぶい黄橙色砂質土であり、底面までの深さは2~4cmと非常に浅い。住居内施設としては、主柱穴、カマド、貯蔵穴がある。主柱穴は南東部でI基確認したのみである。掘り方の平面形は円形で、規模は直径30cm、深さ38cmである。埋土はにぶい黄褐色砂質土が主体であり、褐灰色粘土が僅かに混入している。柱は抜き取られており、抜取り穴の理土には焼土やにぶい黄褐色砂質土が多量に混入している。なお、主柱穴の掘り方が住居掘り方埋土によって覆われていたことから、本住居跡については主柱穴を据えた後に床面を形成したものと考えられる。カマドは南辺東側に付設されている。規模は燃焼部最大幅50cm、奥行き1.15m、残存する側壁高は最大15cmである。燃焼部中央から奥壁にかけては周囲よ



第15図 III・IV層上面検出遺構平面図



第16図 S II 1234平面図・断面図



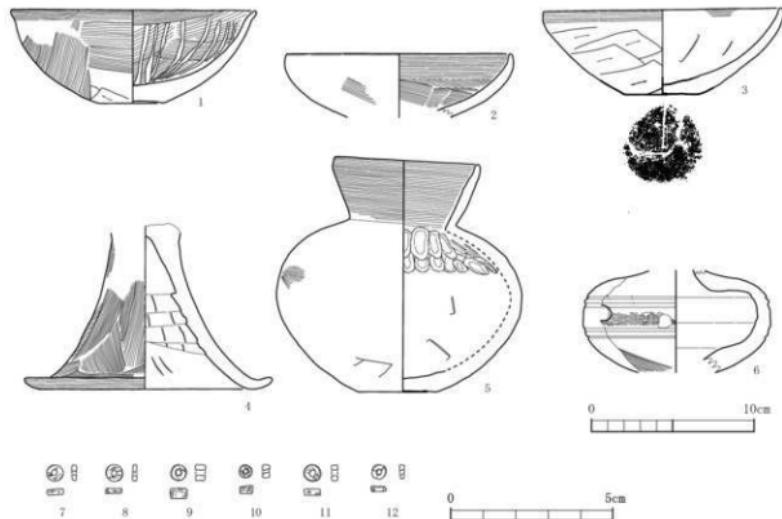
第17図 S I 1234貯藏穴A平面図・断面図

り5cmほど高く壇状に残されており、住居外に向かって緩やかに立ち上がっている。また、この高まりの手前には土師器壺が倒位の状態で据えられており、支脚として転用されたものと考えられる。貯蔵穴は南北東隅で確認しており、同位置で1度掘り直しが行われている（貯蔵穴A→貯蔵穴B）。貯蔵穴Aの平面形は南北に長い不整形であり、規模は長軸90cm、短軸60cm、深さ56cmである。埋土は3層に分けられる。1層はにぶい黄橙色砂質土粒や炭化物が多量に混入する灰黃褐色砂質土、2層は炭化物が僅かに混入するにぶい黃褐色砂質土、3層はにぶい黄橙色砂質土粒が混入する黒色粘土である。このうち1層は、埋土の状況から人为的に埋め戻したものと考えられる。貯蔵穴Bの平面形は東西に長い梢円形であり、規模は長軸1.25m、短軸0.85m、深さ18cmである。埋土は2層に分けられる。いずれもにぶい黄褐色砂質土が主体であるが、埋土の大部分を占める1層には炭化物や焼土が多量に混入しており、床面を直接覆う住居内埋土4層と同一のものと考えられる。また、貯蔵穴B北東側の東壁に接して、灰白色粘土による高さ15cm程の円錐状の高まりが認められた。住居内埋土は4層に分けられる。1・2層はにぶい黄褐色砂質土が主体であり、2層には炭化物が粒状に若干混入している。3層はカマド付近にのみ確認できる焼土ブロックを多量に混入するにぶい黄褐色粘質土であり、カマド崩壊土と考えられる。4層は床面直上に堆積した炭化物層であり、床面には炭化材も確認できる。

遺物は、床面上やカマド内堆積土、貯蔵穴埋土から土師器杯・高杯・壺・甕、須恵器甕、白玉が出土している。土師器杯には内面に赤彩が施されたものもある。

S I 1235竪穴住居跡（第19図）

調査区北部で発見した竪穴住居跡である。S I 1234と重複し、それよりも新しい。平面形は方形であり、方向は東辺で測ると北で約14度東に偏している。規模は東西3.5m以上、南北3.6m以上あり、残存する壁高は約15cmである。S I 1234住居内埋土1層上面を直接床面としている。住居内施設としては、検出した各辺に周溝がある。規模は上幅17～35cm、下幅10～24cm、深さ20～26cmであり、北側から南側に向かって僅かに傾斜している。埋土はにぶい黄褐色砂質土が主体であり、黒褐色砂質土が斑状に僅かに混入している。また、壁面及び底面に接して非常に薄い炭化物層が形成されている。住居内埋土は2層に分け

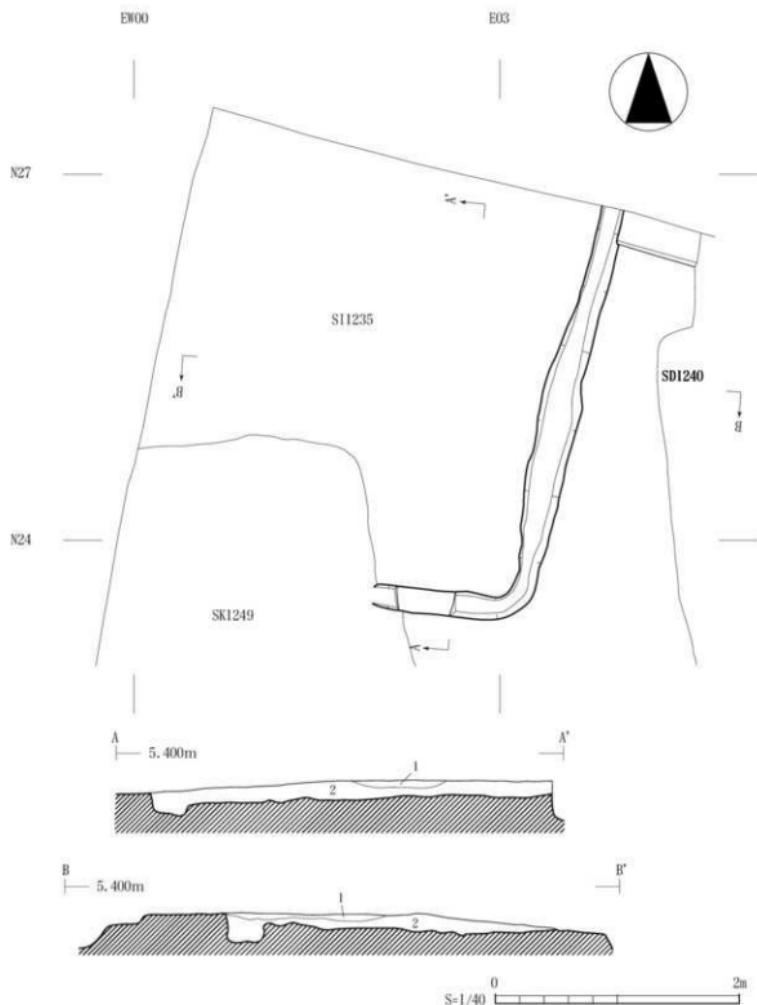


番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外 面	内 面						
1	土師器・杯	床面上	口:ヨコナデ 体:ケズリーナデ	口~体:テギ→ヘラミガキ	15.1 18/24	4.0 24/24	3.7	9	R64	
2	土師器・杯	貯藏穴B	体:ナデ、摩滅著しい	口:ヨコナデ 体:ヘラナデ	(13.6) 4/24	—	—	—	R165	内外面赤彩(外面摩滅)
3	土師器・杯	カマド内埋土	口:ヨコナデ 体:ケズリ	口:ヨコナデ 体:ヘラナデ	14.75 11/24	4.4 18/24	5.2	9	R58	
4	土師器・高杯	床面上	脚:ナデ 削:ヨコナデ	削:ヘラナデ	—	15.2 24/24	—	—	R67	
5	土師器・壺	カマド内埋土	口:ヨコナデ 体:ケズリーナデ	口:ヨコナデ 体:ヘラナデ、側圧痕	8.8 30/24	4.8 24/24	8.2	9	R59	支撑に転用
6	須恵器・壺	住居内埋土	体:ロクロナデ、縦書き波状文	体:ロクロナデ	—	—	—	9	R65	TK208~23形式
7	臼玉	床面上	直径:0.5、孔径:0.15、厚さ:0.15~0.2、					—	R146	
8	臼玉	床面上	直径:0.5、孔径:0.15、厚さ:0.15~0.2、					—	R147	
9	臼玉	床面上	直径:0.5、孔径:0.15、厚さ:0.3、					—	R148	
10	臼玉	床面上	直径:0.4、孔径:0.1、厚さ:0.2~0.25、					—	R149	
11	臼玉	床面上	直径:0.5、孔径:0.15、厚さ:0.2、					—	R150	
12	臼玉	床面上	直径:0.45、孔径:0.15、厚さ:0.1~0.15					—	R151	

第18図 S II 1234出土遺物

られる。上層は砂粒が僅かに混入する褐灰色砂質土、下層は黒褐色砂質土が斑状に混入するにぶい黄褐色砂質土である。

遺物は出土していない。



第19図 SII1235平面図・断面図

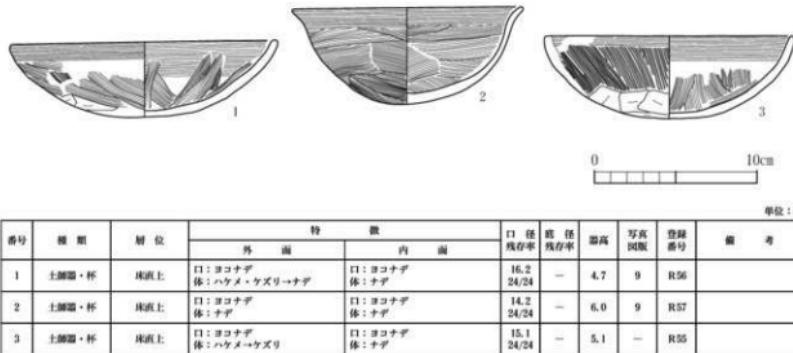
S I 1236竪穴住居跡（第20・22図）

調査区中央部で発見した竪穴住居跡である。S X 1239によって大半が破壊されているため、残存状況は非常に悪い。平面形は方形であり、方向は東辺で測ると北で約3度東に偏している。規模は東西1.5m以上、南北6.6mであり、残存する壁高は約10cmである。埋土は灰黄褐色砂質土が主体であり、砂粒が若干混入する。

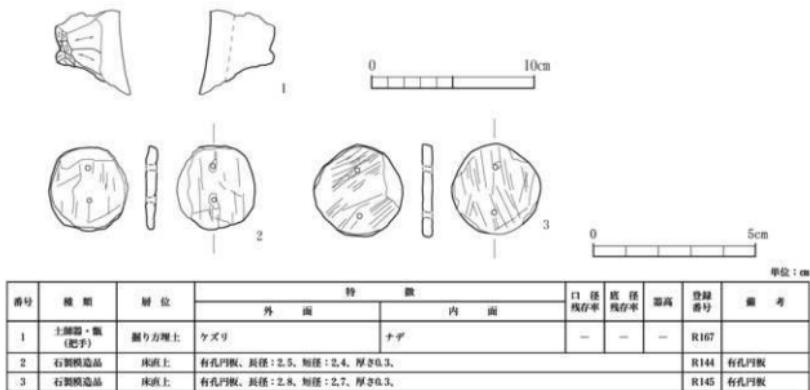
遺物は、床面上から土師器杯・甕が出土している。

S I 1237竪穴住居跡（第15・21図）

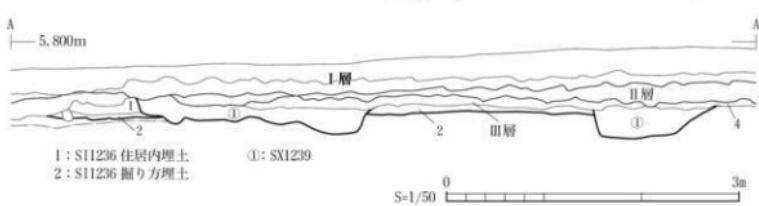
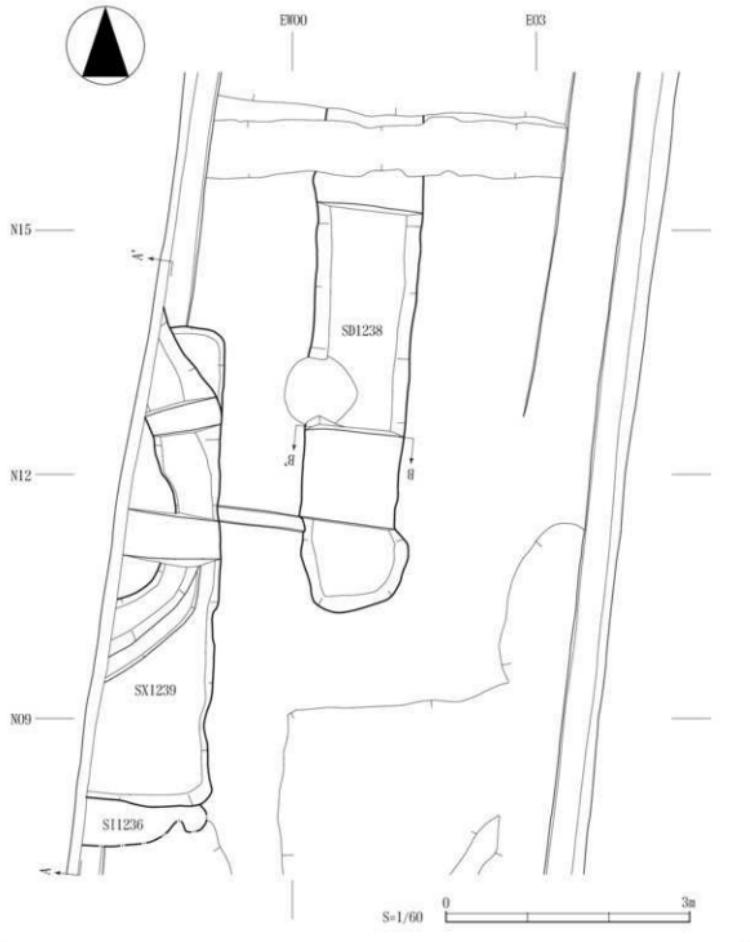
調査区南部で発見した竪穴住居跡である。II層上面検出の近世の遺構に大部分が破壊されており、掘り方の一部を確認したにすぎない。確認した掘り方の範囲は東西5.6m、南北1.7mであり、埋土はにぶい黄



第20図 S I 1236出土遺物



第21図 S I 1237出土遺物



第22図 S I 1236、S D1238、S X1239平面図・断面図

褐色砂質土である。

遺物は、掘り方上面から石製模造品（有孔円板）、掘り方埋土から土師器壺・瓶（把手）が出土している。

S E1248井戸跡（第25～27図）

調査区南部で発見した井戸跡である。上面には直径2m以上の抜取り穴があり、深さは掘り方の中位付近にまで及んでいる。掘り方のほぼ中央で、曲物を2点上下に重ね合わせた井戸側を確認した。上方が円形、下方が方形であり、上方の円形曲物の底辺が方形曲物の各辺上端に重なるように据えられている。曲物の規模は円形曲物が直径57.7cm、高さ32cm、方形曲物が長辺50.1cm、短辺45.9cm、高さ21.8cmである。掘り方の平面形は円形であり、規模は直径約2m、深さ約1mである。壁は垂直に立ち上がるが、東壁から南壁にかけては底面から35cmほどの位置に幅10～35cmの段が形成されている。底面は概ね平坦である。埋土は5層に分けられる。1層は灰色粘土粒が混入する灰オリーブ色砂質土、2層は灰オリーブ色砂質土粒が混入するオリーブ黒色粘土、3層は黒褐色粘土粒が混入する褐灰色細砂、4層は灰黄褐色砂質土粒が混入する黒褐色粘土、5層は砂粒が僅かに混入する褐灰色粘土である。

遺物は、掘り方埋土から平瓦（II Ba類）、抜取り穴埋土から須恵器杯、平瓦（II B類）、曲物蓋が出土している。

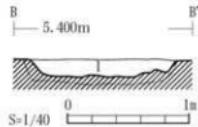
S D1238溝跡（第22・23図）

調査区中央部で発見した、南北方向の溝跡である。S D1242・1243、S K1245と重複し、それよりも古い。方向は、北で約4度東に偏しており、規模は長さ6.2m以上、上幅1.2～1.4m、下幅0.9～1m、深さ14～19cmである。底面にはほとんど凹凸はなく、南側から北側に向かって非常に緩やかに傾斜している。南北の比高は5cmである。壁は垂直気味に立ち上がるが、溝の収束する南側は比較的緩やかである。埋土は、にぶい黄橙色砂質土ブロックが多く量に混入する黒褐色砂質土である。

遺物は出土していない。

S D1240溝跡（第24・28図）

調査区北部で発見した南北方向の溝跡である。S I1234、S K1244と重複し、前者よりも新しく、後者よりも古い。方向は、北で約3度西に偏している。規模は、長さ6m以上、上幅75～105cm、下幅45～65cm、深さ21～38cmである。底面にはほとんど凹凸はなく、南側から北側に向かって緩やかに傾斜している。南北の比高は14cmである。壁は垂直気味に立ち上がるが、西壁では中位付近で幅10cm程の平坦面を形成する箇

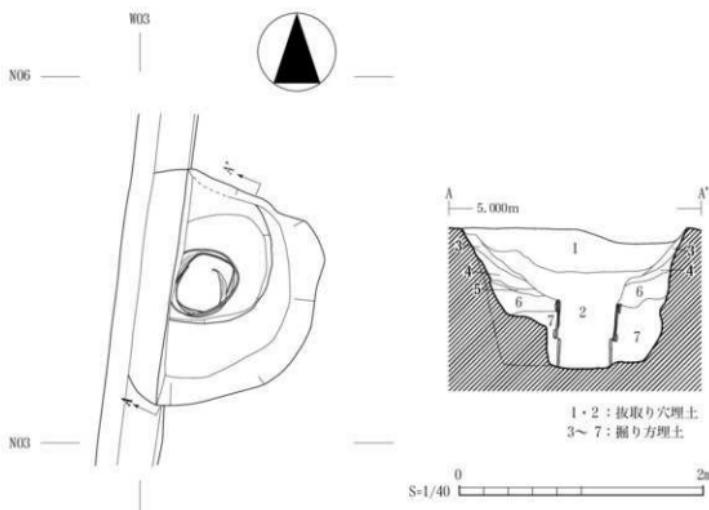


第23図 S D1238断面図

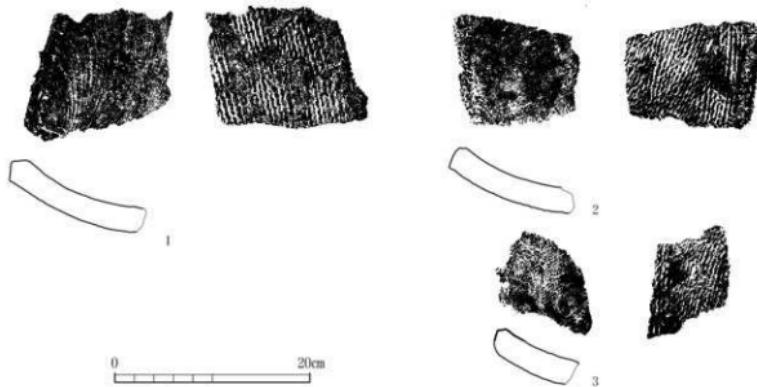


番号	種類	層位	特徴		口径 6/24	底径 24/24	深さ 4.1	登録 番号 R68	備考
			外 面	内 面					
1	須恵器・杯	I-I	ロクロナダ、底部：ヘラ切り	ロクロナダ	(13.4) 6/24	6.2 24/24	—	—	脚部に円孔
2	須恵器・高杯	I-I	杯体：回転ヘラケズリ 脚：ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—	R95	—

第24図 S D1240出土遺物



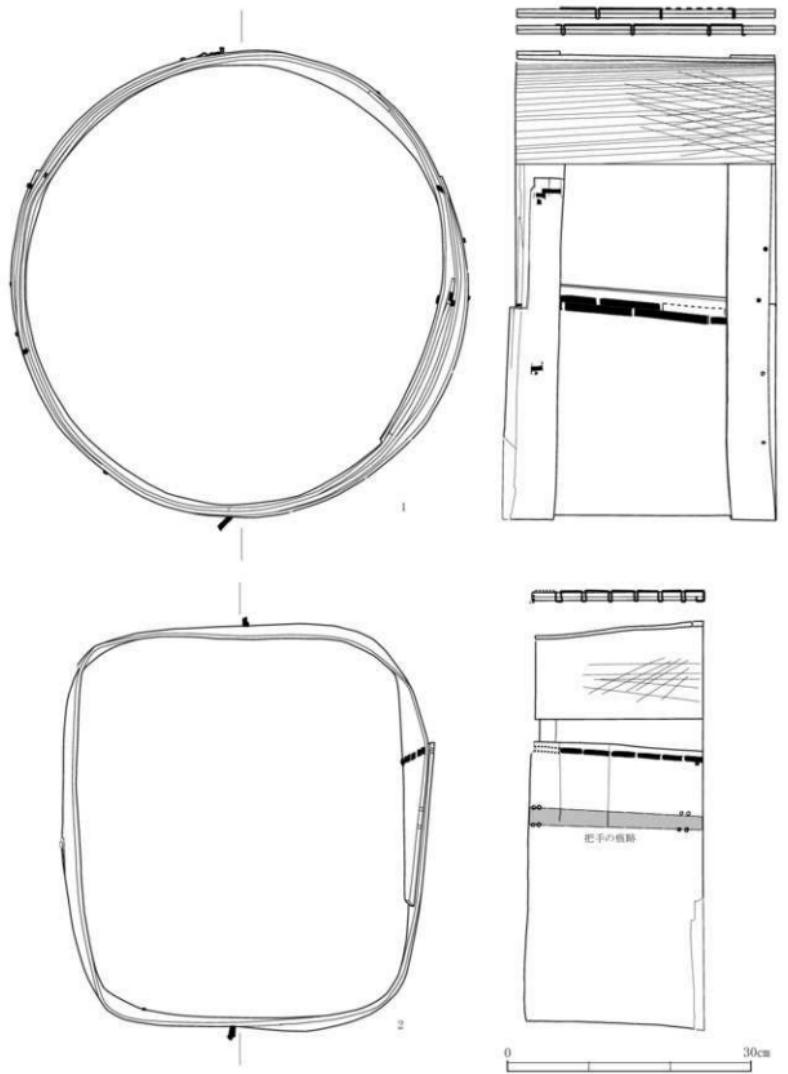
第25図 S E 1248平面図・断面図



単位: cm

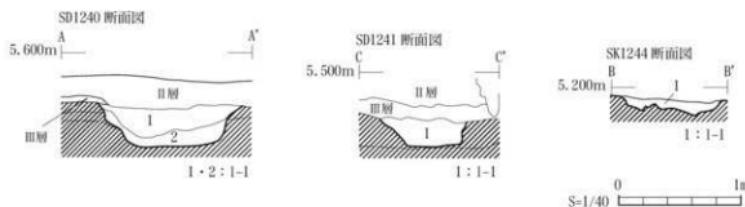
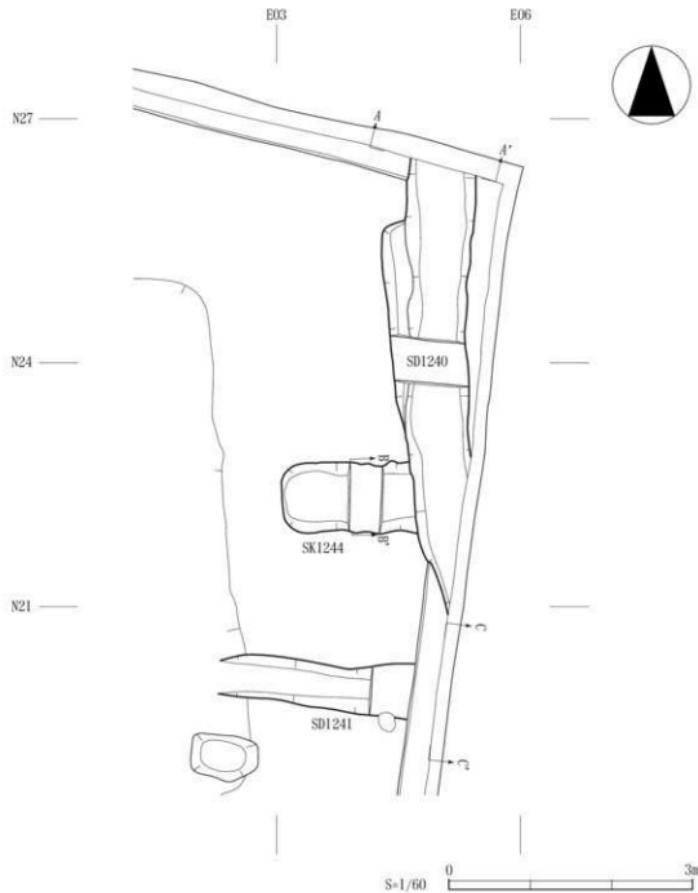
番号	種類	層位	特徴		登録番号	備考
			凹面	凸面		
1	平瓦	摺り方	布目・糸切り→ナデ	圓切き	R153	II B類
2	平瓦	抜取り穴	布目・糸切り→ナデ	圓切き	R155	II B類
3	平瓦	抜取り穴	布目・糸切り→ナデ	圓切き	R154	II B類

第26図 S E 1248出土遺物(1)



第27図 SE1248出土遺物（2）

番号	種類	特徴	写真 図版	登録 番号	備考
1	本製品 円形壺物	直径：57.7cm、高さ：32cm	8	R20	井戸掘上段
2	本製品 方形壺物	長辺：56.1、短辺：45.9、高さ：21.8、各辺に把手の痕跡あり	8	R21	井戸掘下段



第28図 SD1240・1241、SK1244平面図・断面図

所が一部認められる。埋土は2層に分けられる。1層は褐灰色砂質土粒が混入する黒褐色砂質土、2層は黒褐色砂質土粒が混入するにぶい黄色砂質土である。

遺物は、土師器杯（B II類）・甕（B類）、須恵器杯（III類）・甕・高杯が出土している。

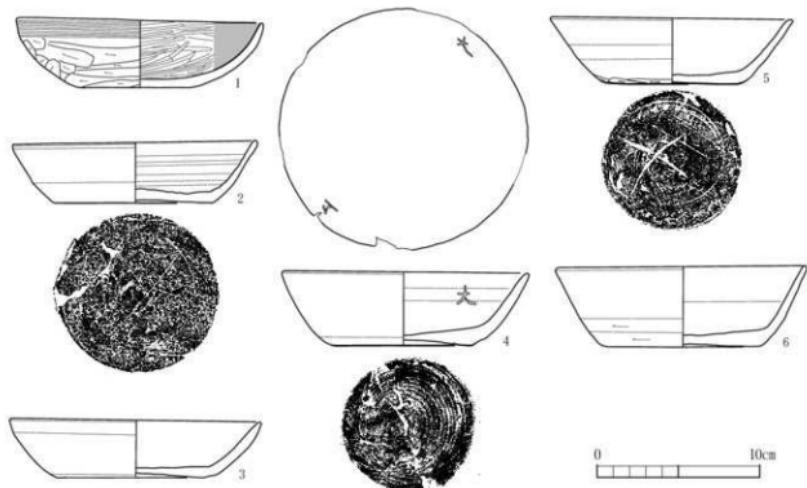
S D1241溝跡（第28図）

調査区北部で発見した東西方向の溝跡である。SK1249と重複し、それよりも古い。方向は、西で約6度北に偏っている。規模は、長さ2.7m以上、上幅52~70cm、下幅24~40cm、深さ24cmである。底面に凹凸はほとんどなく、概ね平坦である。壁は南側が垂直気味に、北側が外に開き気味に立ち上がっている。埋土は黒褐色砂質土が主体であり、にぶい黄橙色砂質土粒が多く混入している。

遺物は、土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器瓶が出土している。

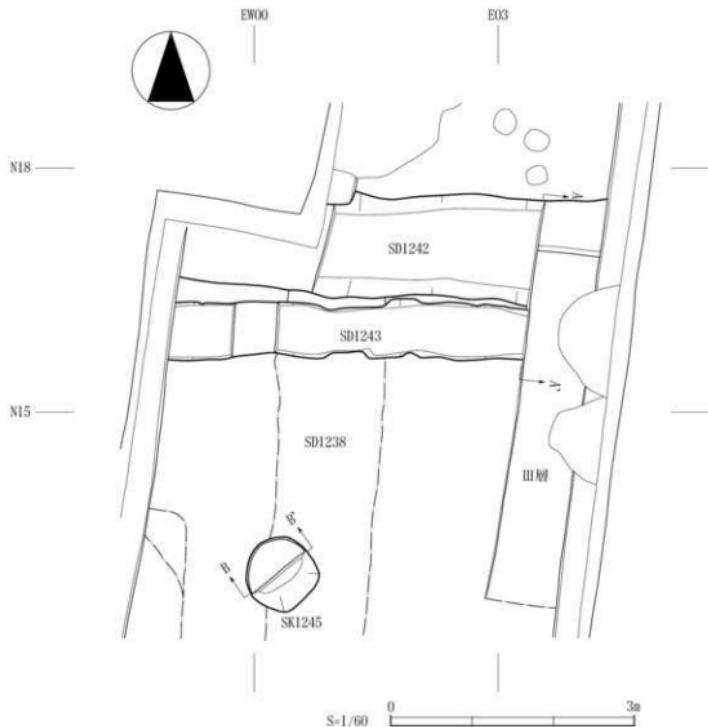
S D1242溝跡（第29・30図）

調査区中央部で発見した東西方向の溝跡である。SD1238と重複し、それよりも新しい。方向は、西で

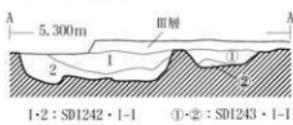


番号	種類	層位	特徴		口径 mm	底径 mm	残存率	深度 mm	写真 回数	登録 番号	備考
			外 面	内 面							
1	土師器・杯	I-1	口：ヨコナデ (体) ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色地彫	15.2 16/24	6.8 24/24	4.1	—	R74	A II類	
2	須恵器・杯	I-1	口～体：ロクロナデ 底部：ヘラ切り、「×」のヘラガキ	ロクロナデ	14.9 15/24	9.8 23/24	3.7	—	R69	田畠	
3	須恵器・杯	I-1	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	15.5 22/24	9.0 24/24	3.6	—	R73	田畠	
4	須恵器・杯	I-1	口～体：ロクロナデ 底部：斜面直切り、「上」のヘラガキ	ロクロナデ 口縁部に「大」・「上」のヘラガキ	15.2 21/24	8.4 24/24	4.5	9	R71	V類	
5	須恵器・杯	I-1	ロクロナデ 底部：ヘラ切り・斜面直切り、「×」のヘラガキ	ロクロナデ	14.9 24/24	8.3 24/24	4.1	9	R70	IIa類	
6	須恵器・杯	I-1	口～体：ロクロナデ・斜面直切り 底部：ヘラ切り・斜面直切り	ロクロナデ	15.5 24/24	9.1 24/24	5.0	9	R72	Ia類	

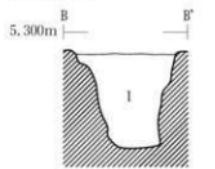
第29図 S D1242出土遺物



SD1242・1243 断面図



SK1245 断面図



第30図 SD1242・1243、SK1245平面図・断面図

約5度北に偏している。規模は、長さ5.7m以上、上幅1.2~1.4m、下幅80~95cm、深さ22~32cmである。底面は凹凸が著しいものの、東西の比高はほとんどない。壁は若干の凹凸があり、垂直気味に立ち上がりっている。埋土は2層に分けられる。1層は暗褐色砂質土粒が多量に混入する黒褐色砂質土、2層は暗褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土が多量に混入する褐灰色砂質土である。

遺物は、土師器杯（A II類）、須恵器杯（I a・II a・III・V類）が出土している。

S D1243溝跡（第30図）

調査区中央部で発見した東西方向の溝跡である。S D1238と重複し、それよりも新しい。方向は、東西の発掘基準線と概ね一致している。規模は、長さ4.6m以上、上幅53~72cm、下幅45~62cm、深さ8~16cmである。底面は僅かに凹凸があるものの概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に分けられる。1層は暗褐色砂質土粒が混入する黒褐色砂質土、2層は灰褐色砂質土粒や暗褐色砂質土粒が混入するにぶい黄褐色砂質土である。

遺物は出土していない。

S K1244土壤（第28図）

調査区北部で発見した土壤である。S I I234、S D1240と重複し、それらよりも新しい。平面形は東西に長い方形であり、規模は長軸2.2m以上、短軸80~95cm、深さ4~12cmである。底面及び壁は凹凸が著しく、立ち上がりも一樣でない。埋土は黒褐色砂質土が主体であり、灰白色火山灰、灰黃褐色土、炭化物が粒状に多量に混入している。

遺物は、土師器甕（B類）が出土している。

S K1245土壤（第30図）

調査区中央部で発見した土壤である。S D1238と重複し、それよりも新しい。平面形は円形であり、規模は直径85cm、深さ82cmである。底面は概ね平坦であり、壁は若干凹凸があるものの垂直に立ち上がっている。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄褐色土ブロックが多量に混入している。また、底面には灰白色火山灰が自然堆積している。

遺物は出土していない。

S K1246土壤（第31図）

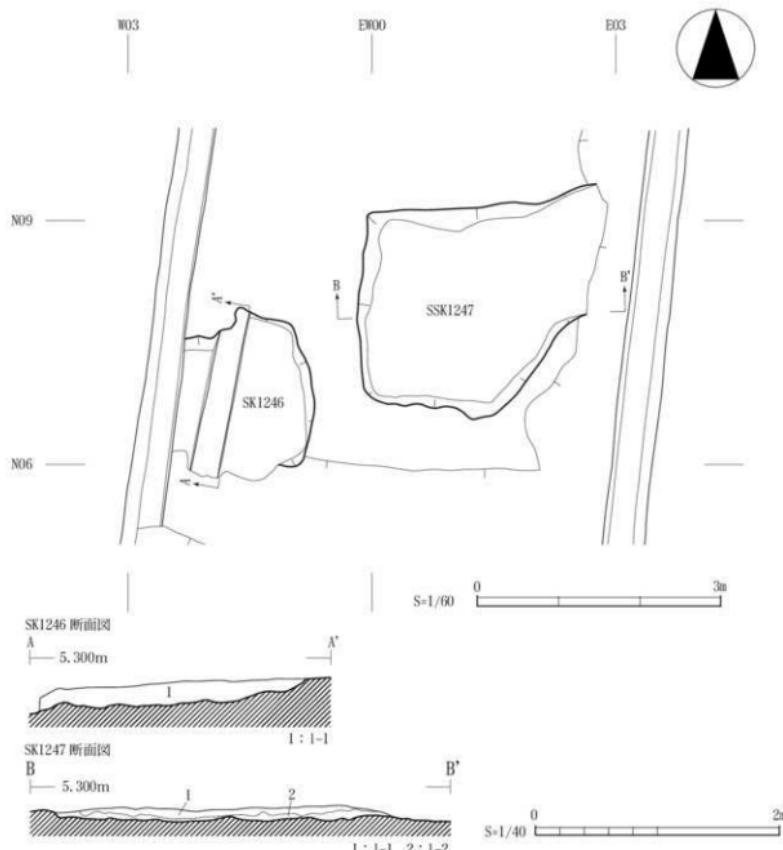
調査区南部で発見した土壤である。南側が近世のS D1252溝跡によって大きく削平されている。平面形は不整形であり、規模は南北2.1m以上、東西2m以上、深さ20cmである。底面は僅かに凹凸が認められるものの、概ね平坦である。壁は非常に緩やかに立ち上がっている。埋土は褐灰色砂質土が主体であり、にぶい黄褐色砂質土や炭化物が僅かに混入している。

遺物は出土していない。

S K1247土壤（第31図）

調査区南部で発見した土壤である。平面形は方形であるが、北東部で溝状に窄まり、さらに調査区外へ延びている。規模は南北2.4~2.6m、深さ10~12cmである。底面は凹凸が著しく、平坦ではない。壁は北・西・南辺では比較的急に立ち上がるが、東辺及び溝状に延びる北東側では非常に緩やかである。埋土は2層に分けられる。1層にはにぶい黄褐色砂質土ブロックが多量に混入する灰黃褐色砂質土、2層は黒褐色粘質土である。

遺物は、無釉陶器甕の小片が出土している。

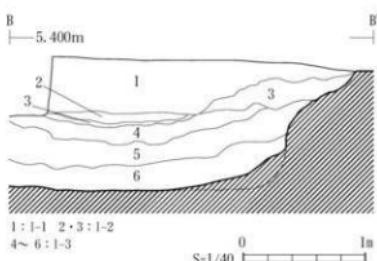


第31図 SK1246・1247平面図・断面図

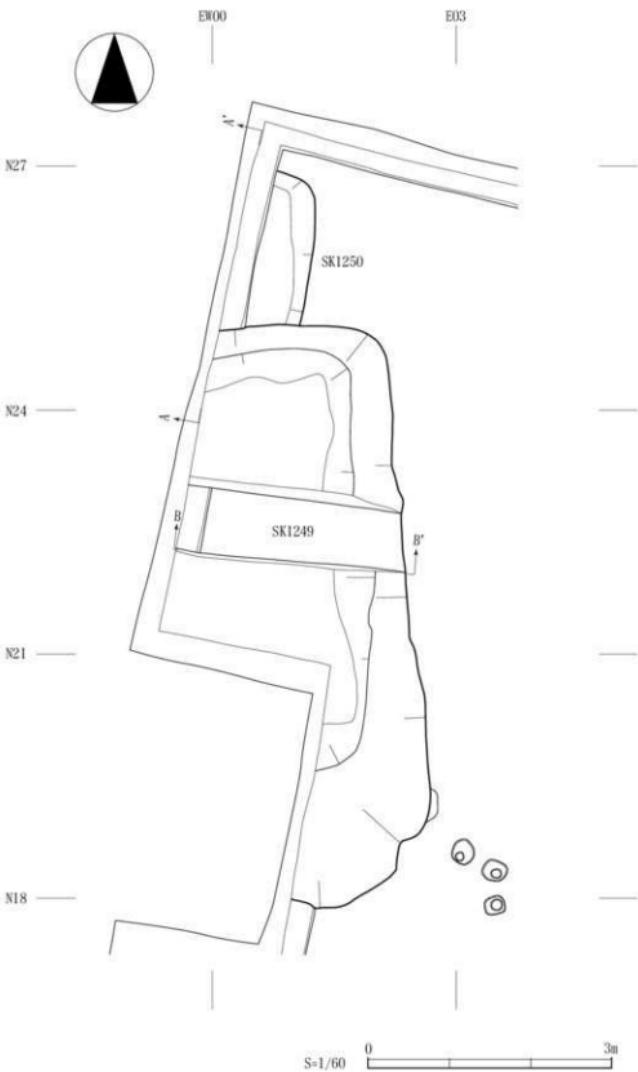
4. III層上面検出遺構

S K1249土壤（第32～34図）

調査区北部で発見した土壤である。SK1250と重複し、それよりも古い。平面形は方形であり、規模は南北7.1m、東西3.1m以上、深さ1.1mである。底面には凹凸がほとんどなく、概ね平坦である。壁は下方が垂直気味に、上方が開き気味に立ち上がりっている。埋土は6層に分けられる。1・2層は黒褐色砂質土が主体であり、1層には暗褐色



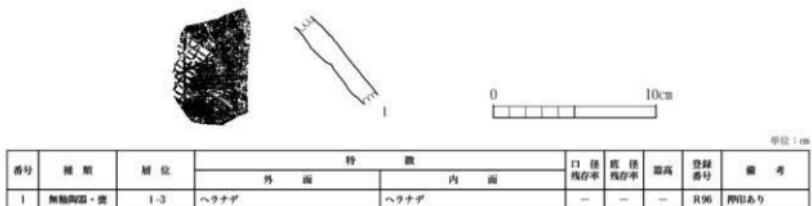
第32図 SK1249断面図



第33図 SK 1249・1250平面図

砂質土、2層には炭化物が僅かに混入している。3・4層は黒褐色粘質土または黑色粘質土が主体であり、炭化物が僅かに混入している。5層は暗灰色粘質土粒が混入するオリーブ黒色粘質土であり、東壁付近はにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。6層は黒褐色粘土や暗灰色粘質土が混入する暗緑灰色砂質土であり、部分的に黒褐色粘質土の薄層が認められる。

遺物は、無釉陶器甕の小片と古代の土器片が出土している。

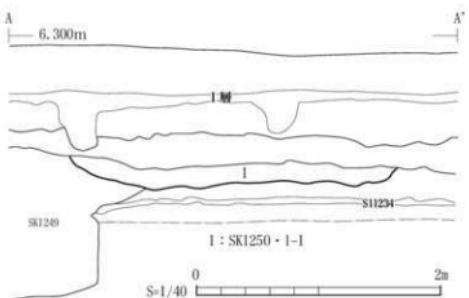


第34図 SK1249土壤出土遺物

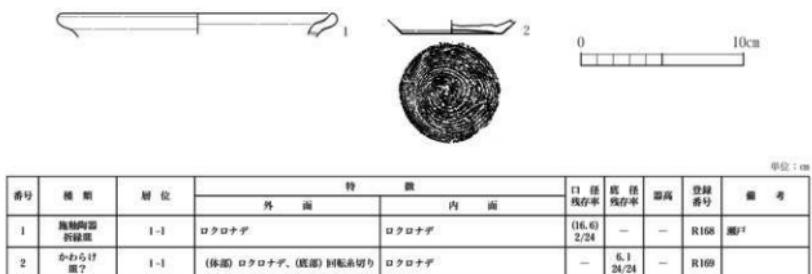
S K1250土壤 (第33・35・36図)

調査区北部で発見した土壤である。SK1249と重複し、それよりも新しい。平面形は方形であり、規模は南北2.7m以上、東西1m以上、深さ16~18cmである。底面には凹凸があり、平坦ではない。壁は各辺とも非常に緩やかに立ち上がっており。埋土は黒色砂質土が主体であり、炭化物やにぶい黄橙色砂質土が多量に混入している。

遺物は、施釉陶器折縁皿、かわらけ皿が出土している。



第35図 SK1250ほか断面図



第36図 SK1250出土遺物

5. II層上面検出遺構

S D1251溝跡（第37・40図）

調査区南部で発見した東西方向の溝跡である。S D1253、S K1254と重複し、それらよりも古い。方向は、西で約3度北に偏している。規模は、長さ6.7m以上、上幅60~93cm、下幅45~62cm、深さ32~50cmである。底面に凹凸はほとんどなく、壁は垂直に立ち上がっている。東から西に向かって緩やかに傾斜しており、比高は5cmである。埋土は、黒褐色粘土が主体であり、オリーブ灰色砂質土粒が混入している。

遺物は、かわらけ灯明皿、漆器碗が出土している。

S D1252溝跡（第38・40図）

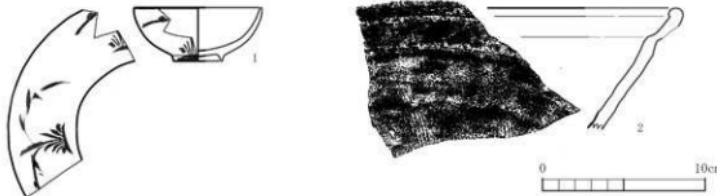
調査区南部で発見した東西方向の溝跡である。S K1260・1261と重複し、それらよりも古い。方向は、西で約2度北に偏している。規模は、長さ6.1m以上、上幅2.3~2.4m、下幅54~92cm、深さ18~32cmである。底面に凹凸や傾斜はほとんどなく、概ね平坦である。壁は下位付近に僅かに段が認められるが、非常に緩やかに立ち上がっている。埋土は3層に分けられる。1層はにぶい黄褐色砂質土粒が混入する暗褐色砂質土、2層は褐灰色粘質土が粒上または薄い層状に混入するにぶい黄橙色砂質土、3層は灰色砂質土粒が混入する黒色粘土である。

遺物は、磁器皿・紅猪口、陶器碗・皿・鉢・擂鉢が出土している。



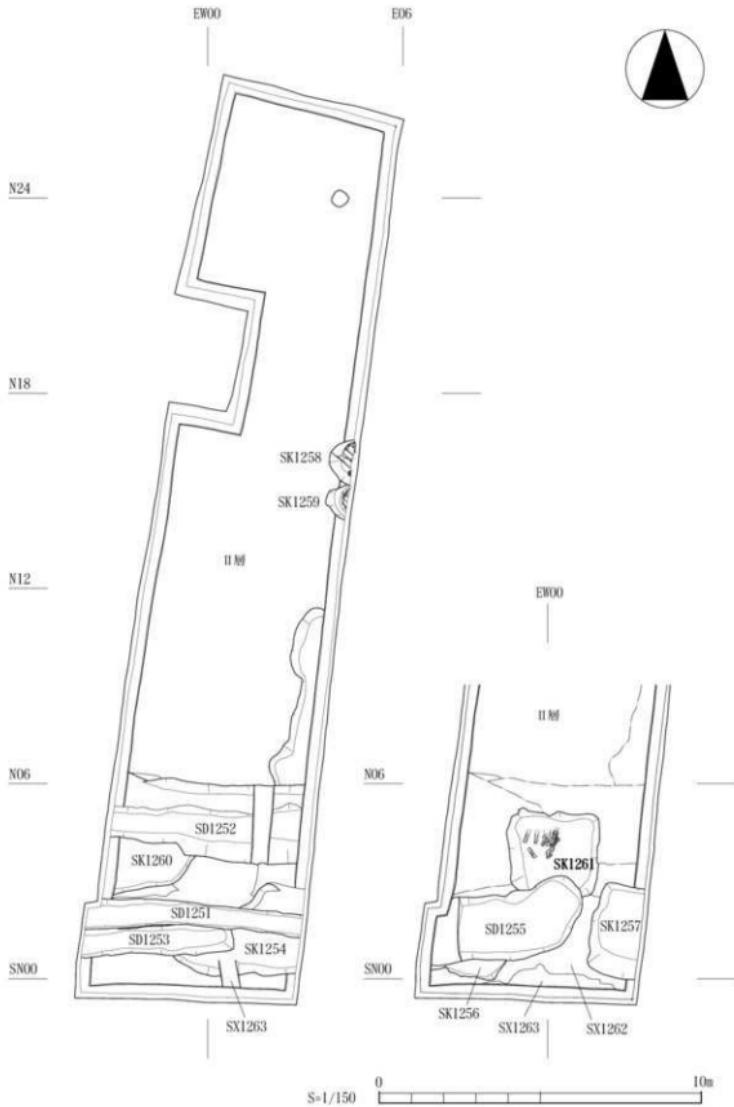
番号	種類	層位	特徴		口径	底径	深さ	基面	登録番号	備考
			外面	内面						
1	かわらけ 灯明皿	I-I	体：ロクロナデ、底：斜板系切り	ロクロナデ	6.2 24/24	3.3 24/24	1.7	R45		

第37図 S D1251出土遺物

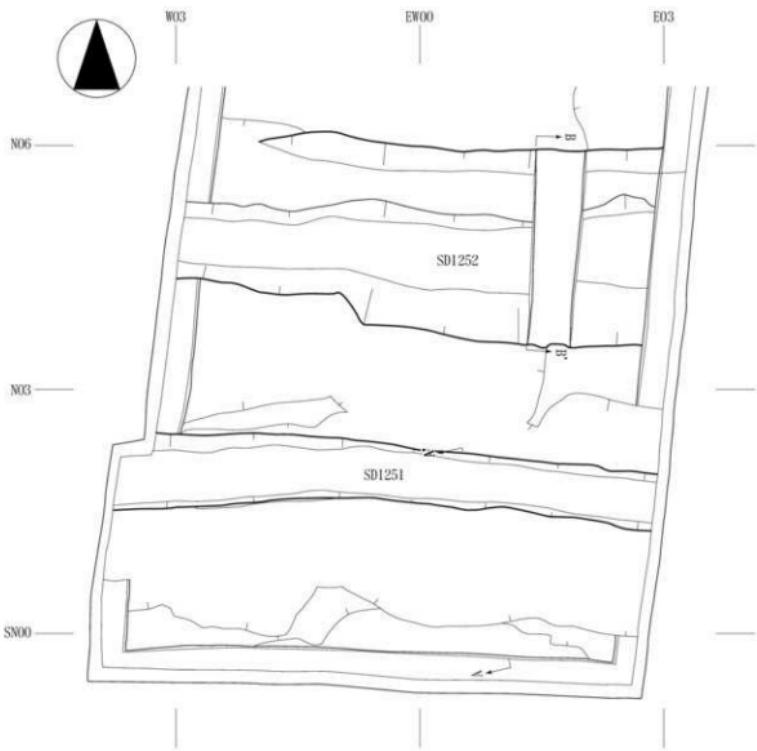


番号	種類	層位	特徴		口径	底径	深さ	基面	登録番号	備考
			外面	内面						
1	磁器・紅猪口	I-I	染付（筆竹文）		7.8 12/24	3.0 15/24	3.3	R44		肥前
2	陶器・擂鉢	I-I	ロクロナデ	ロクロナデ、脚目	—	—	—	R115		

第38図 S D1252出土遺物



第39図 近世の遺構平面図



第40図 SD1251・1252平面図・断面図

S D1253溝跡（第41図）

調査区南部で発見した東西方向の溝跡である。S D1251・1255、SK1254と重複し、SD1251よりも新しく、SD1255、SK1254よりも古い。方向は、西で約2度北に偏している。規模は、長さ4.6m以上、上幅75~94cm、下幅45~65cm、深さ24~28cmである。壁は南辺が垂直気味に、北辺がそれよりもやや緩やかに立ち上がっている。底面に凹凸はほとんどなく、西から東に向かって緩やかに傾斜している。東西の比高は12cmである。埋土は3層に分けられる。1・2層は黒色粘土が主体であり、2層にはにぶい橙色砂質土粒に混入している。3層はオリーブ黑色粘土である。

遺物は出土していない。

S D1255溝跡（第43~45図）

調査区南部のSX1263整地層上面で発見した東西方向の溝跡である。SD1253、SK1254・1256と重複し、SD1253、SK1254よりも新しく、SK1256よりも古い。方向は、西で約9度南に偏している。規模は長さ4.8m以上、上幅1.9~2m、下幅1.4~1.6cm、深さ20~40cmである。底面は凹凸が著しく、平坦ではない。壁は若干凹凸があるものの、緩やかに立ち上がっている。埋土は3層に分けることができる。1層は炭化物やにぶい黄褐色砂質土ブロックが多量に混入する黒色砂質土、2・3層は炭化物や木屑が多量に混入する黒褐色砂質土である。

遺物は、磁器椀・皿・瓶、陶器椀・鉢・擂鉢・焙烙、瓦質土器火鉢・焜炉形土器・火消壺蓋、堤人形（註）、銭貨（古寛永錢）、煙管雁首・釘、砥石、漆器椀、木製落し蓋、その他不明木製品が出土している。

S K1254土壤（第41・42図）

調査区南部で発見した土壤であり、上面はSX1263整地層に覆われている。SD1251・1253と重複し、それよりも新しい。平面形は不整形であり、規模は東西4.1m以上、南北2.8m、深さ24~28cmである。底面に凹凸はほとんどなく、壁は非常に緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に分けることができる。1層は黒色の亜泥炭層、2層はにぶい黄褐色砂質土ブロックが多量に混入する黒色粘土である。

遺物は、陶器椀・仏飯器・瓦質土器火鉢・堤人形が出土している。

S K1260土壤（第43・46~48図）

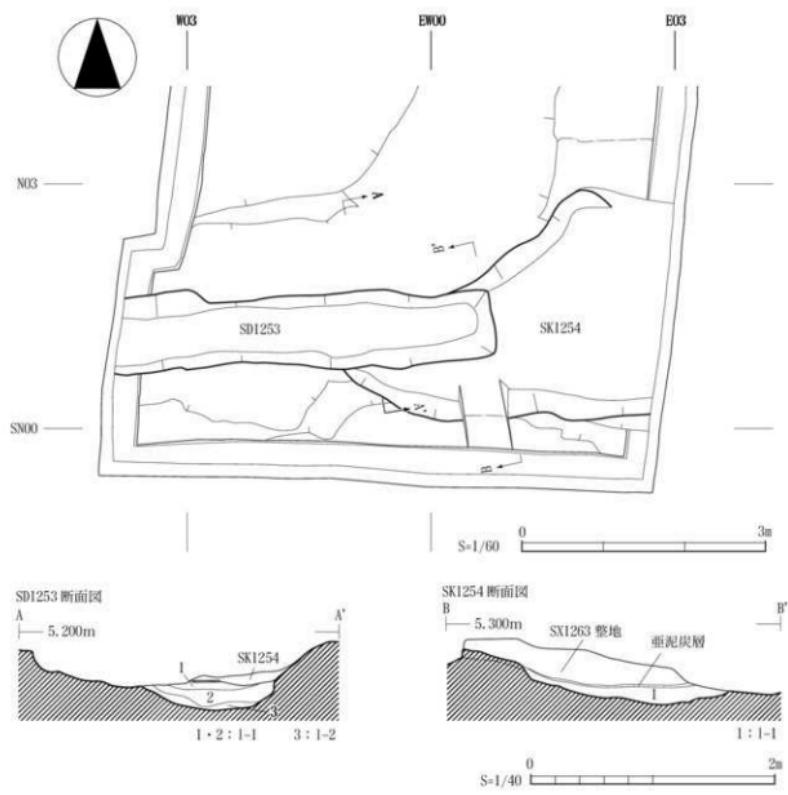
調査区南部で発見した土壤である。SD1252、SK1261と重複し、SD1252よりも新しく、SK1261よりも古い。規模は東西3m以上、南北最大3.7m、深さ32~40cmである。底面にほとんど凹凸はなく、概ね平坦である。壁は北側が垂直気味に立ち上がっているが、南側は非常に緩やかである。埋土は2層に分けることができる。1層は炭化物が多量に混入する暗褐色砂質土、2層は砂粒が僅かに混入する褐灰色砂質土である。

遺物は、磁器椀・小杯・皿・猪口、陶器椀・皿・片口鉢・擂鉢・火入れ・焙烙・かわらけ灯明皿・瓦質土器甕・火鉢・瓦、石製硯、堤人形、煙管吸口・鎌、木製品下駄、その他不明木製品が出土している。

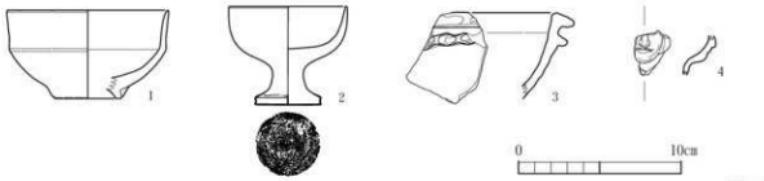
S K1256土壤（第49・50・52・53図）

調査区南部のSX1263整地層上面で発見した土壤である。SD1255と重複し、それよりも新しい。平面形は不整形であり、規模は東西1.8m以上、南北2.2~2.4m、深さ14~28cmである。底面は凹凸が著しく平坦でない。壁は南側がやや凹凸があるものの、非常に緩やかに立ち上がっている。埋土は黒色粘土が主体であり、炭化物が多量に混入している。

(註) 今回出土した土製人形については全て堤人形と考えられることから、本報告では以下「堤人形」と記載する。

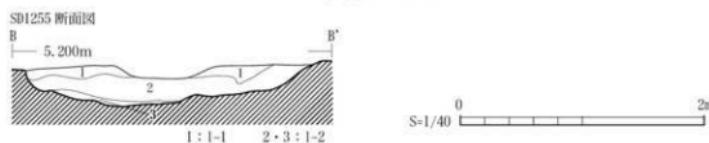
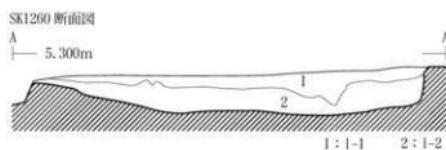
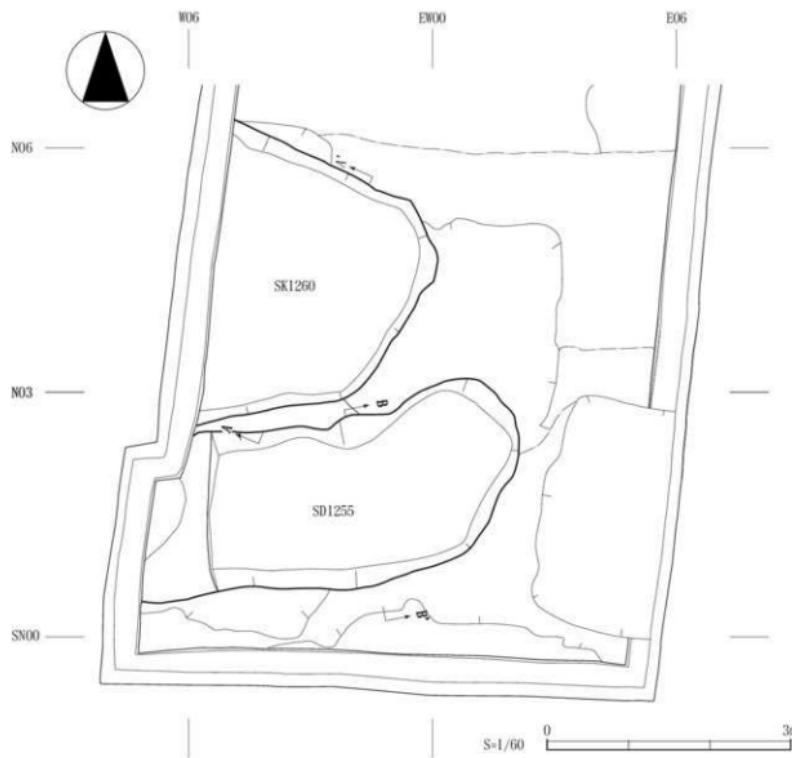


第41図 SD1253、SK1254平面図・断面図

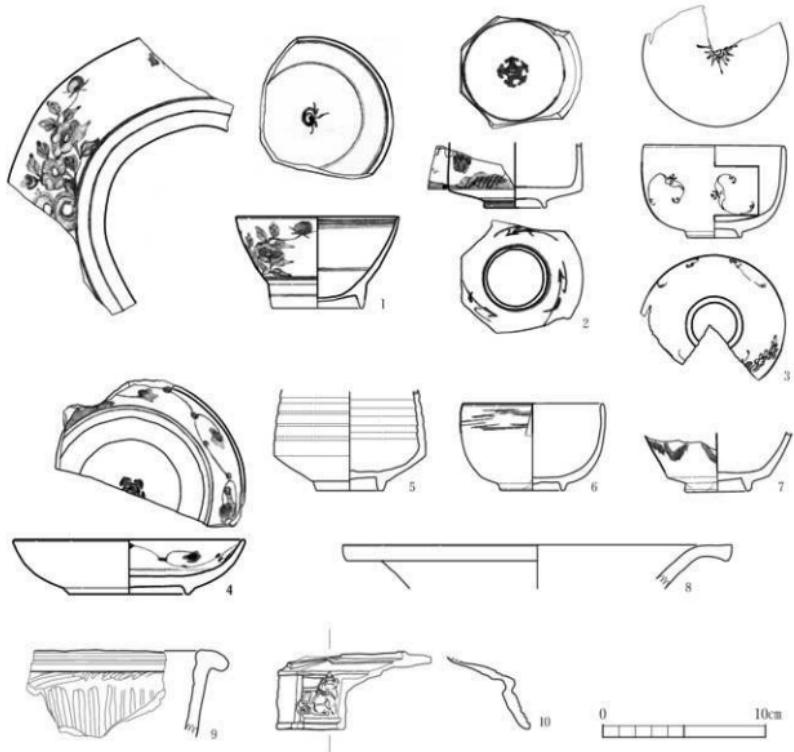


番号	種類	解説	特徴		E1 個数	E2 個数	部高	瓦当 回数	登録 番号	備考
			外 面	内 面						
1	陶器・椀	1-2	口～高台：灰釉	灰釉	(3,8)	(4,1)	5.4	—	R114	大輪相馬
2	脚器・仏脚器	1-2	口～脚部下平：灰釉、素；脚部 底部：刮削面切り	灰釉	(7,2)	4,0	6.0	6	R43	小野相馬
3	瓦質土器・火鉢	1-1	ロクロナギ	ロクロナギ	—	—	—	—	R182	
4	埴人形	1-1						—	R102	

第42図 SK1254出土遺物

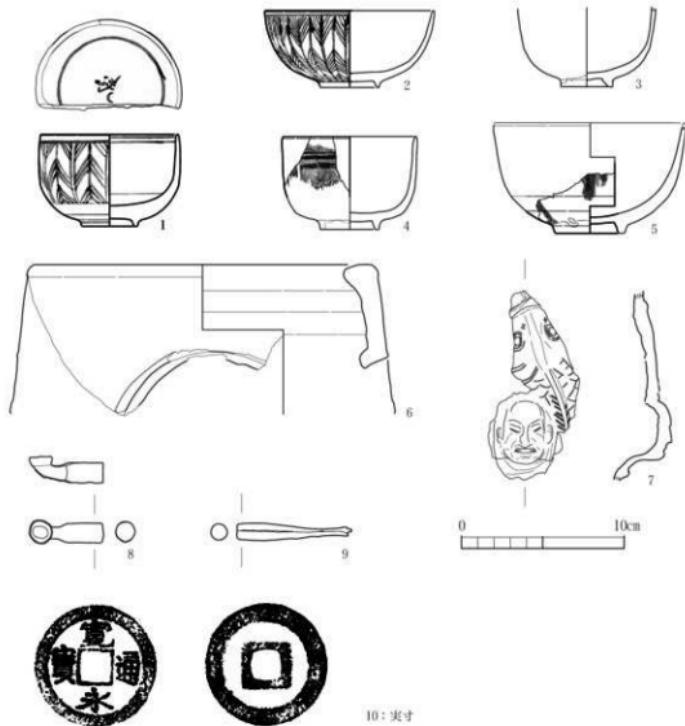


第43図 SD1255、SK1260平面図・断面図



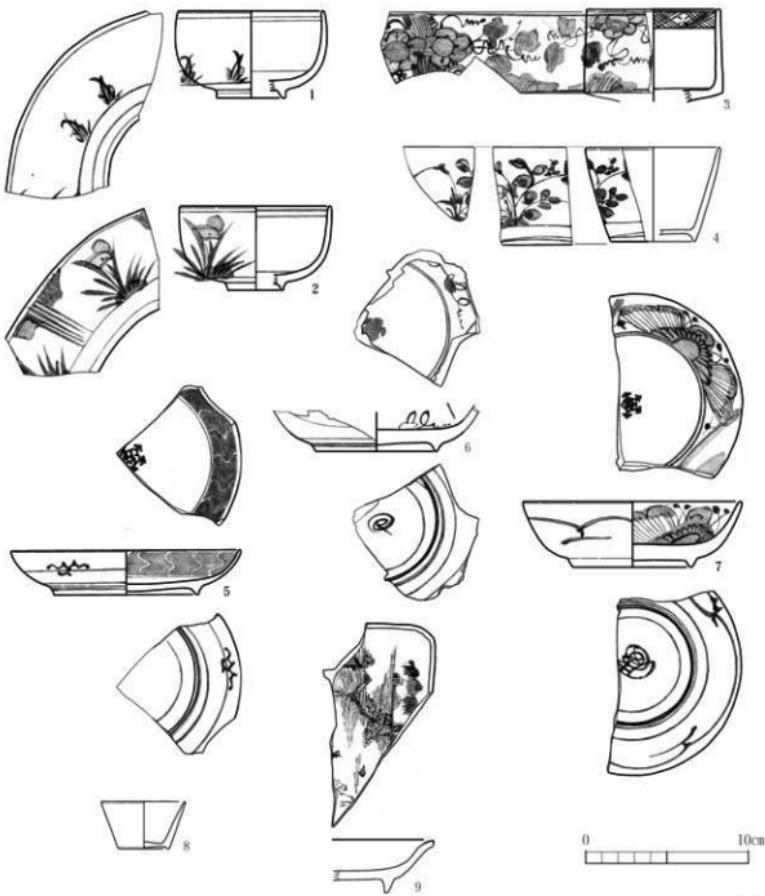
番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	磁器・陶	I-I	体：草花文、高台：圓錐	体：圓錐。見込み：	(10.0) 10/24	5.5 24/24	5.6	6	R14	鏡D+・美濃
2	磁器・陶	I-I	体：草花文、体下：折れ脚雲文？ 高台：圓錐	見込み：五弁花文（コンニャク印判）	—	3.8 24/24	—	—	R16	肥前
3	磁器・陶	I-I	体：草花文？	見込み：火炎文	8.5 15/24	3.2 8/24	5.7	6	R15	肥前
4	磁器・小皿	I-I		体：草花文 見込み：五弁花文（染付）	(14.1) 5/24	7.4 12/24	3.4	—	R18	肥前
5	陶器 火入れ (?)	I-I	体～高台：鉛釉	無釉	—	4.1 12/24	—	—	R120	大輪相馬？
6	陶器・陶	I-I	口～高台：灰釉	灰釉	8.65 12/24	3.9 23/24	5.3	—	R10	大輪相馬
7	陶器・陶	I-I	体～高台：灰釉、鉛釉	灰釉	—	3.8 24/24	—	—	R121	大輪相馬
8	瓦質土器 火消蓋	I-I	ロクロナデ	ロクロナデ	(23.9) 6/24	—	—	—	R152	
9	瓦質土器 火鉢	I-I	口：鉛釉ヘラケズリ 体：ロクロナデ～ヘラミガキ	ロクロナデ	—	—	—	—	R122	
10	埴人形	I-I	堂内天神					—	R106	

第44図 SD1255溝跡出土遺物（1）



番号	種類	層位	特徴		口径 外 面 内 面	底 径 残存率	底 径 残存率	器高	写真 回数	登録 番号	備考
			外 面	内 面							
1	磁器・陶	1-2	体:矢羽根文。体下～高台:圓錐	体:圓錐、見込み:	(8.4) 7/24	3.4 19/24	5.6	—	R17	肥前	
2	磁器・陶	1-2	体:矢羽根文		(10.3) 9/24	3.6 12/24	4.7	—	R19	肥前	
3	陶器・陶	1-2	体～高台:灰釉	灰釉	—	3.2 15/24	—	—	R52	大綱粗馬	
4	陶器・陶	1-2	口～高台:灰釉 体上半:鉄錫掛け流し	灰釉	(8.2) 1/24	3.6 24/24	5.7	—	R21	大綱粗馬	
5	陶器・陶	1-2	口～高台:灰釉 体上半:鉄錫掛け流し	灰釉	—	4.4 24/24	—	—	R51	大綱粗馬	
6	瓦質土器 鐵炉	1-2	ロクロナデ	ロクロナデ	(20.5) 6/24	—	—	—	R119		
7	埴人形	1-2	體くわみ					8	R105		
8	煙管・巻首	1-1	長さ:4.6、火頭径:1.4、巻宇接合部径:1.2					—	R11		
9	煙管・吸口	1-1	長さ:7.1、巻宇接合部径:1.0、吸口径:(0.6)					—	R10		
10	銅鏡 寛永通宝	1-2	直径:2.5、厚さ:0.05					—	R6	古宣永鏡	

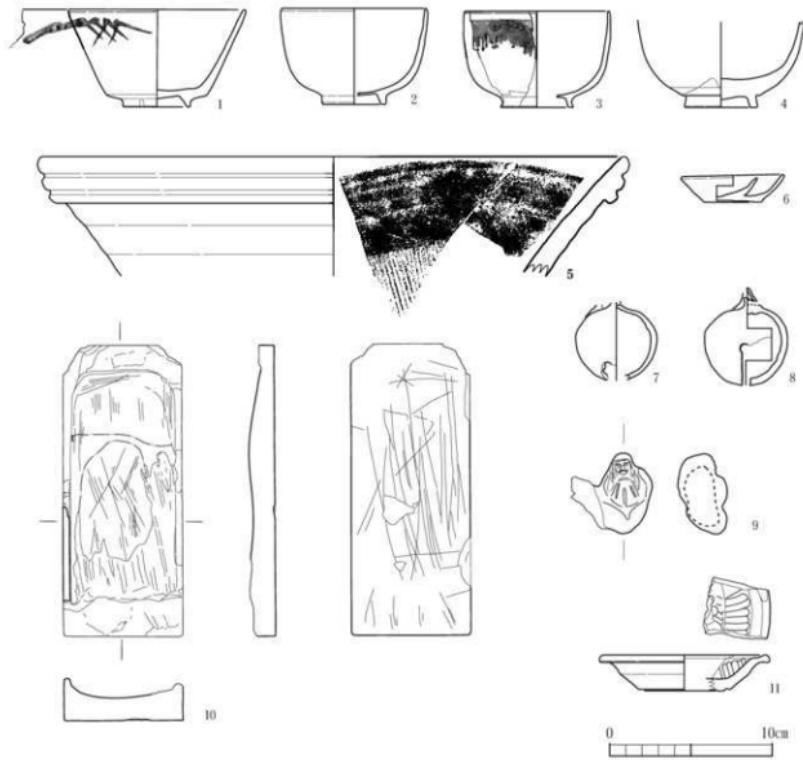
第45図 S D1255出土遺物（2）



单位: cm

番号	種類	部位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	厚高 回版	登録 番号	備考
			外 面	内 面						
1	磁器・碗	I-1	体: 草花文、團練	体部: 團練	(8.8) 10/24	(4.1) 7/24	5.3	—	R34	肥前
2	磁器・碗	I-1	体: 草花文(水仙)、團練	体部: 團練	(9.2) 10/24	(3.4) 5/24	5.2	—	R30	肥前
3	磁器・碗	I-1	体: 草花文、團練	口縁部: 四方摩文、体部: 團練	(8.2) 10/24	—	—	—	R31	肥前
4	磁器・唐口	I-2	体: 草花文、團練		(8.1) 9/24	(5.2) 7/24	5.8	—	R161	肥前
5	磁器・小皿	I-1	体: 薙草文?、團練、見込み: 五舟花文(コンニャク印判)	体部: 薙草文? 見込み: 五舟花文(コンニャク印判)	(14.0) 4/24	(8.8) 7/24	2.7	—	R33	肥前
6	磁器・小皿	I-1	体: 草花文、團練	体部: 草花文、見込み: 五舟花文(コンニャク印判)	—	(7.4) 8/24	—	—	R162	
7	磁器・小皿	I-1	体: 薙草文、團練、底部: 「鍋板文」 見込み: 五舟花文(コンニャク印判)	体部: 薙草文、底部: 「鍋板文」 見込み: 五舟花文(コンニャク印判)	(13.3) 10/24	7.2 15/24	4	6	R32	肥前
8	磁器・小杯	I-1			5.1 17/24	3.0 15/24	2.9	—	R35	肥前
9	磁器・角皿	I-1		山水文	—	—	3.2	—	R7	

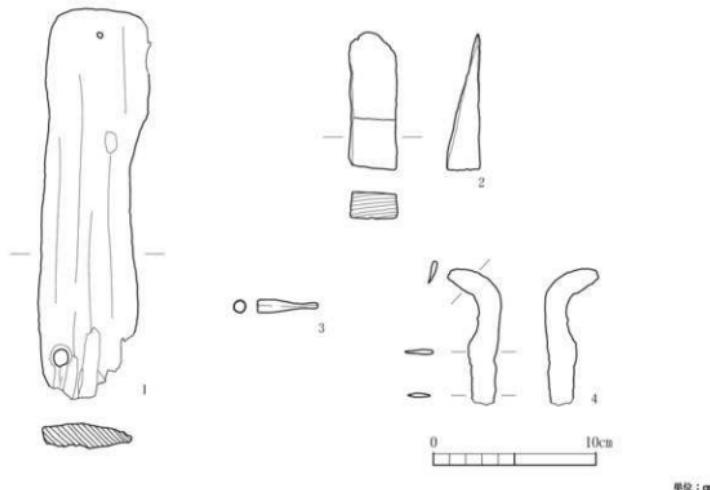
第46図 SK1260出土遺物 (1)



0 10cm
単位: cm

番号	種類	部位	特徴		口径	底径	残存率	器高	耳高	登録番号	備考
			外面	内面							
1	陶器・施	I-1	口～高台：灰釉、 体上半：鉄胎？	灰釉	(10.8) 7/24	4.1 23/24	6.0	—	6	R37	大輪粗馬
2	陶器・施	I-1	口～高台：灰釉	灰釉	(8.8) 7/24	3.8 17/24	5.9	—	R36	大輪粗馬	
3	陶器・施	I-1	口～側：灰釉、 体上半：鉄胎剥け流し	灰釉	(8.8) 4/24	(4.4) 4/24	5.9	—	R164	大輪粗馬	
4	陶器・施	I-1	体：透明釉、高台：鐵胎	灰釉	—	4.4 14/24	—	—	R175	肥前	
5	陶器・蓋鉢	I-1	ロクロナデ、鉄胎	ロクロナデ、鋤目、鉄胎	(35.8) 4/24	—	—	—	R157		
6	かわらけ 印明墨	I-1	ロクロナデ 底面：回転赤切り	ロクロナデ	6.3 15/24	3.5 30/24	1.7	7	R38		
7	土鈴	I-1	高さ：5.7、幅：5.0、厚さ：0.2～0.4					—	R110	堤？	
8	土鈴	I-1	高さ：6.0、幅：5.1、厚さ：0.3～0.4					—	R109	堤？	
9	埴人形	I-1	達磨					—	R99	堤	
10	石製品 鏡	I-1	長さ：12.9、幅：7.3、厚さ：(鏡) 0.8～(鏡) 1.3					—	R39		
11	施釉陶器 折縁皿	I-1	体：施釉	施釉、刻文、底：菊の押印	(10.4) 2/24	(4.4) 4/24	2.3	—	R171	瀬戸・美濃大葉	

第47図 S K1260出土遺物（2）



番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外 面	内 面						
1	本製品 下駄	I-I	長さ:23.4以上、幅:6.3、厚さ:1.4						7	R8
2	本製品 櫛?	I-I	長さ:8.5、幅:3.0、最大厚:2.0						-	R9
3	煙管・吸口	I-I	長さ:3.8、繩字接合部:0.8、吸口径:0.3						-	R4
4	鉄製品 鑓	I-I	長さ:8.4以上、最大幅:1.8、最大厚:0.3						-	R8

第48図 SK1260土壤出土遺物（3）

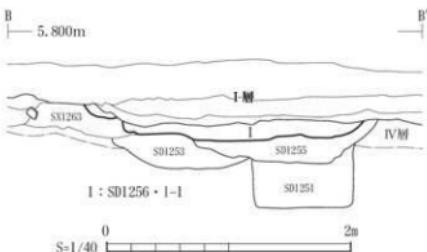
遺物は、磁器椀・水滴、陶器椀・皿・秉杓、かわらけ灯明皿、瓦質土器甕・火鉢・火消蓋、石製硯、堤人形、錢貨（新寛永錢）、煙管吸口、漆器椀、木製曲物が出土している。

S K1257土壤（第50・51・54～56図）

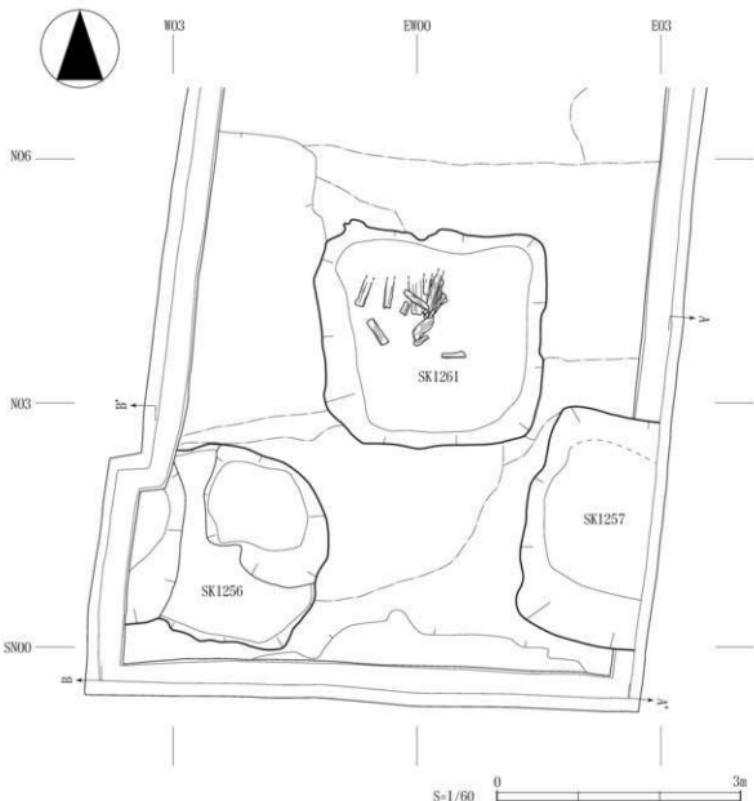
調査区南部のS X1263整地層上面で発見した土壤である。平面形は方形であり、規模は東西1.5m以上、南北2.7m、深さ45cmである。底面は若干凹凸があるものの、概ね平坦である。壁は南壁中位付近に段が認められるが、

非常に緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に分けることができる。1層は黒褐色粘土、2層はオリーブ灰色砂質土粒が混入する黒色粘土である。また、1層上面には亞泥炭層が非常に薄く体積している。

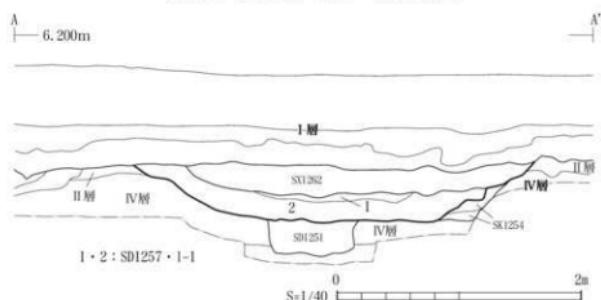
遺物は、磁器椀・皿、陶器椀・片口鉢・灯明皿、瓦質土器甕、堤人形、砥石、煙管吸口、木製下駄・曲物が出土している。



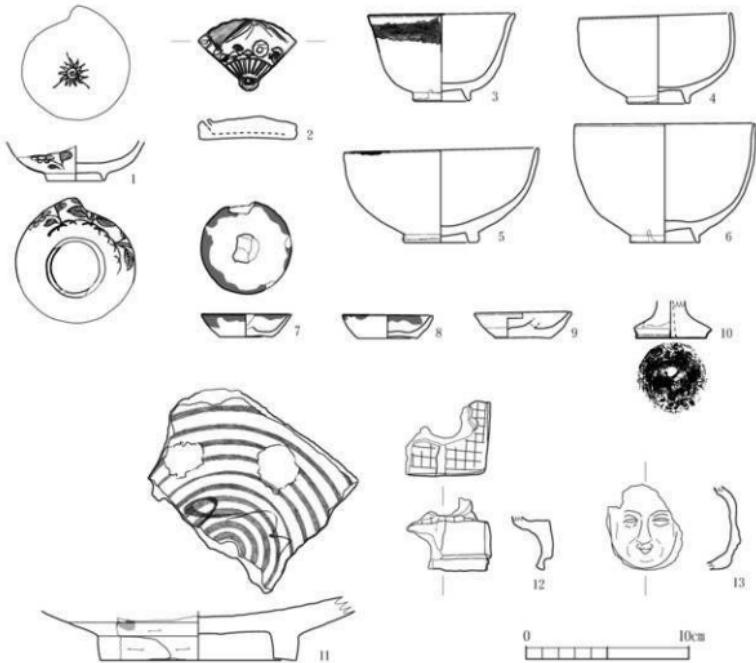
第49図 S D1250ほか断面図



第50図 SK 1256・1257・1261平面図



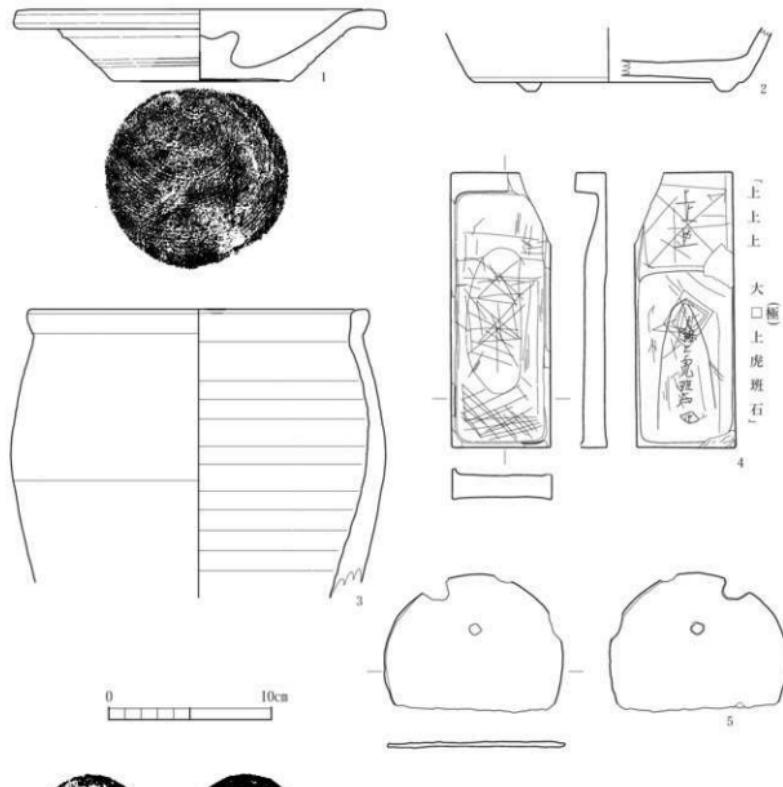
第51図 SD 1257ほか断面図



単位: cm

番号	種類	層位	特徴		口径	底径	高さ	器高	写真	登録番号	備考
			外面	内面							
1	磁器・碗	I-I	体:草花文	見込み:火炎文	—	(3.4) 10/24	—	—	6	R54	肥前
2	磁器・水滴	I-I	草文の刷毛・染付、底部:布目、最大幅:6.0、最大厚:1.3						—	R25	肥前
3	陶器・碗	I-I	口~高台:灰釉 体上半:緑色釉剥げ流し	灰釉	(9.0) 4/24	3.5 12/24	5.3	—	—	R24	大綱相馬
4	陶器・碗	I-I	口~高台:灰釉	灰釉	(9.2) 11/24	2.7 12/24	5.5	—	—	R23	大綱相馬
5	陶器・碗	I-I	口~高台:灰釉 口縁端:緑色釉	灰釉	11.9 18/24	4.4 24/24	5.8	6	R20	大綱相馬	
6	陶器・碗	I-I	口~高台:灰釉	灰釉	(11.3) 9/24	4.3 24/24	7.2	—	—	R22	大綱相馬
7	かわらけ 印明鏡	I-I	ロクロナデ 底沿:回転糸切り	ロクロナデ、油煙付着	5.5 20/24	3.3 24/24	1.4	—	—	R27	
8	かわらけ 印明鏡	I-I	ロクロナデ 底沿:回転糸切り	ロクロナデ、油煙付着	5.5 22/24	3.6 24/24	1.5	—	—	R26	
9	かわらけ 印明鏡	I-I	ロクロナデ 底沿:回転糸切り	ロクロナデ	5.9 20/24	3.4 24/24	1.6	7	R28		
10	陶器・米桶	I-I	脚部下半:灰釉、蓋:露胎 底沿:回転糸切り、円孔有り		—	4.3 24/24	—	—	—	R118	
11	陶器・瓶	I-I	回転ヘラケズリ	二部、砂目	—	12.0 6/24	—	7	R53	肥前	
12	瓶人形	I-I	甚難(上面に鶴馬?)					—	—	R143	
13	瓶人形	I-I	人面(脚子無?)					—	—	R97	

第52図 S K1256出土遺物 (1)

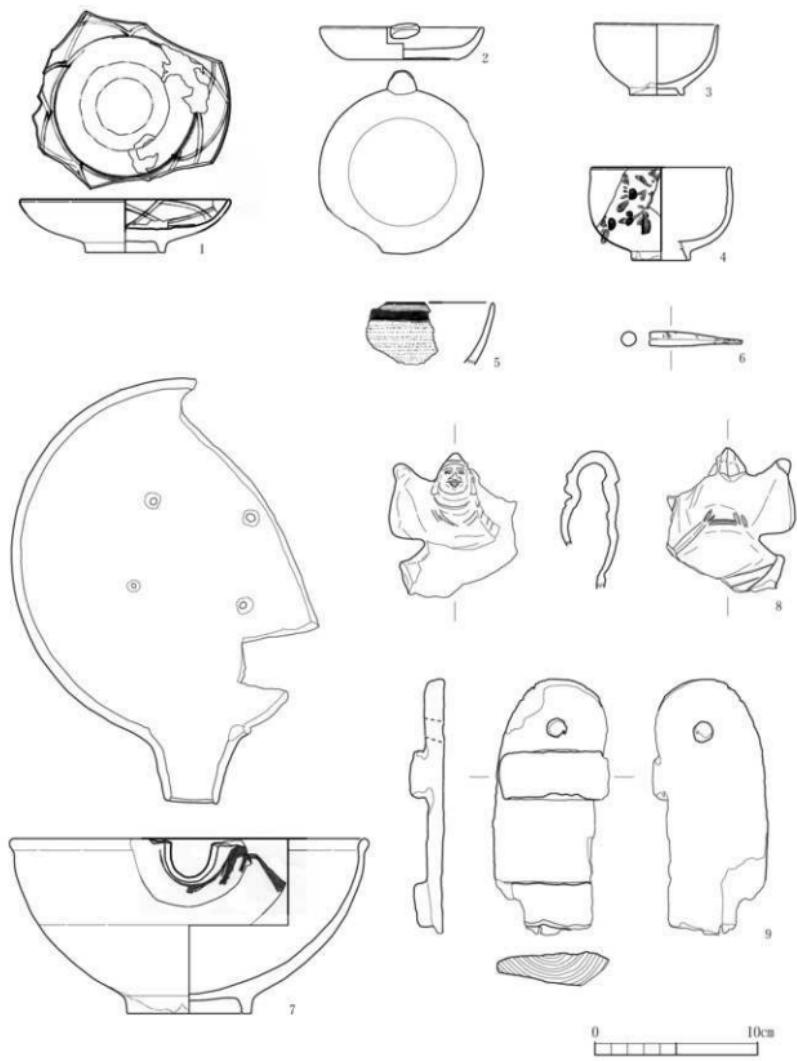


6: 実寸

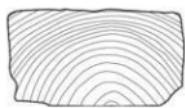
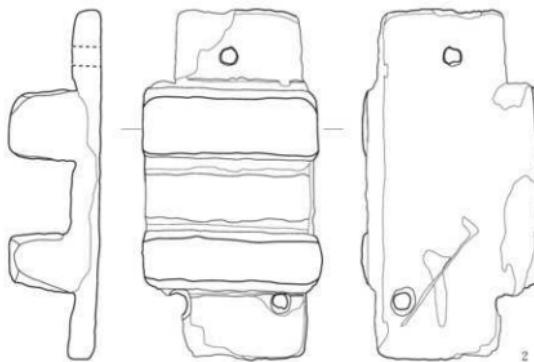
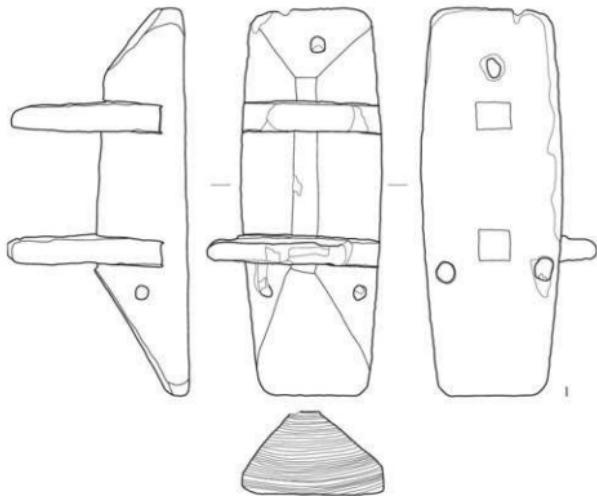
単位: cm

番号	種類	層位	特徴		口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	写真 回数	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	瓦質土器 火跡	I-II	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	(12.5) 10/24	11.0 24/24	4.4	7	R47	
2	瓦質土器 火跡	I-II	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	—	16.5 18/24	—	—	R116	
3	瓦質土器 裏	I-II	ロクロナデ	ロクロナデ	(21.0) 7/24	—	—	—	R49	
4	石製品 瓶	I-II	長さ：16.9、幅：6.1、厚さ：(内) 0.5～(外) 1.4、裏面に「上上上 大極上虎斑石」の刻書					—	R29	
5	不明木製品	I-II	直径：11.0、厚さ：0.4					—	R14	
6	銅質 寛永通宝	I-II	直径：2.2、厚さ：0.1					—	R5	新寛永錢

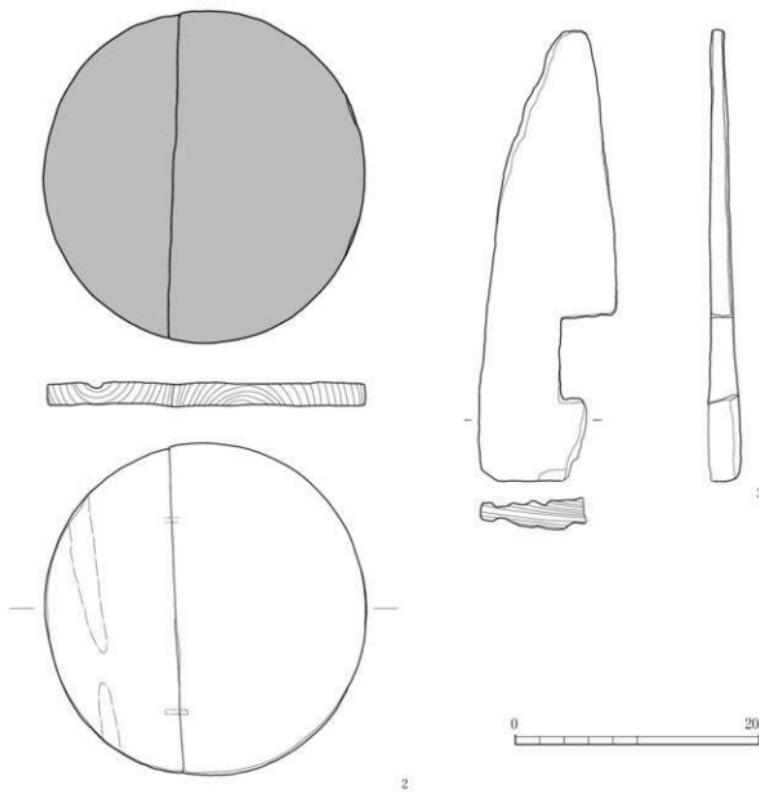
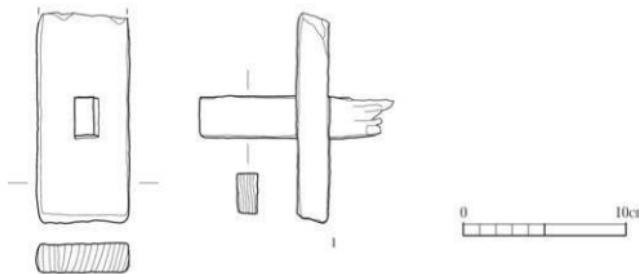
第53図 SK1256出土遺物 (2)



第54図 S K1257出土遺物（1）



第55図 S K1257出土遺物（2）



第56図 SK1257土壤出土遺物（3）

第54回観察表

単位: cm

番号	種類	層位	特徴		口存率	底存率	器高	写真 回数	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	縦器・壺	I-I		体:格子文	(12.6) 4/24	4.8 24/24	3.3	—	R40	肥液
2	陶器・灯明皿	I-I	体:鉄輪 底色:露胎。刮軸糸切り	鉄輪	10.0 20/24	6.6 24/24	2.0	—	R42	
3	陶器・壺	I-I	口~高台:灰釉	灰釉	7.8 24/24	3.3 24/24	4.4	6	R41	大輪粗馬
4	陶器・壺	I-I	口~高台:灰釉 体:鉄輪	灰釉	(8.4) 2/24	(3.4) 4/24	5.7	—	R174	大輪粗馬
5	陶器・壺	I-I	口:鉄輪。体:黄褐色	鉄輪	—	—	—	—	R176	■
6	煙管・吸口	I-I	長さ:5.8、羅字接合部径:0.8、吸口径:0.3					—	R7	
7	陶器・片口鉢	I-I	口~高台:灰釉 注口:鉄輪	灰釉、目跡4ヶ所	21.8 12/24	7.6 24/24	10.7	6	R46	大輪粗馬
8	埴人形	I-I	恵比寿					8	R107	
9	本製品 下駄	I-II	通縫、長さ:—、幅:—、高さ:2.1					—	R4	

第55回観察表

単位: cm

番号	種類	層位	特徴	写真 回数	登録 番号	備考
1	本製品 下駄	I-II	長さ:23.8、幅:8.7、高さ:10.7	—	7	R6
2	本製品 下駄	I-II	長さ:21.5、幅:—、高さ:5.7	—	7	R5

第56回観察表

単位: cm

番号	種類	層位	特徴	登録 番号	備考
1	不明木製品	I-I	(幅の広い部) 幅:5.7、厚さ:1.8、(幅の狭い部) 幅:2.5、厚さ:1.3	—	R7
2	木製品 底板?	I-II	直径:27.0、厚さ:2.0、2枚の板を木釘で接合	—	R1
3	不明木製品	I-II	直径:27.0、厚さ:2.0、2枚の板を木釘で接合、内面精造	—	R2

S K1261土壤 (第50図)

調査区南部で発見した土壤である。SD1252・1255、SK1260と重複し、それよりも新しい。平面形は方形であり、規模は東西2.7~2.9m、南北2.6~2.7m、深さ20cmである。底面は若干凹凸があるものの概ね平坦であり、北西部では薄い板材数枚が長軸を南北方向に合わせて並べられていた。壁は各辺ともに非常に緩やかに立ち上がっている。埋土は黒褐色粘土粒が混入するにぶい黄褐色砂質土である。

遺物は、磁器碗、陶器皿・蓋・植木鉢、埴人形が出土している。

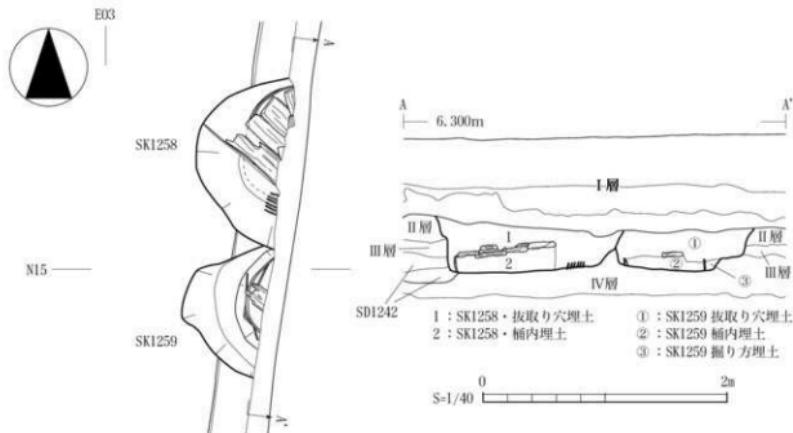
S K1258土壤 (第57図)

調査区中央部で発見した土壤である。SX1259と重複し、それよりも古い。平面形は円形であり、規模は直径1.4m、深さ45cmである。底面は平坦であり、壁は北側が垂直に、それ以外は外に開き気味に立ち上がっている。埋土についてみると、板材及び竹製籠を境に2層に分けることができる(注)。1層はオリーブ黄色砂質土が多量に混入する褐灰色砂質土、2層は黒褐色粘土土である。これら埋土や板材、竹製籠の残存状況から判断すると、1層は本来土中に据えられていた早桶を抜き取るために掘られた抜取り穴、2層が

(注) SK1258・1259土壌についてはトイレ遺構の可能性も考慮し、採取した堆積物について寄生虫卵分析及び花粉分析を行っている(古環境研究所)。以下その結果を要約する。

SK1258では、回虫卵、鞭虫卵が検出されている(寄生虫卵密度: $7.0 \times 10^2 / 1\text{cm}^3$)。いずれも生水や汚染された野菜などから感染するもので中間宿主を必要とせず、明らかな消化経路は検出されない。花粉分析では、食用となるイネ穀類や栽培植物を含むアブラナ科が検出されるが、他は人里植物ないし耕作雑草の性格を示すもので、食用植物を特定するような結果は得られなかった。種実同定においても同様の結果であった。

SK1259では回虫卵、鞭虫卵、広葉賀蘭等虫卵が検出されている(寄生虫卵密度: $1.9 \times 10^2 / 1\text{cm}^3$)。いずれも汚染された生水、野菜、マス、サケなどから感染する。花粉分析、種実同定の結果は、周辺の植生を反映していると考えられ食用植物を特定するものではない。このことから、これら堆積物については生活汚染程度の寄生虫卵が検出される程度であり衛生的堆積物とは言えず、周辺の汚染域からの流入の可能性も考えられ、SK1258・1259がトイレ遺構である蓋然性は低い。なお、寄生虫卵密度はトイレ遺構とする1cm中に1000個以上(金原1992)の条件は満たさないが、近世の遺構であり施肥時に内容物を撒いたことも考えられるため、否定することはできない。



第57図 SK1258・1259平面図・断面図

桶内部に堆積した埋土が残存したものと考えられる。

遺物は、抜取り穴から瓦質土器瓦の小片が出土している。

S K1259土壤（第57図）

調査区中央部で発見した土壤である。SK1258と重複し、それよりも新しい。平面形は円形であり、規模は直径1.1m、深さ34cmである。壁は垂直に立ち上がるが、西側から南側にかけては底面から約10cmの高さで幅15~20cmの平坦面が形成されている。埋土は3層に分けることができる。1層はオリーブ黄色砂質土が僅かに混入する褐灰色砂質土、2層は黒褐色粘質土、3層はオリーブ黄色砂質土が多量に混入する褐灰色砂質土である。1・2層の境には板材が残存し、2・3

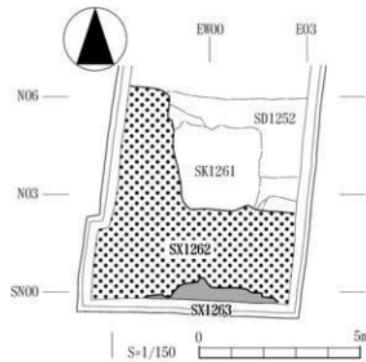
層の境には竹製籠が円形に巡っている。これら埋土や板材、竹製籠の残存状況から判断すると、1層は本来土中に据えられていた早桶を抜き取るために掘られた抜取り穴、2層が桶内部に堆積した埋土が残存したもの、3層が掘り方埋土と考えられる。

遺物は、抜取り穴から堤人形、石製硯が出土している。

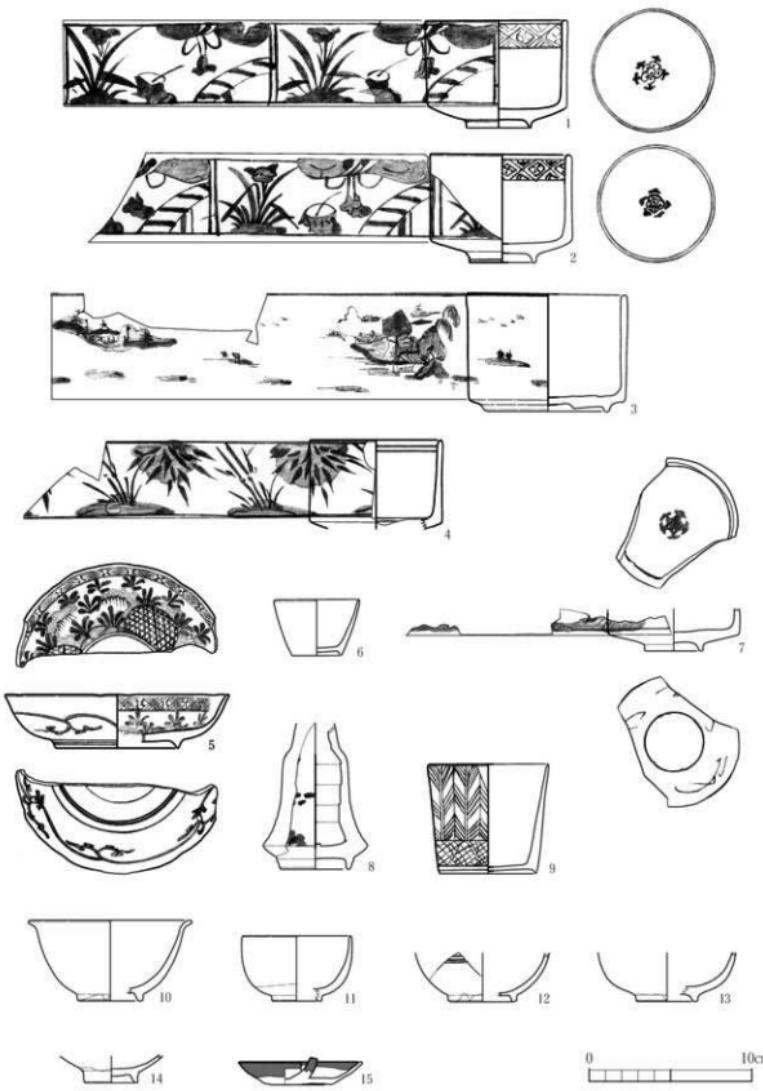
S X1262整地層（第58~60図）

調査区南部で確認した堆積土であり、II層上面で発見した全ての遺構よりも新しい。厚さは10~20cmであり、埋土は炭化物や凝灰岩ブロックが多量に混入する黒色砂質土である。

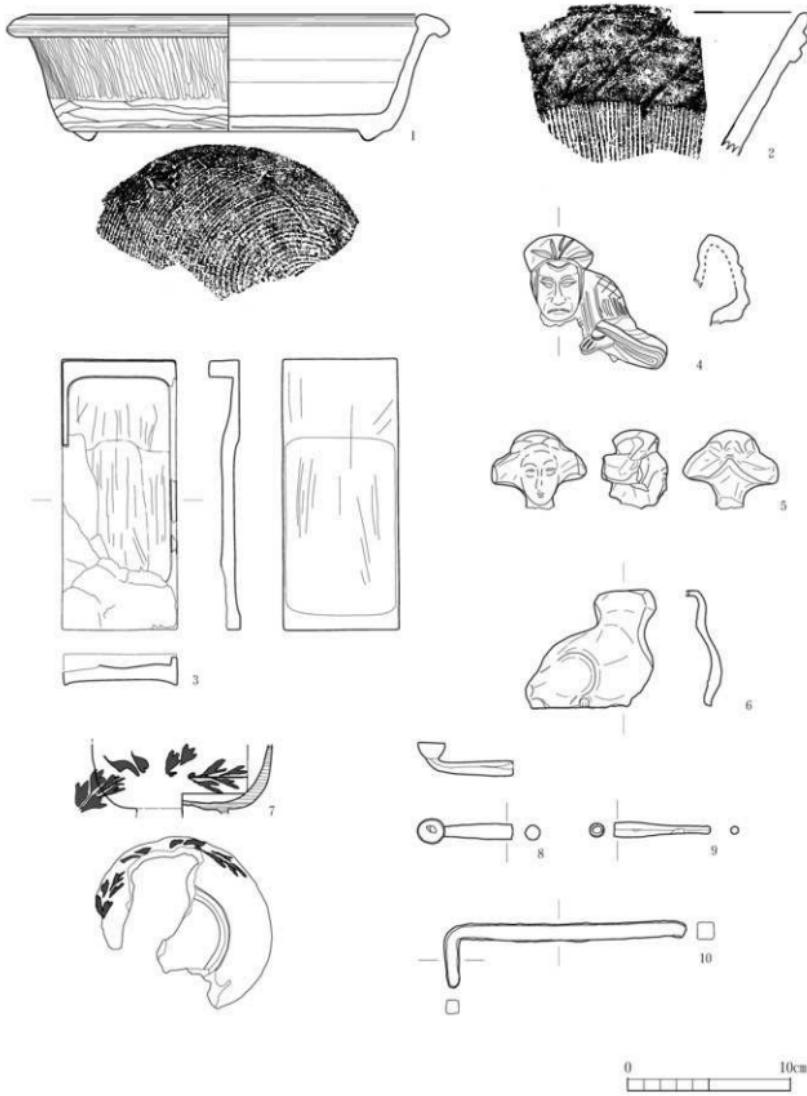
遺物は、磁器碗・小皿・猪口・小杯・水滴・瓶・陶



第58図 SX1262・1263平面図



第59図 S X1262出土遺物（1）



第60図 S X1262出土遺物（2）

第59回観察表

単位：cm

番号	機 順	層 位	特 徴		口 任 残存率	底 任 残存率	器高	写真 図版	登録番号	備 考
			外 面	内 面						
1	磁器・椀	I-I	体：草花文（水仙）、團羅	口縁部：四方瓣文、体部：團羅 見込み：五弁花文（染付）	7.7 23/24	3.9 23/24	6.6	6	R1	肥底
2	磁器・椀	I-I	体：草花文（水仙）、團羅	口縁部：四方瓣文、体部：團羅 見込み：五弁花文（染付）	8.7 16/24	4.0 24/24	6.6	6	R2	肥底
3	磁器・火入れ	I-I	体：山水文、團羅、底面：蛇目四型高台	見込み：椎洞び	9.9 15/24	7.4 24/24	7.2	6	R3	肥底
4	磁器・椀	I-I	体：墨竹文、團羅	口・底：團羅	8.1 16/24	—	—	—	R4	肥底
5	磁器・瓶	I-I	体：唐草文、團羅、	体部：草花文、籠目文	(13.0) 8/24	7.4 8/24	3.3	—	R5	肥底
6	磁器・小杯	I-I			5.2 14/24	5.0 16/24	3.4	—	R9	肥底
7	磁器・椀	I-I	体：草花文、折枝葉文、高台：團羅	見込み：五弁花文（コンニャク印刷）	—	3.6 23/24	—	—	R8	肥底
8	磁器・瓶	I-I	体：染付		—	4.2 16/24	—	—	R156	
9	磁器・壺口	I-I	体：矢羽根文、籠目文？、團羅		(7.3) 3/24	5.9 24/24	6.7	6	R6	肥底
10	陶器・椀	I-I	口～高台：灰釉	灰釉	(10.0) 1/24	(4.0) 6/24	5.0	—	R178	大輪相馬
11	陶器・椀	I-I	口～体：灰釉 体～手平～高台：鐵釉	灰釉	(6.6) 2/24	(3.0) 5/24	4.0	—	R172	獣足・美濃
12	陶器・椀	I-I	口～高台：灰釉 体底：鐵釉	灰釉	— 7/24	—	—	—	R179	大輪相馬
13	陶器・椀	I-I	口～高台：灰釉	灰釉	— 8/24	—	—	—	R180	大輪相馬
14	陶器・椀	I-I	口～高台：灰釉	灰釉	— 8/24	3.2 24/24	—	—	R177	大輪相馬
15	かわらけ 瓦頭	I-I	ロクロナデ、底部：倒転糸切り	ロクロナデ、油煙附着	7.6 24/24	3.7 24/24	1.4	7	R11	

第60回観察表

単位：cm

番号	機 順	層 位	特 徴		口 任 残存率	底 任 残存率	器高	写真 図版	登録番号	備 考
			外 面	内 面						
1	瓦質土器 火跡	I-I	口：ヘラミガキ 体：ロクロナデ→ヘラミガキ 底面：倒転糸切り	ロクロナデ	(24.2) 6/24	(19.4) 8/24	7.7	7	R48	
2	陶器・團餅	I-I	ロクロナデ、鐵釉	ロクロナデ、鐵釉	—	—	—	—	R50	
3	石製品 鏡	I-I	長さ：15.5、幅：7.1、厚さ：(前) 0.4～(後) 0.7						—	R12
4	堤人形	I-I	蟹唐					8	R104	
5	堤人形	I-I	化粧					—	R98	
6	堤人形	I-I	鷹					—	R141	
7	漆器・椀	I-I	体：赤色漆、草文：赤色漆	赤色漆	—	—	—	—	R15	
8	漆管・雁首	I-I	長さ：5.9、最大径：1.7、纏土接合部径：0.9					—	R1	
9	漆管・吸口	I-I	長さ：5.9、纏土接合部径：0.8、吸口径：0.4					—	R9	
10	鉄製品 鍔	I-I	長さ：18.5、最大幅：1.0					—	R15	

器椀・鉢・擂鉢・秉燭・土瓶、瓦質土器甕・火鉢、かわらけ灯明皿、堤人形、石製硯、砥石、煙管雁首・吸口、鍔釘、漆器椀が出土している。

S X1263整地層（第58図）

調査区南端部で確認した整地層である。S K1254上面を覆い、S D1255、S K1257の検出面となっている。厚さはS K1254上面で25cm前後あり、埋土は黒褐色粘土ブロックが混入するにぶい黄褐色砂質土である。

遺物は、出土していない。

IV. 考 察

ここでは、層毎に発見した遺構の年代を検討したあと、周辺の調査成果を踏まえながら各時代の概要についてまとめてみたい。

A. 遺構の年代

1. 古墳時代前期

VI層上面で発見した S I 1229竪穴住居跡、S D1230溝跡、S K1231土壙、V層上面で発見した S I 1232 竪穴住居跡、S D1233溝跡がある。このうち S I 1232、S D1233から比較的多くの遺物が出土しているが、これらを土器群としてみた場合、これまで細分されてきた枠組み（註1）の中では捉えにくい様相が認められる。したがって、S I 1232及びS D1233出土土器については器種ごとの特徴と類似する資料を求め、古墳時代前期における器形及び調整の主体的な変化と比較しながら、土器群としての編年的な位置づけについて検討してみたい。

① S I 1232竪穴住居跡出土土器

貯蔵穴及び床面から土師器鉢・器台・瓶・壺・甕が出土している。事実記載でも述べたとおり本住居跡は焼失家屋であると考えられることから、これら土器群は住居廃絶時の土器組成を示す一括性の高い資料と判断できる。

鉢は平底のものが2点出土している。いずれも体部は内彎しながら立ち上がり、体部と口縁部の境は強く屈曲している。屈曲の位置は器高の中位より上にあり、口縁部は概ね直線的に外傾している。このような鉢は、丹羽編年の第II段階に位置づけられている栗原市（旧築館町）伊治城跡S D261溝跡出土土器（註2）や辻編年のII—2期に位置づけられている名取市野田山遺跡10号住居跡出土土器（註3）のなかに認められる。しかし、外面の調整については伊治城跡S D261溝跡出土のものがヘラミガキ、野田山遺跡10号住居跡出土のものがハケメ、ケズリ、ヘラミガキを主体としており、本住居出土土器のようなヘラミガキ後全面ナデ調整を施したもののは確認できない。

器台は器高7.6cmの小型のものが出土している。口縁部は受口状に屈曲し外反しており、脚から裾部にかけては緩やかに外反しながら下方に延びている。受け部底面には貫通孔があり、脚中央部にも3ヵ所に円孔が認められる。このような器台は、辻編年のIII—3期に位置づけられている野田山遺跡4号住居跡出土土器や前期後半段階に位置づけられている佐沼城跡S D105溝跡出土土器（註4）のなかに認められる。しかし、本住居跡出土のものが受け部内外面共に口縁端部までヨコナデ後ヘラミガキが施されるのに対して、野田山遺跡4号住居跡や佐沼城跡S D105溝跡出土のものは口縁部がヨコナデのみであるなどの違いも認められる。

瓶は複合口縁をもつ單孔式のものである。器高が高く橈鉢状を呈しており、体部はやや内彎気味に外傾

（註1） 東北南部の古墳時代前期の土師器については氏家和典氏により「埴釜式」が設定され（氏家：1957）、その後各遺跡・遺構出土の一括資料をもとにした丹羽茂氏の編年（丹羽：1985）。高井・小丸底鉢・壺の変遷を変遷の軸とした次山淳氏の編年（次山：1992）、篠井・ことの型式学的な変遷をいくつの一括資料相互の比較検討の中から抽出して作成した辻秀氏の編年（辻：1993）などにより、その細分案が示されている。一方、佐久間光洋氏は登米市（田迫町）佐沼城跡S D105出土土器群の検討から、これまで細分されてきた編年のうち特に後半段階のものについて再考する必要性を示唆している（佐久間：1995）。

（註2） 築館町教育委員会「伊治城跡 平成3年度発掘調査報告書—築館町文化財調査報告書第5集 1992

（註3） 宮城県教育委員会「野田山遺跡」宮城県文化財調査報告書第145集 1992

（註4） 田迫町教育委員会「佐沼城跡」田迫町文化財調査報告書第2集 1995

している。外面の調整は口縁端部がヨコナデ、口縁部から体部がハケメ、底部付近はハケメ後ナデが施されている。このような器高の高い甌は、丹羽編年の第III段階及び辻編年のIII—4期に位置づけられている大崎市（旧古川市）留沼遺跡4層上面出土土器（註1）や前期後半段階に位置づけられている佐沼城跡S D 105溝跡出土土器、後半でもより新しい段階に位置づけている多賀城市山王遺跡S X2823出土土器（註2）などに認められるが、体部外面の調整についてはヘラケズリやナデを主体としたものがほとんどである。体部外面の調整がハケメ主体のものは、これらの前段階に多く認められるものであることから、本住居跡出土の甌も留沼遺跡や佐沼城跡のものより古い可能性が高い。

壺は複合口縁をもつものである。体部が出土していないことから他の遺跡出土土器と厳密な意味で比較することはできないが、複合部が明瞭に形成されていることや丁寧なヘラミガキが認められることから、丹羽編年の第III段階や辻編年のIII—4期のものとは異なっている。

甌：器高12.6cmの小型のもの1点と、口縁部が短く外反する器高25cm前後の大型のものが3点出土している。小型のものは、口径が15cmであり、口径と体部最大径がほぼ一致している。体部はやや張りのある球形で、最大径は中央より上にある。底部は7cm程であり、輪台充填技法が施されている。外面の調整は口縁部がヨコナデ、体部がハケメである。このような甌は、丹羽編年の第III段階や辻編年のIII—4期に位置づけられている留沼遺跡堅穴遺構出土土器に認められるが、体部外面の最終調整がケズリであることや体部の張りが弱くやや下膨らみの器形となっていることから、本住居跡出土のものよりも新しい要素が窺える。大型のものは、口径が18.5～20.8cmであり、器高の7～8割を占める。体部は球形であり、最大径は体部中央かそれより上にある。底部は直径7cm程の小さな平底であり、輪台充填技法が施されている。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、体部がハケメである。このような甌は、辻編年のII—2期に位置づけられている野田山遺跡19号住居跡出土土器や同じくIII—2期に位置づけられている栗原市（旧志波姫町）宇南遺跡第2号住居跡出土土器（註3）、丹羽編年で第II A段階に位置づけられている色麻町色麻古墳群第11号住居跡出土土器（註4）に認められる。また、いずれも口縁部が短く外反し底部に輪台充填技法が用いられている点では、次山編年の2段階（丹羽編年第II A段階、辻編年II—2・III—1期併行）に位置づけられる。

以上のように器種ごとに類似する資料を求めるに、本土器群については丹羽編年の第II A～第III段階、辻編年のII—2～III—4期と非常に時間幅のある土器群と考えられる。しかし、東海系あるいは北陸系の土器が出土していない点を考慮すれば、これらの上限を辻編年のIII—1期以降に求めることができる。一方、器高の高い甌は従来新しい要素として捉えられてきたものであるが、それ以外の器種全てが丹羽編年の第III段階や辻編年のIII—4期よりも古い段階のものと類似している。したがって、本住居跡出土土器の編年的位置づけについては、概ね丹羽編年の第II A～第II B段階、辻編年のIII—1～3期のなかに収まるものとしておきたい。

② S D1233溝跡出土遺物

出土状況を見ると小型の鉢・壺・甌のまとまりと、大型の壺・甌のまとまりに分けられる。位置がやや

（註1） 宮城県教育委員会「留沼遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書一田一」宮城県文化財調査報告書第65集 1980

（註2） 宮城県教育委員会「山王遺跡町地区の調査—県道泉塙多綾間調査報告書日一」宮城県文化財調査報告書第175集 1998

（註3） 宮城県教育委員会「宇南遺跡」「東北自動車道調査報告書一田一」宮城県文化財調査報告書第69集 1980

（註4） 宮城県教育委員会「色麻古墳群」「宮城県宮園場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書」宮城県文化財調査報告書第95集 1983

離れるものの出土した層位は同じであることから、一括性の高い資料と考えられる。

小型鉢・壺・甕は器高10cm以下のものであり、鉢では複合口縁をもつものが多い。器面調整は、外面ハケメ、内面ナデのものがほとんどであり、甕・壺などでは口縁部にヨコナデが施されている。このような小型の器種は、辻編年のII-1期に位置付けられている仙台市戸ノ内遺跡4号住居跡出土土器(注1)や同じくII-2期に位置付けられている野田山遺跡第10・19号住居跡、丹羽編年のIII段階及び辻編年のIII-4期に位置づけられている留沼遺跡4層上面出土土器や第X層上面出土土器(注2)など前期全般をとおして認められる。このうち留沼遺跡出土地のものは外面ナデのものが圧倒的に多く、ハケメを主体とする本溝跡のものはそれよりも古い段階のものと考えられる。

甕は複合口縁をもつ單孔式のものである。器高が高く擂鉢状を呈しており、体部はやや内彎気味に外傾している。外面の調整は口縁部が指頭によるオサエ、体部がハケメ後ナデ、底部付近がナデである。このような甕は、丹羽編年のIII段階及び辻編年のIII-4期に位置づけられている留沼遺跡4層上面出土土器や後半段階に位置づけられている佐沼城跡S D105溝跡出土土器、後半でもより新しい段階に位置づけている山王遺跡S X2823出土土器に類似がある。底部の突出が弱く、ハケメやナデが多用される点では佐沼城跡S D105溝跡出土のものに近い。

壺には複合口縁をもつ大型のもの(A類)と、頸部から口縁部が長く直線的に外傾するもの(B類)がある。A類は、口径が17cm前後、器高が32cm前後のものである。体部は球形であり、最大径は体部中央付近にある。底部は径8cm程の小さな平底であり、輪台充填技法が施されている。外面の調整は口縁部がハケメ後ヨコナデ、頸部から体部がハケメ後ヘラミガキである。このうち体部のハケメはほとんどが縦方向のヘラミガキによって消されており、部分的にその痕跡が確認できるのみである。このような複合口縁をもつ大型の壺は、辻編年のII-2期に位置づけられている野田山遺跡22号住居跡出土土器や同じくIII-3期に位置づけられている石巻市田道町遺跡第5号土壤出土土器(注3)、前期後半段階に位置づけられている佐沼城跡S D105溝跡出土土器に認められる。このうち、田道町遺跡第5号土壤出土のものは最大径の位置が体部下方に下がり気味であり、ヘラミガキも非常に粗くなっている。B類には、口径10.1cm、器高13.7cmの小型のものと、口径14.3cm、器高23.1cmの大型のものがある。体部はいずれもやや扁平な球形である。小型のものは頸部がやや内彎気味に外傾しており器高に占める頸部高の割合が大きいのに対し、大型のものは小型のものより頸部の外傾度が大きく器高に占める頸部高の割合も小さい。外面の調整は口縁部がヨコナデ、頸部から体部がハケメ後ヘラミガキである。このうち体部のハケメはほとんどが縦方向のヘラミガキによって消されており、部分的に確認できるのみである。このような壺は、辻編年のII-2期に位置づけられている仙台市伊古田遺跡出土土器(注4)、丹羽編年のII B段階や辻編年のIII-3期に位置づけられている栗原市(旧志波姫町)鶴ノ丸遺跡第6号住居跡出土土器(注5)や美里町(旧小牛田町)山前遺跡大溝出土土器(注6)、丹羽編年のIII段階や辻編年のIII-4期に位置づけられている留沼遺跡竪穴遺構出土土器などに認められる。

甕は体部がやや縦長で、口縁部が直立気味に立ち上がるものである。器高は26cmであり、体部最大径は

(注1) 仙台市教育委員会「戸ノ内遺跡」仙台市文化財調査報告書第70集 1984

(注2) 古川市教育委員会「留沼遺跡」宮城県古川市文化財調査報告書第25集 1999

(注3) 石巻市教育委員会「田道町遺跡」石巻市文化財調査報告書第7集 1995

(注4) 仙台市教育委員会「伊古田遺跡」「仙台市高速鉄道関係道路調査報告」仙台市文化財調査報告書第69集 1981

(注5) 宮城県教育委員会「鶴ノ丸遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書-V-」宮城県文化財調査報告書第81集 1981

(注6) 小牛田町教育委員会「山前遺跡」1976

中央よりやや上方にある。底部は直径7cm程の小さな平底であり、輪台充填技法が施されている。外面の調整は口縁部がハケメ後ヨコナデ、体部がハケメ、底部がケズリ後ハケメである。このような甕は、丹羽編年の第II B段階、辻編年のIII-1期に位置づけられている鶴ノ丸第7住居跡出土遺物に認められるが、口縁部を肥厚させたものや体部外面にヘラミガキを施すものがあるなど、細部においての違いも指摘できる。

以上のように器種ごとに類似する資料を求めるに、本土器群については丹羽編年の第II A～第III段階、辻編年のII-1～III-4期と非常に時間幅のある土器群と考えられる。しかし、東海系あるいは北陸系の土器が出土していない点を考慮すれば、これらの上限を辻編年のIII-1期以降に求めることができる。一方、壺B類など前期全般をとおして変化が乏しいものがあり、どの段階に位置するか明確にできないものも存在する。しかし、それ以外のものは全て丹羽編年の第III段階や辻編年のIII-4期より古い段階のものと類似していることから、本住居跡出土土器の編年的位置づけについては、概ね丹羽編年の第II A～第II B段階、辻編年のIII-1～3期のなかに収まるものとしておきたい。

③その他遺構の年代

出土土器の検討から、V層上面で発見したS I 1232竪穴住居跡とS D 1233溝跡は、丹羽編年の第II A～II B段階、辻編年のIII-1～3期の範疇に収まるものと考えられた。一方、VI層上面検出のS I 1229竪穴住居跡やS D 1230溝跡、S K 1231土壌については、遺物がほとんど出土していないため年代について明らかにすることはできなかった。これらを直接覆うV層から、辻編年でII-2期に位置づけられている名取市野田山遺跡10号住居跡出土のものと類似する土師器鉢が出土していることから、この頃に年代の一端を求めることもできよう。しかし、上述したとおり遺物が極めて少ないとから、ここでは前期でも古い段階になる可能性を示唆するにとどめておきたい。

2. 古墳時代中期

IV層上面で発見したS I 1234・1236・1237竪穴住居跡、S K 1239土壌がある。また、埋土の特徴から、S I 1235竪穴住居跡、S D 1238溝跡も該期の可能性が高い。

S I 1234竪穴住居跡では、カマド内埋土や床直上から土師器杯・高杯・壺、白玉が出土している。床直上に堆積する炭化物層や炭化材の存在から焼失家屋であると考えられ、出土遺物は少ないものの住居廃絶時の一括資料とができる。杯は、底部まで確認できたものは全て平底のものである。体部が直線的に外傾し口縁端部が僅かに内彎するものと、体部が内彎しながら立ち上がり口縁端部で屈曲し外反する平底のものがある。また、体部へ口縁部の破片ではあるが、赤彩が施されたものも1点出土している。高杯は円錐状の脚部のみが出土している。脚部と裾部の境に明確な屈曲は認められず、裾端部が僅かに外反している。壺は口縁部が短く直線的に外傾する小型のものであり、体部最大径に比べて口径が非常に小さい。

これら出土土器を見てみると、杯については概ね中期全般をとおして認められるものである。一方、円錐状の脚部をもつ高杯は中期でも古い段階に多く確認されているが、脚部と裾部の境に屈曲を持たないものは鴻ノ巣遺跡における工藤氏の編年(註)でI期3段階からIII期にかけて認められる。壺についても5世

(註) 仙台市教育委員会「鴻ノ巣跡第7次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第280集 2004

紀後半頃に位置づけられる鴻ノ巣遺跡第1号住居跡出土土器（註1）に類似するものがある。したがって、本住居跡については5世紀後半頃のものと捉えることができる。このことは、住居内埋土から出土した須恵器甕がTK208～23型式期のものと類似していることとも年代的に矛盾するものではない。

S I 1236竪穴住居跡では、床直上から丸底の土師器甕が3点出土している。底部から体部まで緩やかに内湾しながら立ち上がり口縁部に達するものと、底部から体部は内湾しながら立ち上がるが口縁部が屈曲し外反するものがある。前者は5世紀中頃に年代の一端が求められている山王遺跡SD3369溝跡出土土器（註2）、後者は5世紀中葉頃の年代が与えられている村田町新峯崎遺跡土壇出土土器（註3）やTK208型式以降と考えられている合戦原遺跡第II群土器（註4）にそれぞれ類似するものがある。したがって、本住居跡の年代については概ね5世紀中葉～後半頃と考えておきたい。

S I 1237竪穴住居跡では、床面から石製模造品（有孔円板）2点、掘り方埋土から土師器壺・甕が出土している。甕は把手部分のみの出土であるが、大型のものと推測される。把手付の大型甕については5世紀後半頃に位置づけられる鴻ノ巣遺跡第1号住居跡に類似があることから、本住居跡についてもその頃に年代の一端を求めておきたい。

3. 奈良・平安時代

IV層上面で発見したSE1248井戸跡、SD1240・1241・1242・1243溝跡、SK1244・1245土壇がある。また、埋土の特徴から、SK1246土壇も該期の可能性が高い。

SE1248井戸跡では、掘り方埋土及び抜取り穴埋土から平瓦II B類が出土している。平瓦II B類は多賀城政庁II期以降の瓦群に位置づけられていることから、SE1248の年代についても8世紀中葉以降と考えられる。

SD1240溝跡からは、須恵器杯III類が出土している。底口比が46、径高指数が31であり、後述するSD1242溝跡出土のものと比べると、底径が小さく器高の高いものである。このような須恵器杯は、延暦9年（780）～24年（805）の年代が与えられている市川橋遺跡SX1351C河川跡出土土器（註5）や、その他9世紀のものに多く認められる。一方、山王遺跡多賀前地区の成果（註6）によると、10世紀前葉とされている第4群土器段階の須恵器杯では底部の切り離しが回転糸切り無調整（V類）のものが主体となることや、底口比も40前後と9世紀のものに比べ底径が小さくなる傾向が認められており、SD1240出土須恵器杯よりも新しい様相と捉えることができる。これらのことから、SD1240溝跡の年代については、8世紀後葉～9世紀代のものとすることができる、重複関係で灰白色火山灰が二次堆積するSK1244土壇より古いこととも矛盾しない。

SD1242溝跡からは、ほぼ完全な形の土師器杯A II類1点、須恵器杯I a類1点、II a類1点、III類2点、V類1点が出土している。土師器杯A II類は、外面調整は口縁部がヨコナデ、それ以外はヘラケズリであ

（註1）宮城県教育委員会「(5)岩切鴻ノ巣遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書！」宮城県文化財調査報告書第35集 1974
なお、仙台市藤田新田遺跡の報告では、鴻ノ巣遺跡第1・2号住居と同時期としている第II群土器の年代について、S I 201竪穴住居から出土した土師器甕が陶器式ON46からTK208段階前後の須恵器を標記したものであるとし、5世紀後半代の年代をうなげている。

（註2）宮城県教育委員会「山王遺跡II期土器調査報告書」宮城県文化財調査報告書第175集 1998

（註3）村田町教育委員会「新峯崎遺跡」宮城県村田町文化財調査報告書第9集、1991

なお、5世紀前半頃に位置づけられている鴻ノ巣遺跡I・II・6住居出土土器（仙台市教育委員会：2004）にもこれと類似するものがあることから、主体的ではないものの中の間全般をとおして認められる形態と考えられる。

（註4）宮城県教育委員会「合戦原遺跡」「合戦原遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第140集、1991

（註5）多賀城市教育委員会「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II－」多賀城市文化財調査報告書第70集 2003

（註6）宮城県教育委員会「山王遺跡IV」宮城県文化財調査報告書－多賀前地区考察編－宮城県文化財調査報告書第171集 1996

り、内面はヘラミガキ後黒色処理が施されている。須恵器杯は底口比が55～65、径高指数が22～32である。いずれも口径に対する底径の比率が大きく、再調整を施すIa・IIa類や底部回転系切り無調整のV類でやや器高が高い傾向が認められる。本地区周辺でこれらと類似するものには、8世紀中頃と考えられている山王遺跡S D180B溝跡出土土器(註1)や8世紀後葉頃～延暦9年(790)の年代が与えられている市川橋遺跡S X1351B河川跡出土土器(註2)がある。S D180B溝跡では、土師器杯A I・II類、須恵器杯Ia・II・IIa・III類があり、口径比が53～69(56～64中心)、径高指数が21～31(25～31中心)と、S D1242出土土器と近似している。一方、S X1351B河川跡では、土師器杯A II類とB II類、須恵器杯I・II・III類が出土している。須恵器杯では口径比が50～74(52～63中心)、径高指数が25～31(27～29中心)であり、S D1242出土土器に比べると僅かではあるが底口比が小さくなる傾向が窺える。土師器杯B類が出土していないことや須恵器杯の底口比及び径高指数を考慮すれば、S D1242出土土器はS D180B出土土器により近く、8世紀中頃のものと考えられる。なお、須恵器杯V類についてはS D180B溝跡では確認されていないが、8世紀中頃とされている利府町硯沢窯跡B 2号窯跡出土土器(註3)に類例があることから、年代的に矛盾するものではない。

S K1244土壤は埋土に灰白色火山灰が二次堆積していることから、10世紀前葉以降の年代が与えられる。S K1245土壤については、底面に灰白色火山灰が自然堆積していることや、その上面に間層が堆積することなく人為的に埋め戻されていることから、10世紀前葉頃のものであると考えられる。

S D1241・1243については出土遺物がなく年代決定の資料に乏しいが、いずれも後述する中世の遺構検出面であるⅢ層に覆われていることから、ここでは中世には下らないものとしておきたい。

4. 中世

Ⅲ層上面で発見したS K1249・1250土壤や、無釉陶器壺が出土しているS K1247土壤が該期の遺構と考えられる。

S K1250土壤からは、施釉陶器折縁皿の口縁部が出土している。藤澤良祐氏の古瀬戸編年(註4)で後IV古段階のものと類似していることから、15世紀中頃以降の年代が求められる。

S K1249土壤からは、無釉陶器壺の小片が出土している。具体的な年代は明らかではないが、これより新しいS K1250土壤が15世紀中頃以降のものであることから、S K1249の年代については15世紀中頃より古い可能性も考えられる。

S K1247土壤からは無釉陶器壺の小片が出土している。具体的な年代を示す資料は得られなかつたことから、ここでは中世の範疇で捉えておきたい。

(註1) 多賀城市埋蔵文化財調査センター「山王遺跡—第10次発掘調査概報—」多賀城市文化財調査報告書第27集 1991

(註2) 多賀城市教育委員会「市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ—」多賀城市文化財調査報告書第70集 2003

(註3) 宮城県教育委員会「硯沢・大沢遺跡は?」宮城県文化財調査報告書第110集 1987

(註4) 藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界」瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念シンポジウム資料集 1996

5. 近世

発見した層位や出土遺物、遺構の重複関係などから、S D1251・1252・1253・1255溝跡、S K1254・1256・1257・1258・1259・1260・1261土壌、S X1262・1263整地層が該期の遺構と考えられる。ほとんどのものが調査区南端に集中しており、中央及び北側にはS K1258・1259土壌が分布するのみである。このうち南側で発見した遺構群については、S X1263整地層下層のもの（A期）と上層のもの（B期）に大別することが可能である。また、S X1262整地層はB期の遺構全てを覆っており、比較的多くの陶磁器が出土している。したがって、ここではS X1262整地層出土土器の年代を明らかにしII層上面検出遺構の下限年代を設定した後で、これに直接覆われるB期遺構、続いてS X1263整地層下層のA期遺構の順に年代を検討してみたい。

S X1262整地層は、多量の炭化物と明黄褐色粘土が混入する人為的な埋め土であり、磁器椀・小皿・猪口・小杯・水滴・瓶、陶器椀・鉢・擂鉢・秉燭・土瓶、瓦質土器甕・火鉢・かわらけ灯明皿、堤人形、石製硯、砥石、煙管雁首・吸口、鎌釘、漆器椀が出土している。このうち陶磁器類をみると陶器の出土数が最も多く、破片も含めると全体の7割近くに達する。磁器では判別できるものは大部分が肥前産のものであり、僅かに瀬戸・美濃産端反椀の小片が含まれる。肥前産の椀には丸形と筒形のものがあり、筒形椀が大半を占めている。野上建紀氏の編年（註1）によると、これらは概ね18世紀後葉～19世紀前葉頃に位置づけられる。同様に皿・猪口については18世紀代、小杯については18世紀後葉～19世紀前葉頃のものと類似している。陶器では産地が明らかかなものは大堀相馬産のもののがほとんどであり、そのうち椀類が9割以上を占めている。瀬戸・美濃産の秉燭、肥前産の椀も僅かに認められるが、陶器全体の1割にも満たない。大堀産の椀は底部の破片が多く全体が明らかかなものは少ないが、関根達人氏の編年（註2）で19世紀初頭～前葉頃とされている端反椀も數点確認できる。擂鉢は、仙台城二の丸跡第9地点で発見された文化元年（1804）の火災を下限とする2号池出土遺物（註3）のなかに類例が認められる。以上のことから、S X1262出土陶磁器は18世紀後葉～19世紀前葉頃のものが主体となっていることが明らかであり、19世紀前葉を下限年代とすることができる。

①B期遺構群の年代

S D1255溝跡からは、磁器椀・皿・瓶、陶器椀・鉢・擂鉢・焙烙、瓦質土器火鉢・焜炉形土器・火消壺蓋、堤人形、錢貨（古寛永錢）、煙管雁首・釘・砥石、漆器椀、木製落し蓋が出土している。このうち陶磁器類をみると陶器の出土数が最も多く、破片も含めると全体の7割を超えている。磁器では判別できるものはほとんどが肥前産のものであり、ほかに瀬戸・美濃産の広東椀が1点含まれる。肥前産の椀には丸形と筒形のものがあり、野上氏の編年で18世紀後葉～19世紀前葉頃のものと考えられる。瀬戸・美濃産の広東椀は、18世紀後葉～19世紀中頃の年代が与えられている東京都新宿区市谷左内町遺跡Ⅰ第113土壌出土遺物（註4）のなかに類似するものが認められる。陶器では、産地が明らかかなものは全て大堀相馬産のものであり、このうち約7割が碗で占められている。関根氏の編年で18世紀末～19世紀初頭頃とされているもののが多く認められるが、19世紀初頭～前葉頃に位置づけられている腰折椀も出土している。広東椀の年代観にやや幅があるものの、重複関係で後述するS K1256土壌よりも古いことから、S D1255については概

（註1） 野上建紀「磁器の編年（色絵以外）1、椀・小杯・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 2000

（註2） 関根達人「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大學理藏文化財調査年報10』 1998

（註3） 東北大學理藏文化財調査研究センター「東北大學理藏文化財調査年報8」 1997

（註4） 新宿区大日本印刷遺跡調査班「市谷左内町遺跡Ⅰ」東京都新宿区 1998

ね19世紀初頭～前葉頃と捉えておきたい。

S K1256土壤からは、磁器椀・水滴・陶器椀・皿・秉燭、かわらけ灯明皿・瓦質土器甕・火鉢・火消壺蓋・石製硯・堤人形、銭貨（新寛永錢）、煙管吸口、漆器椀、木製曲物が出土している。このうち陶磁器類をみると陶器の出土数が最も多く、破片も含めると全体の9割にも達する。磁器では判別できるものは全て肥前産のものであり、特に水滴は川副麻理子氏の編年（註1）で1780～1860年代としているものと同じものである。陶器では、産地が明らかなものはほとんどが大堀相馬産のものであり、約7割が椀で占められている。関根氏の編年で18世紀後葉～19世紀初頭頃とされているものが多いが、19世紀初頭～前葉頃に位置づけられている端反椀も認められる。磁器水滴の年代観にやや幅があるものの、上面を覆うS X1262整地層の下限年代が19世紀前葉頃であることから、S K1256土壤については19世紀初頭～前葉頃の遺構としておきたい。

S D1257土壤からは磁器椀・皿、陶器椀・片口鉢・灯明皿・瓦質土器甕・堤人形、砥石、煙管吸口、木製下駄・曲物が出土している。このうち陶磁器類は破片を含めても20数点と非常に少ない。磁器では判別できるものは全て肥前産のものである。皿は高台が小さく見込みには蛇の目釉剥ぎが行われており、中野雄二氏による波佐見焼の編年（註2）でV-2・3期（1750～1810年代）のものと類似している。陶器では瀬戸・美濃産のものが僅かに認められるものの、産地が明らかなものはほとんどが大堀相馬産のものである。このうち大堀産の腰張椀には、口縁部から体部に鉄絵が施されたものが認められる。大堀相馬焼における鉄絵製品については、18世紀末～19世紀初頭にかけて出現することが指摘されており（関根：1998）、器形的にも関根氏の編年でこの頃に位置づけられるものと類似している。片口鉢は仙台城二の丸跡第9地点で発見された18世紀末葉～19世紀初頭頃と考えられている3号溝出土土器（註3）のなかに類例が認められる。一方、瀬戸・美濃産の陶器には、近世瀬戸村産陶器を扱った藤澤良祐氏の編年（註4）で第3段階第8小期から第10小期頃に生産していたと考えられている鎧茶碗の小片がある。鎧茶碗の年代にやや幅があるものの、上面を覆うS X1262整地層の年代が19世紀前葉頃であることから、S K1257土壤については19世紀初頭～前葉頃の遺構と考えておきたい。

S K1260土壤からは、磁器椀・小杯・皿・猪口、陶器椀・皿・片口鉢・擂鉢・火入れ・焰烙、かわらけ灯明皿・瓦質土器甕・火鉢・瓦、石製硯・堤人形、煙管吸口、鎌、下駄が出土している。陶磁器類をみると、破片も含めた磁器と陶器の出土数は概ね半々である。磁器では判別できるものは全て肥前産のものである。このうち椀には丸形と筒形のものがあり、野上氏の編年で18世紀後葉～19世紀前葉頃のものと考えられる。陶器椀では、肥前産のものも僅かに認められるものの、産地が明らかなものはほとんどが大堀相馬産のものである。このうち大堀相馬産の腰折椀には19世紀初頭～前葉頃とされる相馬藩領旧井出村高倉地区荒木氏宅窯跡採集遺物（関根：1998）や仙台城二の丸跡第17地点で発見された文化元年（1804）の火災後の整地層とされている皿層出土土器（註5）のなかに類似するものがある。したがって、S K1260については19世紀初頭～前葉頃の遺構としておきたい。

S K1261土壤は19世紀前葉頃を下限としたS X1262より古く、19世紀初頭～前葉頃としたS D1255やS K1260よりも新しいことから、概ね19世紀前葉のなかで収まるものと考えられる。

（註1） 川副麻理子「磁器の編年（色鉛筆以外）4、仏壇・水滴・人形・灯火具・緒縞玉・戸車」『九州近世陶磁学会 2000

（註2） 中野雄二「波佐見『九州陶磁の編年』」九州近世陶磁学会 2000

（註3） 東北大学埋蔵文化財調査研究センター「東北大学埋蔵文化財調査年報8」、1997

（註4） 藤澤良祐「近世瀬戸村の迷房式登窓」『瀬戸市史 陶磁史編 六』、1998

（註5） 東北大学埋蔵文化財調査研究センター「東北大学埋蔵文化財調査年報18」、2005

②A期遺構群の年代

S D1252溝跡からは、磁器皿・紅猪口、陶器椀・皿・鉢・擂鉢が出土している。磁器皿・紅猪口は肥前産のものである。このうち紅猪口については、野上氏の編年で18世紀代とされているものと類似している（註1）。陶器擂鉢は近世赤津村産陶器を扱った藤澤良祐氏の編年（註2）で第2段階第6小期前半に位置づけられる擂鉢ⅠD類と類似している。これら遺物の年代観より、S D1252溝跡は概ね18世紀代のものと考えておきたい。

S K1254土壙からは、陶器椀・仏飯器、瓦質土器火鉢、堤人形が出土している。陶器椀は産地が明らかなるものは大堀相馬産のものであり、関根氏の編年で18世紀後葉頃に位置づけられるものと類似している。仏飯器は小野相馬産であるが、年代については明らかでない。したがって、ここでは陶器椀の年代より、S K1254については18世紀後葉頃のものとしておきたい。

このほか、遺物がほとんど出土しなかったS D1251・1253溝跡は、18世紀後葉頃としたS K1254土壙より古いことからそれ以前のものである。

③その他

整地層と重複しない遺構に、S K1258・1259土壙がある。S K1258土壙からは瓦質土器、S K1259土壙からは石製鏡、堤人形が出土している。このうち堤人形については18世紀中頃には作製されていたことが明らかであり（註3）、S K1259についてはそれ以降の年代が与えられる。S K1258については、重複関係でS K1259よりも新しいことから、年代はさらに下るものと考えられる。

B. 各時代の概要

1. 古墳時代前期（第61図）

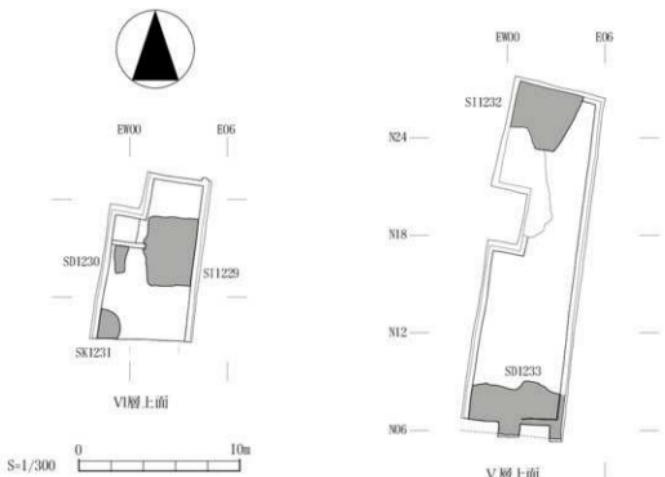
竪穴住居跡2軒、溝跡2条、土壙1基を発見した。本地区周辺では、八幡地区で竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟が発見されており、現在の県道付近の微高地上に集落本体が存在していると推測されていた。今回発見した竪穴住居跡や溝跡は、遺構面を逆えて2時期認められることや、V層上面検出のものは比較的多くの遺物を伴っていることから、該期の集落の様相がより具体的になってきたものといえよう。一方、VI層上面で発見したS I 1229竪穴住居跡については非常に残存状況が悪く、床上面が黄灰色砂質土であるV層に直接覆われている。同じVI層上面のS D1230溝跡でも埋土がすべてV層であり、極めて短期間に堆積したものであることが明らかである。このことから、VI層上面で検出した遺構については大規模な沖積作用によって埋没した可能性が考えられる。

ところで、V層上面で発見したS I 1232竪穴住居跡は古墳時代中期の検出面であるIV層の約30cm下層で確認したものであり、ほぼ同位置で発見した中期のS I 1234竪穴住居跡にほとんど破壊されることなく残存していた。このことは、本地区周辺の微高地上には、良好な状態で前期の集落が存在している可能性を示唆するものといえよう。

（註1） 18世紀のものに比べ19世紀のものは高台が小型化する傾向が指摘されている。

（註2） 藤澤良祐「近世赤津村の連房式發窓」『瀬戸市史 陶磁史編 六』1998

（註3） 元文2年（1737）に死去した「針生九右衛門」館の型が現存している。

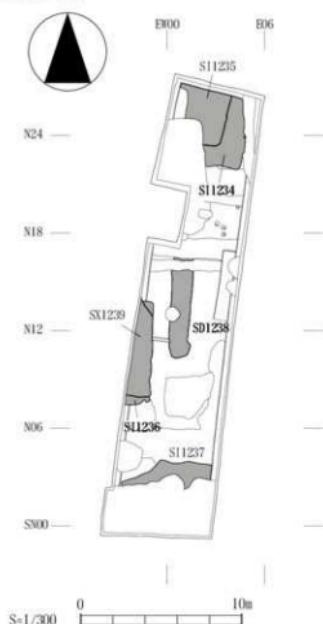


第61図 古墳時代前期の遺構模式図

2. 古墳時代中期（第62図）

5世紀中葉～後半頃の竪穴住居跡が発見され、集落の一部であったことが明らかとなった。このうちS I 1234とS I 1235が重複していることから、少なくとも2時期の変遷があることが明らかである。調査区の制限上、住居跡全体の規模が明らかなものはないが、S I 1234・1236は1辺6mを超えるものと考えられる。また、S I 1234からT K 208～23型式期の須恵器罐が出土している。本地区周辺では東町浦・西町浦・町地区などで5世紀中葉～後葉頃の須恵器が比較的多く確認されており、同時期の一般集落とは様相が異なることが指摘されている（註）。

さて、本遺跡内では東側の八幡地区で多数の竪穴住居跡や土壙、ゴミ捨て場と考えられている遺物包含層等が発見されており、出土した遺物から中期でも古い段階に位置づけられている。一方、西側の町・西町浦地区で発見された竪穴住居跡や溝跡、土壙については中期でも中頃～後半頃のものであることから、本遺跡内の集落については新しくなるにしたがい東から西へ



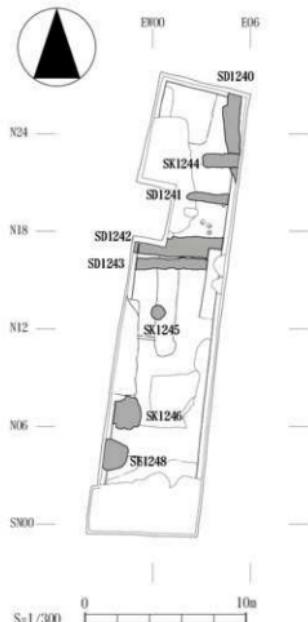
第62図 古墳時代中期の遺構模式図

（註）高倉敏明「山王遺跡」『多賀城市史4考古資料』多賀城市 1991

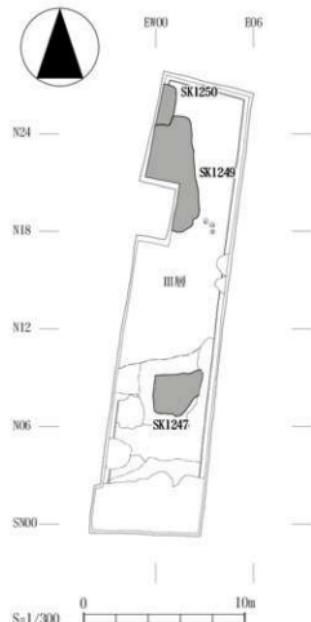
移動した可能性が考えられている（註）。今回の調査でも5世紀前半に遡るような遺構・遺物が発見されなかつたことは、そのような推測を概ね否定するものといえよう。

3. 奈良・平安時代（第63図）

井戸跡1基、溝跡4条、土壙3基を発見した。このうち、SD1242が8世紀中頃、SD1240が9世紀代、SK1245が10世紀前葉頃、SK1244が10世紀前葉以降のものである。さて、8世紀後葉～10世紀前葉にかけては、多賀城南面において方格地割りが段階的に施工・整備される時期である。本遺跡東半部では、地割り施工の基準となった東西大路や東西・南北の小路をはじめ掘立柱建物跡や井戸跡などが多数発見されている。また、地割りの範囲外と考えられていた町・伊勢地区においても、北2東西道路跡が発見され、それに面した地区には掘立柱建物跡が密集していたことが明らかとなっている。これに比べると、本地区は東西大路推定線に近接しているものの、方格地割り内や町・伊勢地区に見られるような建物跡は確認されず、その他の遺構も極めて少ない。一方、SD1242溝跡は、本調査区における古代の遺構としては最も古く、8世紀中頃に位置づけたものである。幅1.4mと比較的の規模も大きく直線的に延びていることから、何らかの区画溝になる可能性も考えられる。



第63図 奈良・平安時代の遺構模式図



第64図 中世の遺構模式図

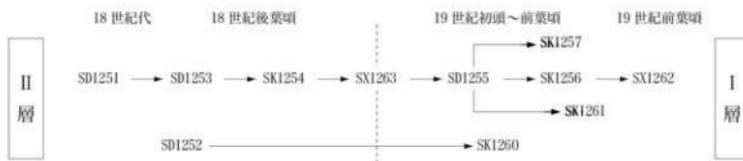
（註）宮城県教育委員会「山王遺跡町地区の調査」宮城県文化財調査報告書第175集 1998

4. 中世（第64図）

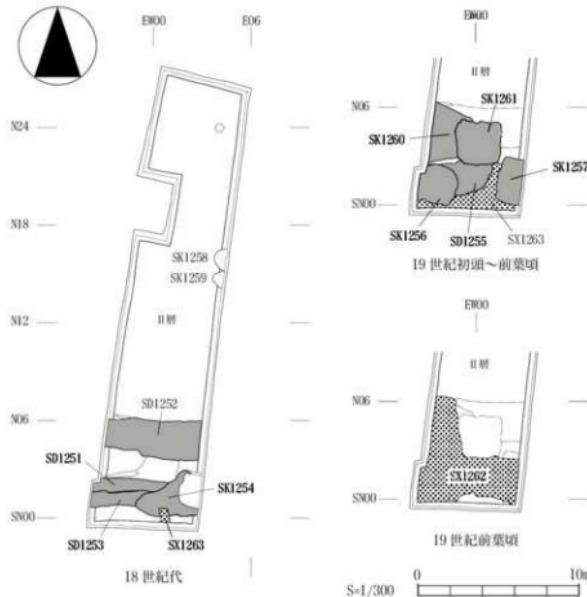
S K1247・1249・1250土壤がある。このうちSK1249は南北7.1m、東西3m以上、深さ1.1mと大規模な土壤である。本遺跡内では、東側の伏石・八幡地区や南側の前田・中山王、南西部の掃下し地区などで中世の屋敷跡が発見されているものの、町・伊勢地区周辺では該期の遺構はこれまで確認されていなかった。今回は遺構の性格などを具体的に示す資料は得られなかつたものの、この時期の遺構が本地区周辺にも分布していることが明らかとなつた。

5. 近世（第65・66図）

これまでの調査成果を見ると、町・伊勢地区では大規模な溝によって区画された敷地内から18世紀後半



第65図 近世の遺構変遷図



第66図 近世の遺構模式図

～19世紀頃の掘立柱建物跡や井戸跡、池跡、土壙などが発見されている。このうち町地区で発見した屋敷跡は、南北100m以上にも及ぶものである。敷地内部の構成をみると、街道に面した南側に建物や井戸を配した居住空間が広がっているものの、北側では池や土壙が若干確認される以外は閑散とした状況であったことが確認されている。一方、西町舎地区でも大規模な区画溝や井戸跡を発見しており、出土した陶磁器類や「天保十一年」銘の木札、「嘉永三年」銘の竹製品などから、19世紀中頃の年代が与えられている。このようなことから、江戸時代後期頃、本地区周辺には塩釜街道沿いに屋敷が立ち並んでいたものと推測される。

さて、今回の調査区では南側で S D1251・1252・1253・1255溝跡、S K1254・1256・1257・1258・1259・1260・1261土壙、S X1262・1263整地層を発見しており、18世紀代の溝跡群→19世紀初頭～前葉頃の土壙群→19世紀前葉頃の整地層といった土地利用の変遷を把握することができた（第65・66図）。これら溝跡や土壙からは多くの陶磁器をはじめ金属製品、木製品、堤人形、硯等が出土しており、周辺の調査区と同じく街道に面した屋敷跡の一部であると考えられる。位置的には街道の南側にあることから、発見した18世紀代の溝跡は敷地南端の区画溝である可能性が高い。一方、調査区北側には、18世紀以降の S K1258・1259が確認されるものの、大部分が空閑地となっている。本調査区は県道（旧塩釜街道）より30mほど奥まった位置にあることから、前述した町地区と同様な屋敷の構造をとると考えれば、県道と本調査区にはさまたれた部分に居住空間を想定できよう。

ところで、本調査区周辺は、17世紀初頭に伊達家家臣成田左馬重勝が移住した地とされているものの、町地区や西町舎地区で発見した遺構は18世紀後半～19世紀頃のものが主体であり、17世紀にまで遡る遺構は確認されていない。伊勢地区では17世紀初め頃まで遡る可能性のある溝跡が1条確認されているものの、発見した遺構のほとんどが18世紀後半～19世紀以降のものと考えられている。本地区でも発見した遺構の年代は18世紀後半～19世紀前葉頃に限られており、これまでの町・伊勢地区的成果と同様である。このような状況から判断すれば、本地区周辺は18世紀後半以降に整備された可能性が高く、17世紀初頭の成田氏移住との関連性を窺わせるような遺構については現時点では不明と言わざるを得ない。

V. まとめ

1. 古墳時代前期・中期、奈良・平安時代、中世、近世の遺構を発見した。
2. 古墳時代前期では竪穴住居跡や溝跡を発見し、これまで推測の域を出なかったこの頃の集落が本地区周辺の微高地上にあることが明らかとなった。遺構も良好な状態で残存していることから、今後も調査を進め集落の広がりや構造を解明する必要があろう。
3. 古墳時代中期では竪穴住居跡4軒を発見した。中期でも新しい段階のものであり、この頃の集落がさらに西に広がることが明らかとなった。
4. 古代では井戸跡や溝跡、土壙を発見したが、遺構の分布は閑散としている。
5. 中世では土壙3基を発見し、本地区周辺にもこの頃の遺構が存在することが明らかとなった。
6. 近世では18世紀後半～19世紀前葉の屋敷跡南端部を調査し、区画溝や土壙を発見した。周辺の調査成果から判断して、県道沿いにはこの頃の遺構が広範囲に分布している可能性が高い。



調査区全景 (IV層上面・北より)

写真図版1





S D 1251・1253溝跡
(西より)



S K 1258・1259土壤
(南西より)



S E 1248井戸跡
(東より)



S I 11234堅穴住居跡
(北より)



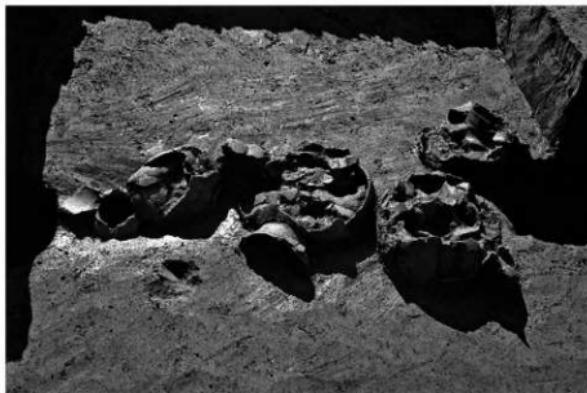
S I 11232堅穴住居跡
(北より)



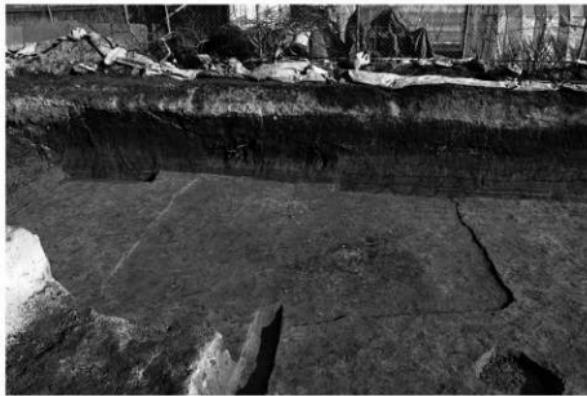
S I 11232堅穴住居跡
遺物出土状況
(北より)



S D1233溝跡
(北より)



S D1233溝跡遺物出土状況
(B地点)



S I1229竪穴住居跡
(南西より)



R1-1



R2



R3



R1-2



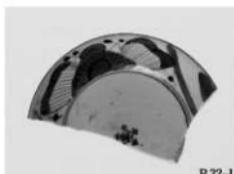
R15



R14



R6



R32-1



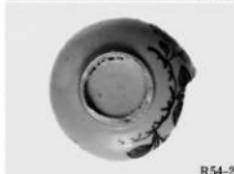
R54-1



R25



R32-2



R54-2



R41



R20



R37



R46

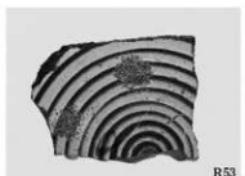


R43

R 1 : 第59図 1
R 2 : 第59図 2
R 3 : 第59図 3
R 15 : 第44図 3
R 14 : 第44図 1

R 6 : 第59図 9
R 25 : 第52図 2
R 32 : 第46図 7
R 54 : 第52図 1
R 41 : 第54図 3

R 20 : 第52図 5
R 37 : 第47図 1
R 46 : 第54図 7
R 43 : 第42図 2



R53



R48



R47



R38



R11



R28



R5-1



R6-1



R8-1



R5-2



R6-2



R8-2

R53 : 第52図11

R48 : 第60図1

R47 : 第53図1

R38 : 第47図6

R11 : 第59図15

R28 : 第52図9

R5 : 第55図2

R6 : 第55図1

R8 : 第48図1

R20 : 第27図1

R21 : 第27図2



R1-I



R1-I



R1-I



R1-I



R1-I

上：各遺構出土
R105：第45図7
R104：第60図4
R107：第54図8



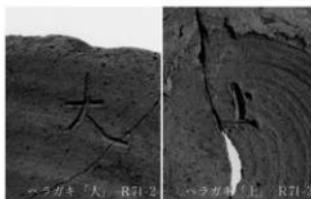
R70



R71-I



R72



R71-2

R71-3



R58



R64



R56



R57



R65



R59

R70 : 第29図5
R72 : 第29図6
R71 : 第29図4

R58 : 第18図3
R64 : 第18図1
R56 : 第20図1

R57 : 第20図2
R65 : 第18図6
R59 : 第18図5



上：S I 1232竖穴住居跡出土遺物

下：

D1233溝跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	さんのういせき							
書名	山王遺跡							
副書名	第58次調査報告書							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第86集							
編著者名	武田健市							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL 022-368-0134							
発行年月日	西暦2006年7月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山王遺跡 (第58次)	宮城県 多賀城市 南宮字町19	042099	18013	38度 18分 03秒	141度 58分 17秒	20051005 ~ 20060130	163m ²	長屋新築
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山王遺跡 (第54次)	集落・都市・ 屋敷	近世	区画溝、土壙	磁器、陶器、瓦 質土器、かわら け、漆器、下駄、 曲物、錢貨、煙 管、硯		溝、土壙から多数の 陶磁器、木製品出土		
				無軸陶器		大規模な土壙を発見		
		古代	井戸、溝、土壙	土師器、須恵器、 曲物		8世紀中頃の溝跡を 発見		
				土師器、須恵器、 石製模造品		集落の一部を発見 豊穴住居から須恵器 ハソウ出土		
				土師器		集落の一部を発見 豊穴住居や溝から多 くの土師器出土		

多賀城市文化財調査報告書第86集

山王遺跡

第58次調査報告書

平成18年7月31日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市六丁の目西町2-10

電話 (022) 288-6123
